

K- 523

米沢市埋蔵文化財調査報告書 第26集

覚範寺

第Ⅰ次・第Ⅱ次
発掘調査報告書

平成元年11月

米沢市教育委員会

覚範寺

第Ⅰ次・第Ⅱ次 発掘調査報告書

平成元年11月

米沢市教育委員会

(表紙題字は米沢市教育委員会教育長小口亘による)

序 文

この報告書は昭和62年度、63年度にわたり伊達政宗の父輝宗の菩提寺跡と想定される覺範寺廃寺跡の発掘調査を行った報告書である。

この調査は米沢市史編纂の中世資料として掲載するための基礎的な調査から始まった。

覺範寺廃寺跡は諸説あり、今回の調査では地名の覺範寺、覺範寺道北、御伊勢林、應待場を踏査しながら、測量調査と試掘を行い、御伊勢林附近から調査を実施した。

時、あたかも伊達政宗岩出山移封400年で、NHK大河ドラマ『独眼流政宗』の放映中であり、市民はもとより仙台方面からも大きな注目が寄せられた。

昭和62年の調査では、建物跡が存在するとみられるA～Fの6地点のうち、主要地点と推測されるA地点とB地点が主な調査であった。その結果遺構としては多角（六角）形の礎石跡と墓穴が発掘され、寺院配置等が検討された。覺範寺である確定的な物証は発見できず推論にとどまざる得なかった。

昭和63年の調査でも建物跡と想定しているD地点の平場を中心調査を行った。平場の南端を精査したところ、多数の一字一石経が出土し大きな成果となった。この経文字を調査してみると非常に特徴的な筆跡が確認されている。それは政宗の師、虎哉和尚の筆に類似している点であり、覺範寺殿（輝宗）をとむらった事実に符合している。

全体の寺院配置までは解明することができなかつたものの覺範寺に係わる多くの資料が得られた。今後もこれらの資料をもとに研究を深めて行きたいと考えています。

最後に、この調査に関してご指導、ご協力いただいた東北歴史資料館、米沢市史編纂委員の方々、郷土史研究会の皆様、そして上長井史跡保存会、地権者の遠藤春枝氏、覺範寺歓光窟の栗野善雄氏に厚くお礼申しあげます。

平成元年12月

米沢市教育委員会

教育長 小口豆

例　　言

I. 本報告書は米沢市史編纂事業に基づき、米沢市地区における中世史究明の一環として調査を実施した覚範寺廃寺遺跡学術調査報告書第1集である。

II. 発掘調査は第I次については米沢市史編纂室の要請を受けて米沢市教育委員会が実施したものであり、1987年（昭和62年）4月2日～同年4月30日、第II次は米沢市教育委員会が主体となり、1988年（昭和63年）4月7日～同年5月18日の期間で実施したものである。

III. 調査体制は下記の通りである。

◎第I次調査（A・B地点）

調査総括 安部敏夫（社会教育課長）

調査担当 手塚 孝

調査主任 菊地政信、同副 金子正廣

調査員 原 三郎

作業員 蔵田清二、我妻徳枝

鳴貫六助、遠藤昭一

加藤輝参

調査協力 遠藤春枝、栗野善雄

水野 哲、西村昭二郎

米沢市史編纂室、西明寺

米沢市総務部庶務課

山形県教育庁文化課

地元地権者、遠山地区住民

（敬称略）

調査指導 まんぎり会

事務局 平間重光、梅津幸保、山田 隆

我妻重義、角屋由美子

IV. 付図、挿図の縮尺は各図にスケールで示した。陶磁器、土師質土器、鉄製品の実測図については±、一字一石礎縫実測図は±、石祠実測図は±とした。写真図版は縮尺不同、北の方向は真北に統一した。

V 本書の作成は手塚 孝、菊地政信、金子正廣が担当し、挿図、実測図の作成は手塚、菊地がおこない、総括は手塚があたった。責任校正是小林伸一、山田 隆、角屋由美子が担当した。執筆分担については下記の通りである。

第1節 遺跡の概要	(手塚)	IV 要約	(手塚)
第2節 歴史的な背景	(金子)	第5節 第Ⅱ次調査	
第3節 調査に至るまでの経過	(菊地)	I 調査の経過	(金子)
第4節 第Ⅰ次調査		II 検出された遺構	
I 調査の経過	(菊地)	1) 墓壙、2) 溝状遺構	(菊地)
II 検出された遺構		3) 経塚	(菊地)
1) A 地点	(手塚)	III 検出された遺物	
2) B 地点	(菊地)	1) ~4)	(菊地)
III 検出された遺物		5), 6)	(金子)
1) 繩文時代の遺物	(菊地)	IV 要約	(金子)
2) 陶磁器類	(菊地)	第6節 総括	
3) 土師質土器	(菊地)	I 遺構 1) ~4)	(手塚)
4) 鉄製品	(菊地)	II 遺物 1) ~3)	(菊地)
5) その他の遺物	(菊地)	III 一字一石経の分類	
		1) 経典	(金子)
		2) 石材、3) 筆跡	(手塚)
		IV 結語	(手塚)

VI 陶磁器の年代については福島県会津若松市の古田博行氏の御教示をいただいた。

VII 遺構等の図化は「米沢市埋蔵文化財報告書第8集」の基本図化表に沿っている。

VIII 遺構等の土色については、「新版標準土色表」(小山、竹原1973) 等を参考にした。

IX 本遺跡より出土した遺物については復元整理し、米沢市教育委員会(仮称)米沢市埋蔵文化財資料室において一括保管する。

X 調査にあたっては、川崎利夫はじめまんぎり会会員、上長井史跡保存会の方々などから御協力を得ている。ここに記して感謝申し上げます。

本文目次

序文	
例言	
目次	
第1節 遺跡の概要	1
第2節 歴史的な背景	1
第3節 調査に至るまでの経過	4
第4節 第Ⅰ次調査	7
I 調査の経過	7
II 検出された遺構	7
1) A地点	7
2) B地点	8
III 検出された遺物	14
1) 縄文時代の遺物	14
2) 陶磁器類	14
3) 土師質土器	15
4) 鉄製品	16
5) その他の遺物	16
IV 要約	16
第5節 第Ⅱ次調査	24
I 調査の経過	24
II 検出された遺構	25
1) 墓壙	25
2) 溝状遺構	25
3) 経塚	26
III 検出された遺物	34
1) 縄文時代の遺物	34
2) 陶磁器類	34

3) 土師質土器	34
4) 鉄製品	35
5) 一字一石経	35
6) その他	59
IV 要約	60
第6節 総括	60
I 遺構	60
1) A地点	60
2) B地点	61
3) D地点	61
4) その他の地点	62
II 遺物	62
1) 縄文時代の遺物	62
2) 歴史時代の遺物	62
3) 近世、近代の遺物	64
III 一字一石経の分類	64
1) 経典	64
2) 石材	87
3) 筆跡	88
IV 結語	103

挿 図 目 次

第1図 覚範寺廐寺跡周辺の遺跡分布図	2
第2図 覚範寺廐寺跡測量図	5, 6
第3図 覚範寺廐寺跡第I次調査A地点遺構平面図	9, 10
第4図 覚範寺廐寺跡第I次調査B地点遺構平面図	11, 12
第5図 覚範寺廐寺跡第I次調査B地点、第II次調査D地点出土遺物実測図	17
第6図 覚範寺廐寺跡第I次調査A地点出土遺物実測図	18
第7図 覚範寺廐寺跡第I次調査B地点出土石祠実測図(1)	19

第8図	覚範寺廐寺跡第Ⅰ次調査B地点出土石祠実測図(2)	20
第9図	覚範寺廐寺跡第Ⅰ次調査B地点出土石祠複元想定図	21
第10図	覚範寺廐寺跡第Ⅰ次調査B地点出土各種石塔複元想定図	22
第11図	覚範寺廐寺跡第Ⅰ次調査B地点出土石祠複元各部計測図	23
第12図	覚範寺廐寺跡第Ⅱ次調査D地点遺構平面図	27, 28
第13図	覚範寺廐寺跡第Ⅱ次調査D地点火葬墳墓平面図	29
第14図	覚範寺廐寺跡第Ⅱ次調査一字一石経塚平面図	30
第15図	覚範寺廐寺跡第Ⅱ次調査D地点一字一石経塚Ⅰ層面平面図	31
第16図	覚範寺廐寺跡第Ⅱ次調査D地点一字一石経塚Ⅱ層面平面図	32
第17図	覚範寺廐寺跡第Ⅱ次調査D地点一字一石経塚Ⅲ層面平面図	33
第18図	覚範寺廐寺跡第Ⅱ次調査出土一字一石経実測図(1)	37
第19図	覚範寺廐寺跡第Ⅱ次調査出土一字一石経実測図(2)	38
第20図	覚範寺廐寺跡第Ⅱ次調査出土一字一石経実測図(3)	39
第21図	覚範寺廐寺跡第Ⅱ次調査出土一字一石経実測図(4)	40
第22図	覚範寺廐寺跡第Ⅱ次調査出土一字一石経実測図(5)	41
第23図	覚範寺廐寺跡第Ⅱ次調査出土一字一石経実測図(6)	42
第24図	覚範寺廐寺跡第Ⅱ次調査出土一字一石経実測図(7)	43
第25図	覚範寺廐寺跡第Ⅱ次調査出土一字一石経実測図(8)	44
第26図	覚範寺廐寺跡第Ⅱ次調査出土一字一石経実測図(9)	45
第27図	覚範寺廐寺跡第Ⅱ次調査出土一字一石経実測図(10)	46
第28図	覚範寺廐寺跡第Ⅱ次調査出土一字一石経実測図(11)	47
第29図	覚範寺廐寺跡第Ⅱ次調査出土一字一石経実測図(12)	48
第30図	覚範寺廐寺跡第Ⅱ次調査出土一字一石経実測図(13)	49
第31図	覚範寺廐寺跡第Ⅱ次調査出土一字一石経実測図(14)	50
第32図	覚範寺廐寺跡第Ⅱ次調査出土一字一石経実測図(15)	51
第33図	覚範寺廐寺跡第Ⅱ次調査出土一字一石経実測図(16)	52
第34図	覚範寺廐寺跡第Ⅱ次調査出土一字一石経実測図(17)	53
第35図	覚範寺廐寺跡第Ⅱ次調査出土一字一石経実測図(18)	54
第36図	覚範寺廐寺跡第Ⅱ次調査出土一字一石経実測図(19)	55
第37図	覚範寺廐寺跡第Ⅱ次調査出土一字一石経実測図(20)	56

第38図	覺範寺廐寺跡第Ⅱ次調査出土一字一石經実測図(2)	57
第39図	覺範寺廐寺跡第Ⅱ次調査出土一字一石經実測図(2)	58
第40図	覺範寺廐寺跡出土一字一石經筆跡分類図(1)	90
第41図	覺範寺廐寺跡出土一字一石經筆跡分類図(2)	91
第42図	覺範寺廐寺跡出土一字一石經筆跡分類図(3)	95
第43図	覺範寺廐寺跡出土一字一石經筆跡分類図(4)	97
第44図	覺範寺廐寺跡出土一字一石經筆跡分類図(5)	98
第45図	覺範寺廐寺跡出土一字一石經筆跡分類図(6)	100
第46図	覺範寺虎叔梅師真筆「巧對類圖」、覺範寺廐寺跡出土経石による「法華經」抄出復元	102

付 表 目 次

第1表	覺範寺廐寺跡出土経石の少數文字分類表	66
第2表	覺範寺廐寺跡出土一字一石經計測分類表	68
第3表	覺範寺廐寺跡出土経石集計表	87

図 版 目 次

第一図版	覺範寺廐寺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査の発掘(一), 遠景, 六面塔の笠と土台石
第二図版	覺範寺廐寺跡第Ⅰ次調査の発掘(一), A地点
第三図版	覺範寺廐寺跡第Ⅰ次調査の発掘(二), B地点
第四図版	覺範寺廐寺跡第Ⅱ次調査の発掘(一), D地点
第五図版	覺範寺廐寺跡第Ⅱ次調査の発掘(二), D地点
第六図版	覺範寺廐寺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査出土の遺物(一), A・B・D地点出土
第七図版	覺範寺廐寺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査出土の遺物(二), A・B・D地点出土
第八図版	覺範寺廐寺跡第Ⅰ調査出土の石祠(三), B地点
第九図版	覺範寺廐寺跡第Ⅱ次調査出土の遺物(四), 火葬人骨片, 牛の頭骨
第十図版	覺範寺廐寺跡第Ⅱ次調査出土の一宇一石經(一)
第十一図版	覺範寺廐寺跡第Ⅱ次調査出土の一宇一石經(二)
第十二図版	覺範寺廐寺跡第Ⅱ次調査出土の一宇一石經(三)

第1節 遺 跡 の 概 要

本遺跡は米沢市大字遠山町字御伊勢林に所在する。米沢の市民の山として知られる斜平丘陵の山裾に立地しており、遠く吾妻山陵から突き出た長峰は、南から標高605mの栃窪山、標高660.2mの笹野山、夏の火祭りで有名な標高559.68mの愛宕山と標高534.1mの羽山と続く。覚範寺の位置する地形は、斜平丘陵の末端部、県営御成山ジャンプ台から南側に張り出したなだらかな尾根の先端部の中腹から、山麓と羽山から東方向にのびる尾根に沿って流れる北沢によって形成された小扇状地一帯にかけて分布する。

この斜平丘陵一帯は縄文時代と中世に係わる遺跡が数多く存在し、先の縄文遺跡からは栃窪山の直下に位置する西向沼を中心とした栃窪a～c遺跡、斜平山麓の旧松川河岸段丘上に南原から遠山、館山地区にかけての広範囲に40数遺跡が分布している。後者の中世は山岳信仰に関する多数の塚群や土壙、テラス等による修法壇や農場、道場跡が羽山、愛宕山周辺に分布し、これらを裏付けるかの様に山裾周辺には南より長泉寺、幸徳院、地蔵院、西明寺、生蓮寺、館山寺、龍性寺などの古刹があり、かつては阿弥陀院、光明寺、觀善寺、医王寺そして今回の覚範寺も存在していた。これらの寺院が全て羽山信仰等に係わりを有するものではないが、斜平山一円が東に存する戸塚山と並ぶ西の聖域とする特異な地域であったものと言える。

第2節 歴 史 的 な 背 景

伊達氏が置賜地方に進出するのは、伊達氏8世伊達宗遠の時代である。鎌倉幕府の要職をつとめた大江広元の次男時広が、源頼朝の奥州平泉討伐の功により置賜地方を与えられ、以後長井氏と称した。長井氏8世広房の代に、前述の伊達宗遠により滅ぼされたとされる。

長井氏の滅亡は、『奥羽編年史料』及び旧『山形縣史』(1920年刊)によると、
「天授六年(1380年)庚申七月二十五日、是より前、伊達宗遠、長井廣房を攻撃し置賜郡を略有す。是日鎌倉管領足利氏満傍近の諸将に命し廣房を応援せしむ。及ばず。是の役廣房の將新田某戰死す。長井氏遂に滅亡す。」(『米澤市史』1944年刊)とある。

但し、『米沢大年表』には、「しかし伊達氏の勢力は天授六年以前にも既に置賜地方に及んでいたことが想像されるし、又只一度の敗戦で長井氏が全領地を失ったと考えるのは少しく無理のようである。多分天授六年の頃を境として長井氏の勢力が完全に驅逐されたものであろう」とあることは留意してよい。ともかく、以後伊達氏は拠点を高畠城において着々とその地歩を固め、晴宗の代に、高畠城は「此城要害狭し」とて、米沢にその中心を移す。そして、輝宗、独眼流政宗とつづき、政宗の岩出山移封までの約210年間この地方を支配することになる。

さて、政宗の父輝宗は、天文13年(1544)に福島県桑折町の西山城に晴宗の第2子として生ま



第1図 覚祐寺廃寺跡周辺の遺跡分布図

れ、天文24年には足利義輝の一字を貰って輝宗を名乗る。永禄8年家督を繼いで、16代当主となる。輝宗は祖父種宗、父晴宗と我が子政宗との間にあって歴代の当主の中では埋もれた感は否めないが、奥州に嗣を唱え「独眼流」と異名をとった英傑政宗の父として、天文の乱以後、一時的に沈没した伊達家を支え切り、継子政宗にバトンタッチした手腕は凡庸なものではないといえる。事実、天文の乱以降、奥州探題・陸奥守護職としての伊達氏は以前のような権威は相対的に低くなり、近隣諸国の大名、とくに芦名、佐竹、相馬をはじめ、北は最上氏などが折りあらば伊達を葬り去ろうと虎視眈眈としている状況下にあった。その先駆ともなったのが、相馬氏との戦いであり、相馬軍は一時期伊達・信夫本領にまで侵入するようになる。天正4年頃から反攻に転じて、天正12年春までには旧領を復すことになる。ちなみにこの間天正9年には、継子政宗が15才にして初陣を飾っている。

内部的には、元亀元年（1570）4月、伊達家宿老中野宗時・牧野久仲親子が叛反を企て、ことが発覚するや相馬に逃走し、会津にのがれている。又、父晴宗との確執もあり、さらに前述の宿老中野宗時らと輝宗の脇腹の臣遠藤基信らとの新旧家臣間の内訌などもあって、まさに内憂外患片時も心が安まる時がない危急存亡の時期であった。唯一の救いは、嫡子政宗の成長であり、政宗という名も、9世儀山政宗の英名にあやかって名付けたといわれる位、その期待するものは厚かったといわれる。政宗の師は、臨濟宗妙心寺派の禪僧で、当時大蟲禪師と並んで二甘露門と称された名僧虎哉宗乙であり、輝宗の礼聘により資福寺住職であった僧である。

天正13年閏8月から9月の合戦において、輝宗は安達郡塙松小浜城の小名大内定綱を討伐せんと兵をあげ、その結果は小浜城は落城、大内定綱は会津に逃れた。この大内合戦に岩城・芦名・二本松から援兵が加わったが、小浜落城はすぐ隣りの二本松城の畠山右京大夫義繼に飛び火し、二本松も落城。同年10月6日、畠山義繼は安達郡宮森城にいた伊達輝宗に和を請うため参陣した。降伏の条件は畠山にとり屈辱的ともいえるもので、その内容は二本松城中心の五ヶ村だけを与え、他の所領はすべて没収、子息国王丸は人質として米沢に置くというものであった。10月8日、義繼は臣下の礼をとるべく宮森城に参上、その退出の際に義繼は見送りに出た輝宗を襲い、従臣とともにそれを取り囮むようにして拉致し去ったのである。この急変に伊達家臣はなすすべなく、畠山一行のあとについてゆくばかりであった。そのまま阿武隈河畔高田原まで来たとき、囚われの身であった輝宗が義繼とともに撃ち殺せ、と叫び、伊達家臣はそれに従い一斉に鉄砲が火を吹いて、輝宗とともに畠山主従はここに殺された。輝宗この時42才。その遺骸は信夫郡佐原村の寿徳禪寺において、荼毘に付され、遺骨は前述の高畠町夏刈の資福寺に埋葬された。

『伊達治家記録』では、「天正十三年乙酉十月八日、奥州安達郡高田原ニ於テ卒シ給フ。御年四十二。法名 性山受心大居士覺籠寺殿ト号シ奉ル。信夫郡佐原邑寿徳禪寺ニ於テ火葬シ、羽州置賜郡長井莊夏刈邑慈雲山資福禪寺ニ御廟ヲ築テ、御遺骨ヲ藏シ奉ル。資福寺虎哉和尚導師タリ」

とあり、つづいて殉死者にふれて「殉死三人。遠藤山城基信、法名医国景蘿、天正十三年乙酉十一月廿一日、覺範寺殿二七日ノ御忌辰ニ当テ殉死ス。年五十四。覺範寺殿御廟ノ側ニ葬ル。内馬場右エ門 法名拝月達天。須田伯耆入道道空 法名保福紹敬（中略）寺内（遠山覺範寺）ニ医国院、拝月庵、保福庵ヲ建テ、殉死三人ノ牌所トセラル」と誌されている。翌年天正14年中には、政宗は輝宗のために菩提寺として「覺範寺」を建立している。『治家記録』によると、「○此年（天正14年） 性山公（輝宗）ノ為メニ置賜郡長井莊山邑ニ伽藍ヲ創造セラル。覺範禪寺ト号シ、山ヲ達山ト称ス。即チ資福寺前住虎哉和尚諱宗乙ヲ請シテ開山初祖トシテ住持セシム」とあり、正確な月日は不明だが恐らく輝宗の一周年忌前までは覺範寺は完成していたものと思われる。

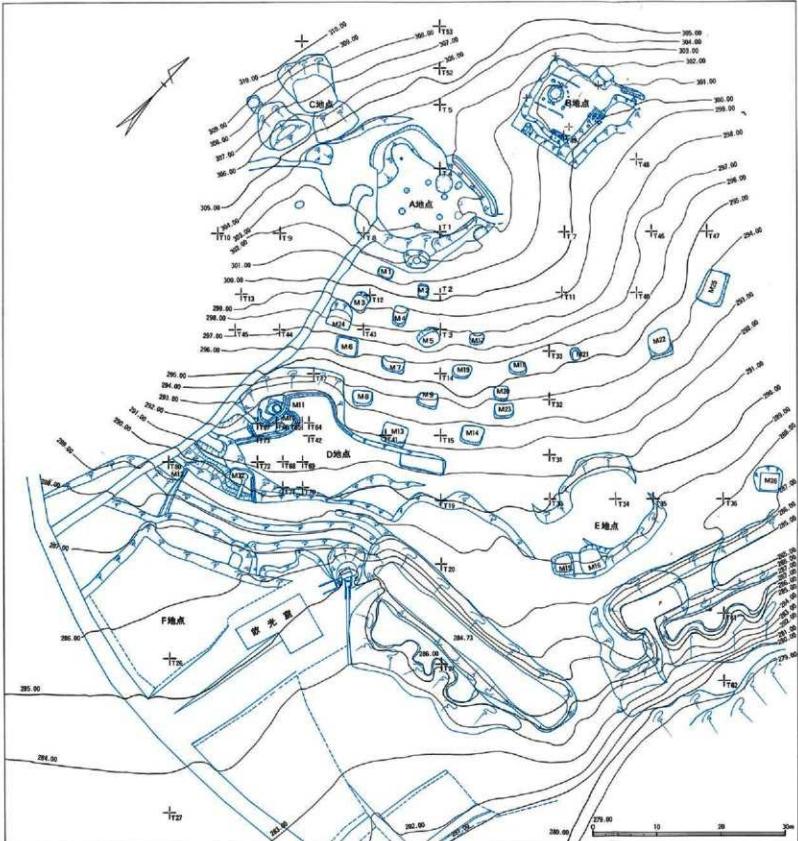
今回の発掘調査では、明確なる物証には乏しいものの、現在の小字名にいう「遠山字覺盤寺」「同字門前」という地名は、明らかに「覺範寺」と寺院の所在を示唆する「門前」ということから、発掘地が覺範寺廃寺跡に比定しても誤りないものといえる。

天正19年、政宗は長井・信夫・伊達他三郡を没収され、9月23日宮城県岩出山に移封された。『仙台市史7』では、「天正十九年政宗米沢より岩出山に移るや、その翌文禄元年虎哉命を受け岩出山へ移り、上野目なる興國山天王寺の寺号を遠山覺範寺と改めて輝宗の靈牌を安置した。」とある。したがって、米沢における覺範寺はわずか5年余しか存在しなかったことになり、以来約400年間、その存在すら不明のまま今日に至ったことになる。

第3節 調査に至るまでの経過

本遺跡は文献資料等から先学者によって論考され、数箇所の推定地が挙げられていた。昭和61年（1986）にまんぎり会が米沢市全域を対象に遺跡分布調査を実施した際に、今回調査を実施した地域にテラス状造構を確認し、覺範寺跡との感触を得た。更に同年11月14日に本市教育委員会が、字名に「覺盤寺」と記されている箇所を中心に行なった試掘調査では、縄文時代の遺物や陶器片を検出、またこの箇所が整地されていることが判明された。これらの調査結果から、我々は平地部分とテラス状造構がある山麓・小字名の「御伊勢林」一帯「覺範寺廃寺」の有力箇所と推測した。一方、地元の方々からの御教示によれば、山麓直下の用水路施設の際に使用する目的で山麓から切石等の運搬が行なわれたことや、字が書いてある小礫を採集した事実が明らかとなった。また遺構がある山麓は「虚空藏山」と地元では称し、小さな石祠が建立され、昭和の初期頃まで虚空藏講が行なわれていた。また山麓末端部には、昭和20年（1945）に掘られた大形の溝があり軍事工場を建設する予定であったが敗戦により未完成のまま放置されたこと等が判明した。

「覺範寺廃寺」遺跡の発掘調査は昭和62・63年（1987・1988）の2カ年に亘って学術調査として実施したもので、初年度を第1次調査・次年度を第2次調査と以下に呼びたい。第1次調査は米沢市史編纂室が市史の中世資料の一環として米沢市教育委員会に調査を依頼したものである。



第2図 党範寺廃寺跡測量図

第4節 第 I 次 調査

I 調査の経過

調査地点にまだ残雪が見られる4月2日より開始し、現場付近にある勝仁科工務店の通称「温泉小屋」を好意により借用させてもらい現場事務所とする。春一番に現場入りしたのは木の芽がふく前に測量を完了したいとの配慮であった。測量はテラス状の造構がある斜面全域と平地の一部を含む地点を対象とし南北約180m、東西120mの範囲にT1～T62の基準杭を十字に配す十字ドラバース法を用い縮尺百分の1で図面を作成することとした。4月13日は雪が降り午後3時で作業を中止するが、4月17日の午前中で測量調査を終了する。今後の発掘調査はこの測量図を基本に進行させるものとし、テラスの箇所にA～F地点と命名した。（第2図参照）

4月14日よりA地点の調査を開始する。調査に至る経過で述べた様にすでに礎石等はなく、わずかに凹地だけが存在する程度であった。4月17日の午後からA・B両地点を併行して進め、A地点は4月23日に当初予定した範囲よりも拡長する。B地点はすでに土壌が掘られており、河原石や切石が散乱した状況であった。それらを精査し表土別離を実施したところ、土壌の周間に礎石を、さらにテラス端部には階段を確認した。第1次調査はA・B両点に限定して実施したものであり、4月30日までに調査を終了し5月1日に現地説明会をおこなう。

II 検出された遺構

第2図に示した様に覚庵寺が存在した範囲内には、標高285mの山麓から310mの中腹にかけて建物が築造されたと推測される平担面がA～F地点の6ヶ所発見されている。今回の調査は、この中でも中心的な役割を呈したと考えられるA地点とB地点を重点的に調査を実施した。ここではその調査成果をA地点・B地点に大別して述べる。

1) A地点（第3図参照）

標高303mラインを中心として東西27m、南北15mの不規則多角形状を有する平担面である。調査は立木の繁る西側を除く虚空藏石祠を祭る広場を中心に行なったため、全体的な形状は明確に出来なかったが、現状測量や東コーナー部の状況から推測すれば東西に長い六角形プランを示すものと考えられる。このA地点は一部深掘りして確認した結果、南で1.2～1.5mの土盛を3～4層の版築で構成している。基本的には山を削平して土盛の土砂としているが、5～10cm位の中間層の2枚は黒土層を用いており別の所から搬入したものと推測される。また山に接する北東部から北側にかけて1.2m、深さ60cmの溝を配していることから、後述するB地点の様に大規模に削平するものではなく現地形そのものも平担的な地形を示していたものと推測される。調査した平担面は円形形状の浅い落ち込みが10ヶ所認められ、この中でWY1～WY6は50cm～80cm、深さ10cm～20cmを有するもので平担面のほぼ中央に六角形を有する様に配され、礎石の抜き取り痕と推測する。

2) B地点 (第4図参照)

山麓からの比高差が22mある山腹にB地点がある。A地点より北方に10m離れた場所に位置する。この地域一帯は沢になっており、平坦面を整地した場所は沢の頂上で緩斜面の様相を呈し、ここから急斜面となって西方の山頂に達する。

B地点の標高はA地点とほぼ同様で300~303mを有す。平坦面は沢が終り急斜面となる地点の西方を南北に削平し、東西14m、南北14mの平場を中心いてテラスと階段状造構で構成されている。平坦地の層序はIV層の版築層で構成され、斜面削平の土砂以外に暗黒褐色の土砂も使用している。暗黒褐色の土砂は、山麓の平地にある事から造成の際に運搬したものであろう。山の土砂は粘質砂礫層で暗黄褐色を呈す。盛土は約50cm認められ表面は版築されており、版築層が約20cmある。

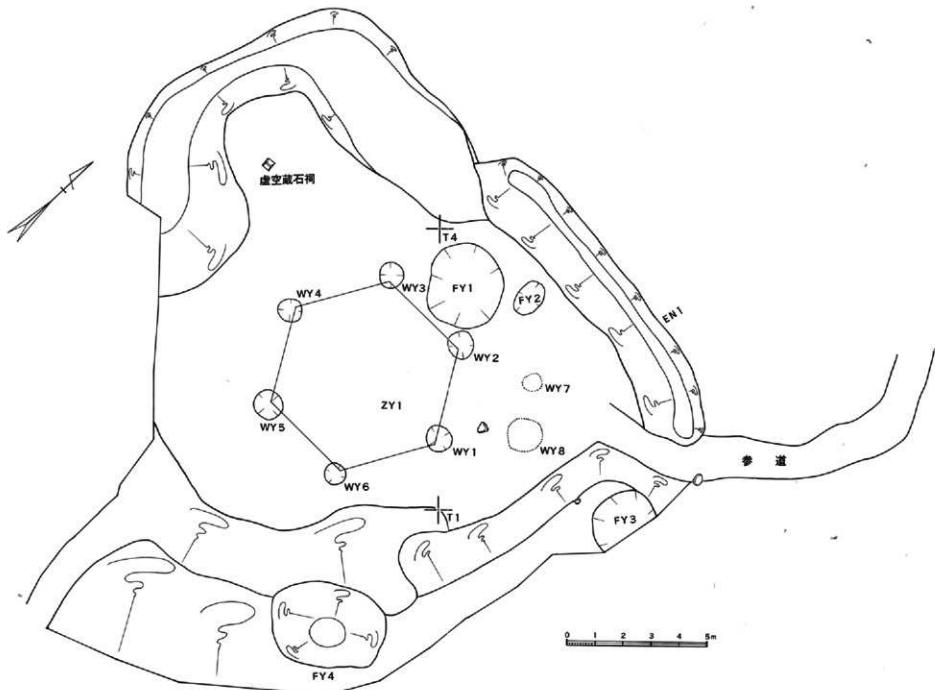
B地点からは墓壙1基 (OY 1), 土器 (EN 2), 溝状造構 (KY 1~4), 磐石 (WY 9~13), 磐石建物跡 (ZY 2), 石祠跡 (B 1~B 4地点), 参道, 石段の各遺構群が検出された。次に各遺構ごとに説明を加えたい。

○墓壙 [OY 1]

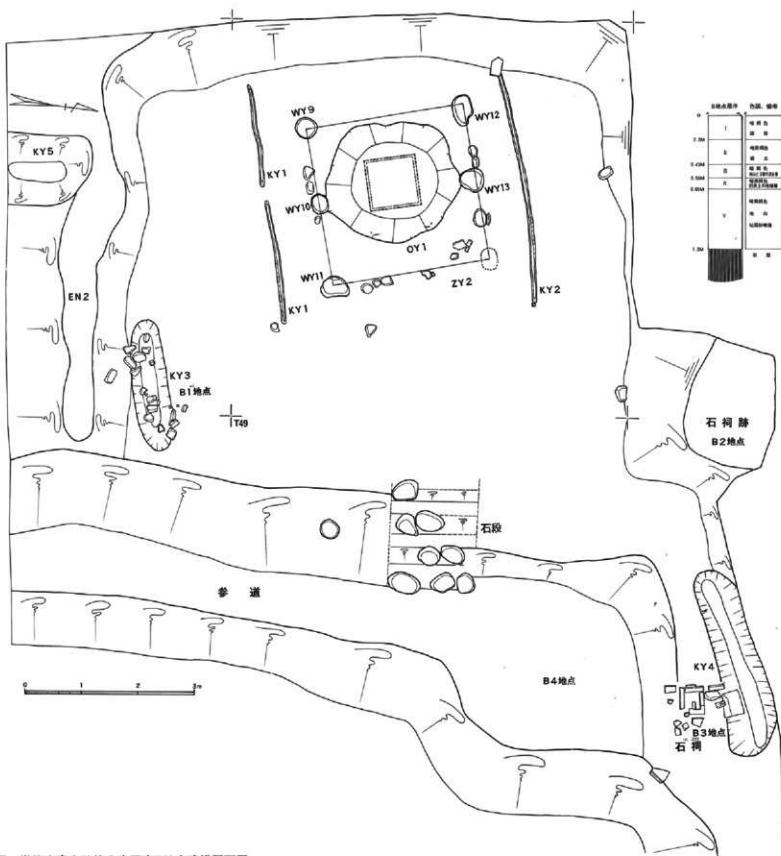
整地層を掘り込んで構築し、深さは1.2mある。すでに底面近くまで掘られた状態であり、内部には10~15cm位の河原石と碎かれた凝灰岩の切石が廃棄されて埋没していた。これらの遺物に混入して第5図に示した鉄釘と同図20のリング状金属製品が検出された。他に墓壙上場付近からは同図1の中世陶器片、2のかわらけが出土している。プランは長径2.4m、短径2.1mの不整円形状を有し、下場はほぼ円形で1.35mを計る。上場も本来は円形であったものと理解され、掘られたままで放置されたことから縁辺が崩れてしまったと考えられる。底面すれすれは構築時の状況であり、第4図に示した範囲で土色変化が認められた。土色変化は方形の木箱が埋納されていたのを示すもので、出土した鉄釘には木片が鉄釘の酸化により付着した状況で第5図12, 13と15~18が出土している。12, 17, 18は板材にうちこまれた状況で両端が尖状を呈す釘で、断面形状は四角形に整形されている。

墓壙周辺にはWY 9~13の磐石群が検出され、ZY 2とした磐石建物跡が墓壙の上部に存在したのは確実である。KY 1, 2は磐石より75cm離れた場所にほぼ東西に細長く延びる。屋根から落ちる雨露によって形成された雨落ち溝と考えられ、切妻風の建物の存在が想定されよう。磐石建物跡の磐石は北東コーナー部の1個が欠落しているが、南北1間×東西2間の建物で間尺は南北2.8m(9尺)、東西1.4m×1.4m(9尺)で正方形の建物が想定される。

墓壙内部から検出された小礫と切石は墓壙上部施設構築の際に使用されたと理解され、切石を周囲を囲い内部に小礫を敷き詰め中央に石塔を設置していたと推測するが、既に破壊された状況であり断言できない。石塔は五輪塔等が建立されていたと推測したい。



第3図 党蔵寺廃寺跡第Ⅰ次調査A地点遺構平面図



第4図 覚籠寺唐寺跡第1次調査B地点遺構平面図

○溝状造構〔KY 1～5〕

KY 1, 2はすでに説明をしたので割愛し KY 3, 4について述べたい。KY 3は南側の東端部に位置し長さ2.3m, 幅60cm, 深さは15～20cmを有す。内部には約20cmの河原石10点と碎かれた小片の切石が数点埋没していた。他に第6図24の陶器が破片となって点在していた。

KY 4は東北端部に位置し、長さ3.4m, 幅80cm, 深さは20～25cmを計る。北側は山の自然斜面に接している。南側には第9図で示す石祠が建立されている。KY 4の状況からKY 3北側にも石塔あるいは石祠が建立されていた可能性が強い。性格としては石祠等に供する施設といえよう。南側のKY 5は西側コーナー部に位置し他の溝状造構よりも大形状を有し南北に延びる。今回は一部分しか精査していないが、土壘に接している事から排水を配慮した性格が想定される。

○石祠跡〔B 1～B 4 地点〕

4箇所認められた。B 2, B 4地点は小規模なテラス状を構成している。石塔の破片が検出されており、この両地点には石塔を建立し B 1, B 3には石祠を建立したものと推測される。

○土壘〔E N 2〕

上場で50cm, 下場で1.2m, 高さは50～60cmを有す。B地点の平坦面を明瞭に区画するために構築されたものと考えられる。A地点の北側にも同様な土壘〔E N 1〕が認められた。

○石段

A地点とB地点を結ぶ参道よりB地点に登るための石段である。幅1.5m（5尺）で縦に等間隔で4列にそれぞれ4個の河原石を並べて構築している。8個が現存し大きさは30～60cmの偏平な安山岩を用いている。最上段の礎の縁辺に沿って東側平坦地縁辺が南に延びている。

○参道

平坦面の下場縁辺に沿って南北に通じる参道は幅90～110cm現況で有すが、本来は3尺（約90cm）に設置されたものであろう。A地点に続くものと理解されるがA・B両点の中央に山道があり明瞭でない。斜面を削平あるいは盛土をして構築している。

以上、述べた事項からB地点を推察すれば斜面を削平し平坦面を造成、中央部やや西方に円形状の土壘を設置、内部に遺体を埋葬した木箱を安置した墓壙と言えよう。埋葬した上に建物を構築し、その内部に壇を設け信仰仏を置く造構を墳墓堂、あるいは墓堂と称しているが、B地点の墓壙も一種の墓堂であったと考えたい。

階段は墓堂の正面に設置され、両脇には石塔、あるいは石祠を建立したものと想定し、出土遺物から第9図に復元図を示したので参考願いたい。

川崎利夫氏の御教示によれば、この様な埋葬形態は平安時代末期から中世にかけて遺族や僧侶あるいは上級武士などの有力者間に普及した。山形県内の例としては藤島町の勝樂寺遺跡（13世紀）の調査がある。墓堂は六角形の掘立柱で構成されている。

III 検出された遺物

第Ⅰ次調査の地点A、Bの平坦部からは総数260点の遺物が検出された。陶磁器類が最も多く、次いで鉄製品、石器類、土師質土器がある。以下に述べたい。

1) 桶文時代の遺物（第6図1・第七回版35~37）

出土状況から平坦面を造成する際に運搬した客土に混入していたと想定される。土器片は検出されていない。石器が30点出土している。石鐵・フレーク・チップに細別でき、図面を必要と認識した石鐵についてだけ実測図を作成し、他は割愛した。

第6図1が石鐵であり、A地点平坦面上層から出土している。両面調整により二等辺三角形状に整形され、断面形態は三角形状を呈す。石材は石鐵、フレーク、チップとも頁岩を使用している。石鐵の基部は平坦で基部が尖端部に延びる。縁辺は湾曲しながら尖端に走る。B面中央部に一次剥離面が観察される。A面は両縁辺からの押圧剥離によって剥離面が中央部まで達し稜線が認められる。しかしながら断面形態が三角形であることは両面のバランスが安定していない形状であり、完成品、あるいは使用された石鐵とはいがたい。

フレークは錐形剥片で占められ、縁辺に二次調整を加えたものは1点、他に焼成を受けているフレークも1点認められた。フレークは16点、チップは15点ある。フレークのほとんどが折れ面を持つ。折れ面は剥離面と比較して新しいことから運搬や造成の際に欠損した面と理解したい。

2) 陶磁器類（第5図15~24、第6図24、第六回版）

A地点を中心に出土している。器形ごとに分類して下記に述べたい。

○鉄軸樋（第5図24、第六回版11）

B地点より出土している。口径は楕円形を呈し長径17cm、短径16cm、器高は現長で(18cm)を計り底部は欠損している。口縁部に竹の籠を模写した一条の隆帯を器面裏側から押しだして整形している。欠損している底部は籠が一条ないし二条と推測され貼付による突帯であろう。色調は両面とも暗赤褐色を有す。鉄軸を主とし、スクリーントーンで示した箇所は軸が流れ極暗赤褐色を呈す。器厚はほぼ一定で8mmを計る。胎土は精製した粘土で微粒の黒点が認められる。

○變形陶器（第5図1、第七回版1）

B地点墓域付近から出土している。叩き目はなく還元焼成による焼物で外面は長時間の焼成による焦げで黒色を呈す。自然釉（緑色）が認められる。内面は飴釉的な色調（自然釉）で胎土に石英砂を多く含む。胴上半部の破片である。断面の観察より人為的に壊された破片と理解される。器厚は厚く大形状の變形陶器の破片と想定される。1点しか出土していない。

○土瓶（第6図15~18、第六回版7~10）

A地点より6点出土している。4点について複元することができた。いずれも底部を除き釉が掛けられている。底部には煤が付着しており、使用された後に廃棄された土瓶群である。

15は底部に三角錐状に整形した脚部が等間隔に三箇所認められる。他の3点と比較すると器高が低く、器厚も厚い。なお図示した4とも蓋は検出されなかった。色調は飴釉調である。

16は丸味を帯びた器形を有し、器面の外面には縁軸が掛けられている。注口部先端が欠損している。15に見られる底部の脚部は退化しているが取り付けられている。しかしながら実用的な機能をはたすものではない。17は口唇部分を除き鉄軸が胴下半部まで掛けられている。焼成は15と共に土師質土器に類似する器面である。18は胴上半部が複元できた。器面は相馬のヒビ焼といわれるもので16とともに陶磁器の土瓶であり、この他に2点出土している。

○土瓶蓋（第6図19、第七図版8）

飴釉の色調を呈す土瓶蓋で1点出土している。この蓋が合う土瓶は出土していない。

○蛇ノ目凹高台染付鉢（第6図20、第六図版5）

すりえを内面中央部に描き、まわりに手がきの文様を描く特徴を有す。1点出土している。

○広東碗（第6図21）、茶碗（第6図22、23、小皿、第6図24、第七図版8～10、12、13）

高台が高く、外反する器形を有す。高台と胴部下半部の境に一条の線内外面に配し、外面には植物の文様を手がきによって描かれている。22、23も外面に植物の文様を描いており、内面には文様は認められない。24は内外面に植物文様が描かれている。これらの図示した以外にも約30点の陶磁器類が出土している。文様は鼻須で青色を用いて描かれている。

3) 土師質土器（第6図2～8、14、第5図2、第六図版1～4、6、第七図版2～7）

○かわらけ（第6図4、5、第5図2、第六図版1～4）

A地点より第6図4、5の2点、B地点からは第5図2の1点が出土している。4は口径12.4cm、器高は2.3cmを計る。色調は浅黄橙を有し底部は回転糸切り無調整である。器厚は底面が厚く0.5mm、口縁部にゆくに従って薄くなり2mmしかない。5は色調が明赤褐色で底径が小さく器厚は底部から口縁部に一定の厚みで整形され3mmを計る。内面底部には「V」字形の断面形態を有す幅2mmの一条の凹線が一周している。底部の切り離しは4と同様である。

2は4と同色を有し器高も同様であるが器形は異なる。底部から直角に近く立上がり、器厚も厚く最大で9mmある。皿というべき器形である。底部は静止糸切に近い形態を有す。7、8もA地点からの出土で色調は青灰色を有す。両者は同一体破片と理解され7は口縁部片で削り調整が認められる。少破片であり、器形は不明と言わざるを得ない。

○手焙り（第6図2、3、6、第六図版6、第七図版2、3、6）

2は籠状の印刻文、3は方格渦巻文と綱目状文を印刻した口縁部片である。器形は口縁部の觀察から方形になると判断したい。6は両端部が整形されたもので器面が焼成を受けていることから煮沸の際、土台に使用されたものであろうか。他に図示しなかったが土鍋の胴部破片が1点出土している。器面は煤が付着しており、使用された土鍋の破片である。

4) 鉄製品 (第5図3~20, 第7図版16~34)

B地点の墓壙を中心に約50本分の和釘が出土した。いずれも酸化が著しく図示できたのはわずかに17点にすぎない。20は円形を有す銅製品で直径2.3cmある。蠟付により整形している。

○間釘 (第5図3~10, 12~14, 17, 18, 第7図版22~27)

二枚の板をはぎ合せる釘で形状は両端が尖状を呈す特徴がある。長さは6.5cm(2寸3分)ある。17, 18は板につきさきった状況で検出された。以下述べる和釘の断面はすべて方形である。

○折釘 (第5図11, 第7図版16)

物を掛けるのに使用する釘であり「L」字形に曲がっている。

○まきがしら (第5図19, 第7図版30)

屋根葺きのおさえに竹を打ちつける釘である。頭が「T」字形に整形されている。

○古釘 (第5図15, 16, 第7図版20, 21)

他の和釘より大形の形状を呈す。両者とも板片が付着しており、16は木目が縦に走ることから小口に対して垂直に打ったのがうかがえる。

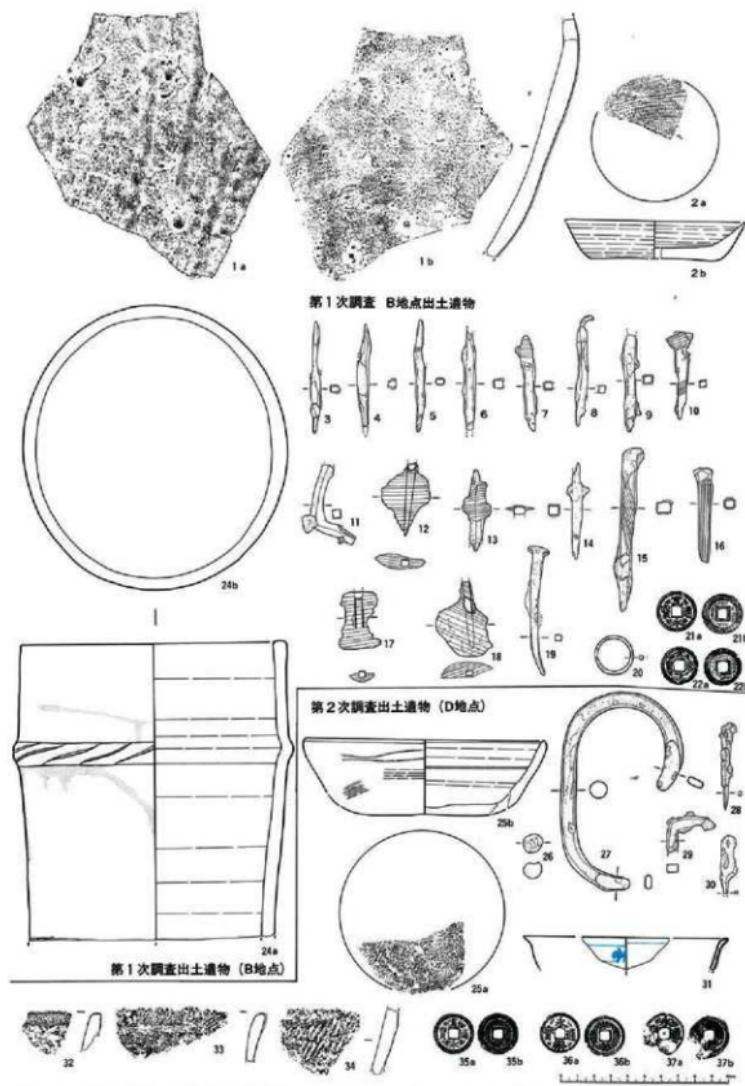
5) その他の遺物 (石祠, 石塔) (第8図, 第9図, 第10図, 第11図, 第8図版参照)

B地点より出土している。各部の寸法については第11図を参照願いたい。また復元図を第9図に作成した。スクリントン箇所が残存する。石祠の中には小形の王輪塔が埋納されたと想定した。

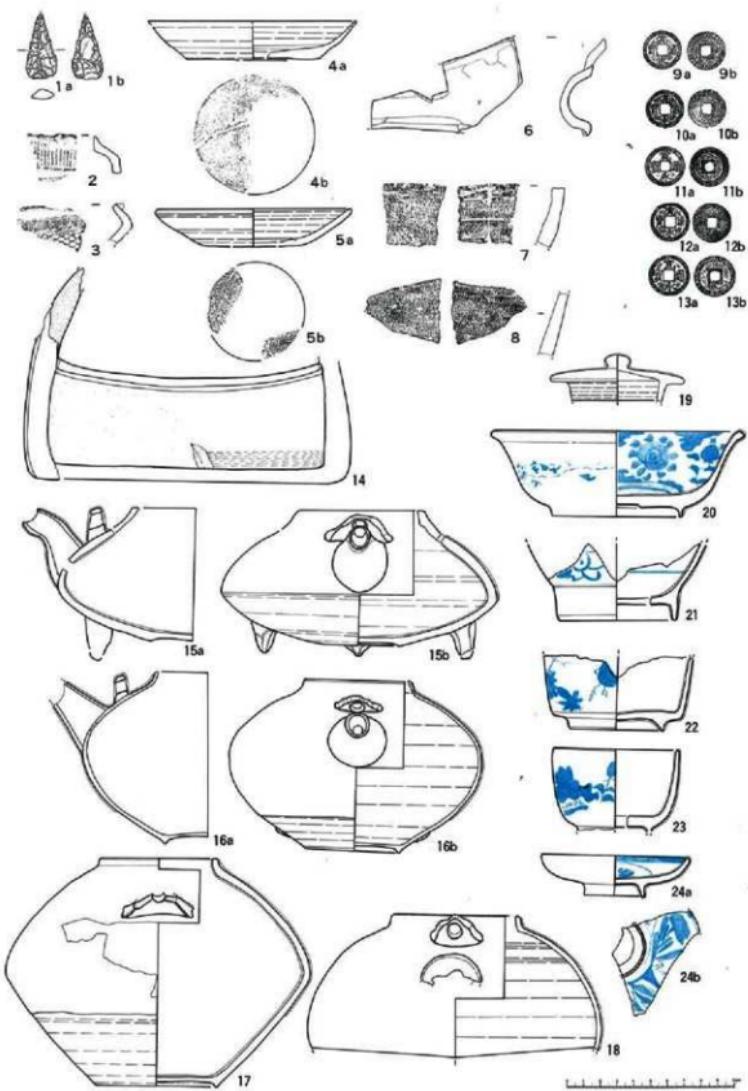
IV 要 約

覚範寺が存在すると考えられる南斜面には、第2図に示した如く東西にのびる二つの尾根を結ぶ範囲内に、A地点からF地点の6箇所の平担面と帶曲輪状の階段的テラス、2m前後の方形塹25基からなっている。平担面は六角形状を呈するA地点、山を削平した方形テラスを基本としたB地点~E地点、山麓から平地にかけて存在するF地点の三形態に区分される。標高の低い平担面から推測すれば、F地点には井戸跡が伴うことと字切り図で言う覚範寺内に所在し、面積も平担面の中では最大規模を有することからみて、覚範寺の本堂と庫裡跡と考えられる。山腹に存する5箇所の平担面は字御伊勢林内に所在し、我々は一つの仮説として伊達輝宗他3基の牌所が存在する林一帯をかつては御伊達林と呼ばれていたものを、後世に入って伊達の「達」が、「勢」と誤り(または意識的に変え)御伊勢林と伝えられた可能性を指摘する。それは御伊勢信仰やそれに関する伝承も一切ない事からもうなづけられる。真意はともかく、A地点を中心とする山寄せ式の平担面(面積からC地点は除く)は、性山公治家記録にある牌所であることは確実である。

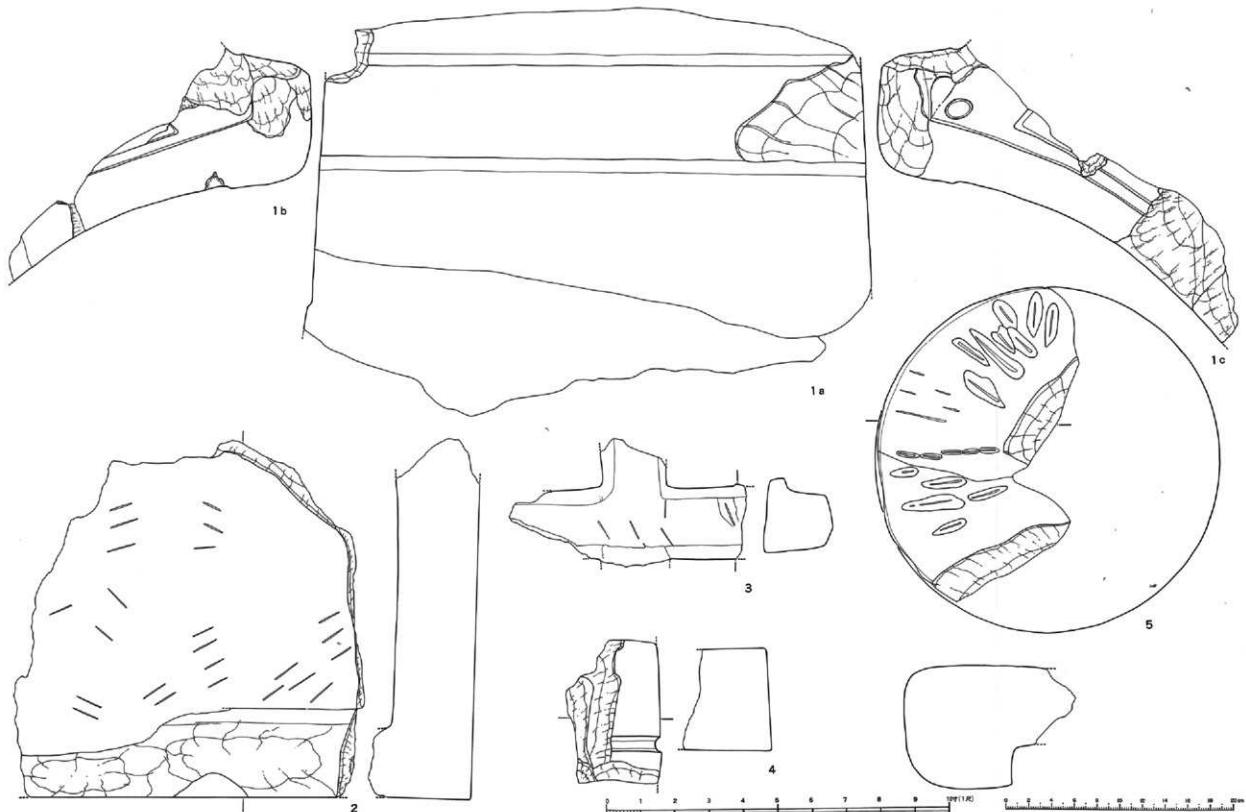
今回は覚範寺の中心的建物の存在が予想されるA地点とB地点を選出して調査を実施した。A地点は後世による破壊が著しく、明瞭な造構は認められなかったが六角状を有する基壇状の平担面と礎石の抜取り痕跡と推測される浅い落ち込みが検出された。浅い落ち込みは地元の話を総合



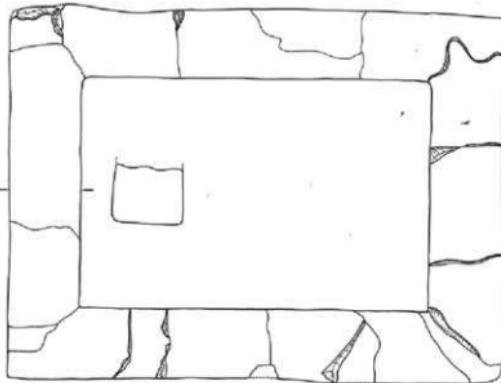
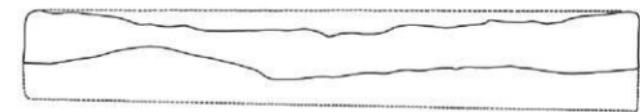
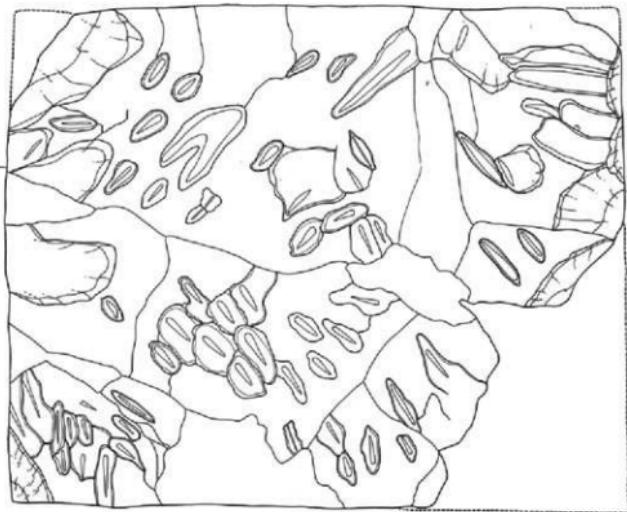
第5図 覚範寺廃寺跡第1次調査B地点、第2次調査D地点出土遺物実測図



第6図 覚範寺廃寺跡第Ⅰ次調査A地点出土遺物実測図

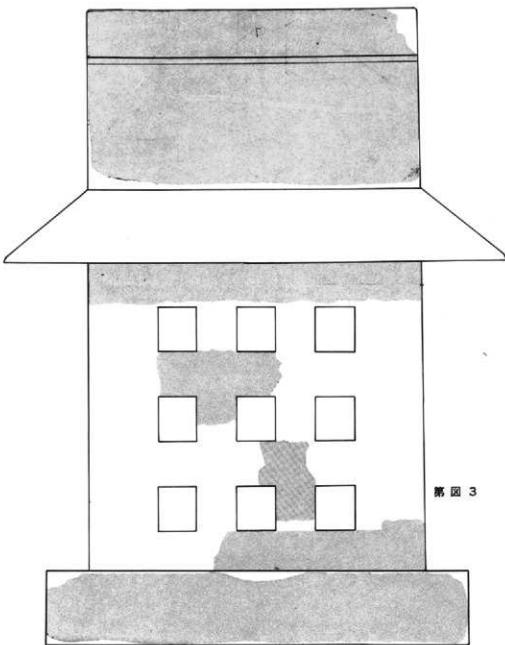


第7図 覚菴寺廃寺跡第Ⅰ次調査B地点出土石碑実測図(1)



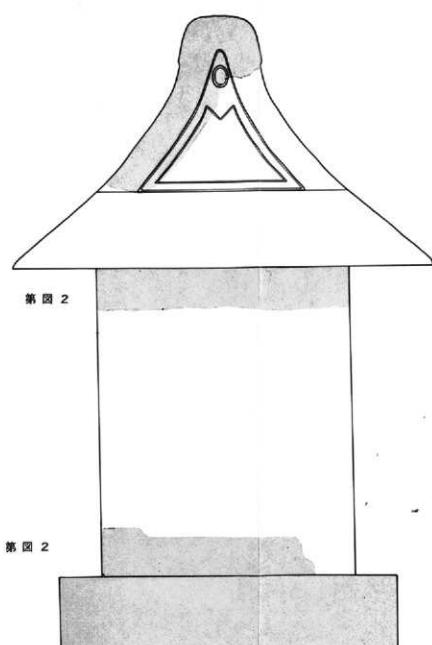
第8図 党範寺廃寺跡第1次調査B地点出土石荷実測図(2)

正 面

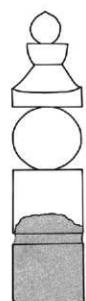


第図 1

側 面



第図 2

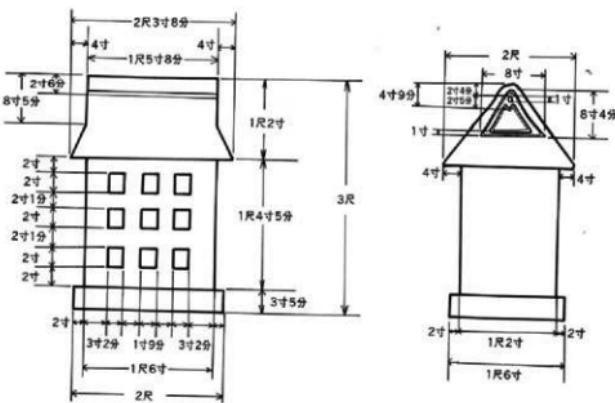


第図 4

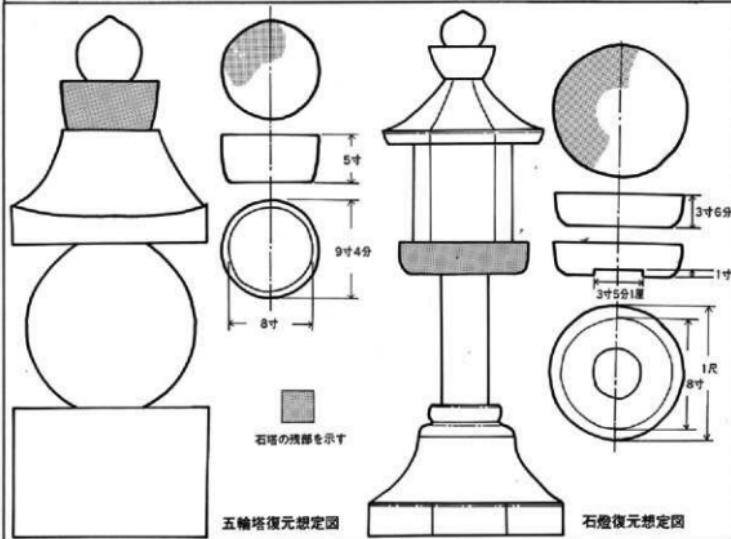
石祠の位置を示す



第9図 白苑寺廃寺跡第Ⅱ次調査B地点出土石祠復元想定図



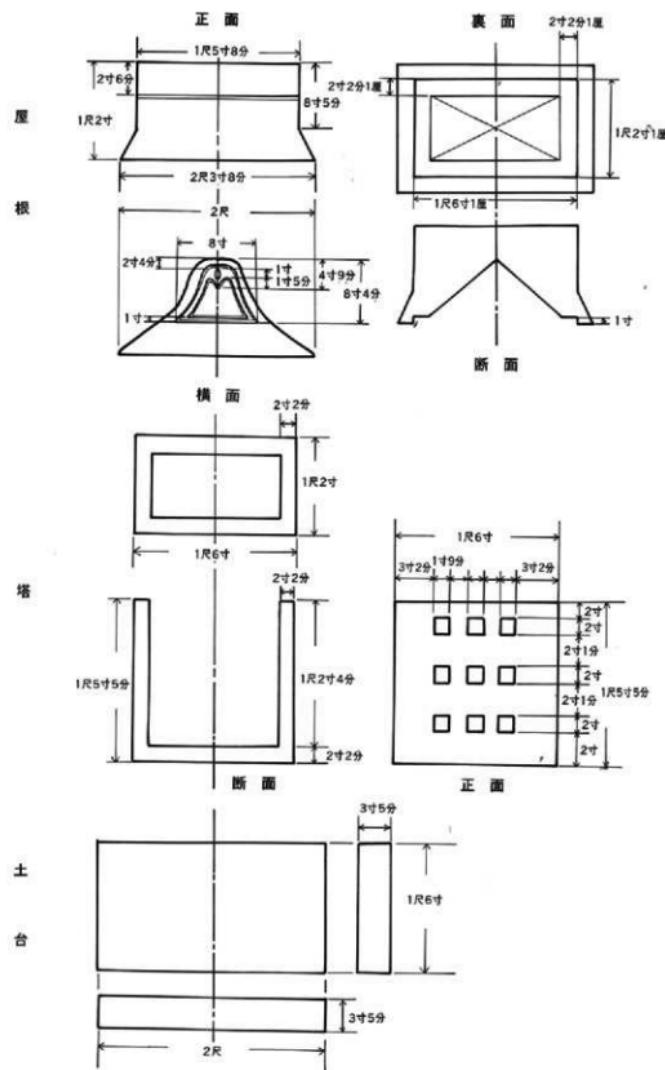
石祠復元計測図



五輪塔復元想定図

石燈復元想定図

第10図 党範寺廃寺跡第Ⅰ次調査B地点出土各種石塔復元想定図



第11図 党範寺廃寺跡第1次調査B地点出土石祠復元各部計測図

すれば礎石が存在した可能性が高く、6ヶ所の落ち込みを縦で結べば正六角形となり、基壇と同様の六角形の建物が築造されていた公算が高い。また現在の山麓には、栗野善雄氏の神龕「欽光窟」があり、その北側に古井戸とともに六面幢がある。石材は凝灰岩で笠石と台座だけが残り、中間の胴の部分は失われている。法量は笠石が長径130cm、六角の一辺が70cm、高さが55cmを測る。台座は長径127cm、一辺が60cm、厚さ15cmの六角形で中央で接する二枚組である。栗野氏によれば、この六面幢はA地点の北東部にあったものを昭和45年4月に栗野氏らが付近一帯にちらばっている切石とともに現在地に引き下したものだと言われる。大きさからこの六面幢は、南陽市諒訪神社境内に存する県指定文化財六面幢、高さ120cm、六面の一辺が36cm、凝灰岩製で北朝年号嘉慶3年(1389年)と、高畠町夏刈の資福寺跡にある六面幢(高さ305cm、胴囲り295cm、台座の一辺が147cm)の中間に相当するものとみられる。よってこの六面幢はA地点の北東コーナー部に存在したことは明らかで、A地点を伊達輝宗の牌所と推測する資料としては充分と言えよう。

B地点の平坦面には墓壙と礎石それに付隨する石祠が検出された。状況から察すれば中世期にみられる墓所上部に建造した御堂に類し、切妻風の堂が存在したことは明らかであり、A地点を輝宗の牌所とするなら、資福寺との関連も加味し、重臣である遠藤基信の牌所「医国院」跡と推測される。

第5節 第Ⅱ次調査

I 調査の経過

昭和62年度の第I次学術調査にひきつづき、4月7日より第Ⅱ次調査に入った。第I次調査で確認された6ヶ所の平場のうち、A・B地点の2ヶ所については、それぞれ輝宗(法名覺範寺殿)と輝宗の二七日に墓前で殉死した宿老遠藤山城基信(法名医国景蘊)の牌所跡として調査を実施した。第Ⅱ次調査では残りのD・E地点を中心に調査を実施した。即ち残りの殉死者である内馬場右衛門(法名拝月遼天)と須田伯耆(法名保福紹敬)の牌所を比定するのが目的である。

D地点は、表土剥離後トレントを入れた結果、ここは全面的に山腹をカッティングしたのでなく、その一部を削平し、盛土して形成されたものと判明した。E地点は4月18日から入り、表土剥離を行ったが、遺構らしきものは検出されず、塚と不明集石が見られるのみであった。

4月25日からはD地点に戻り、M32号塚状遺構の周辺に多量の小円礎が確認されることからこの調査に入った。M32は中央部が少し円形に凹んでおり、それを半截する形でトレントを入れた。その結果内部より多量の礎石を検出し、念のため洗浄すると、石の表面に墨書きが確認されて「一字一石経」と判断された。一方D地点のM11は、一辺3mの小規模な塚状を呈し、主体部より骨片・木炭・古錢などが検出されたため「火葬墓」と断定した。5月18日調査を完了。

II 検出された遺構（第2、12図 第四、五図版参照）

平地のF地点より、比高差約5mを有しD地点がある。標高は290mを有し北方には25m離れてE地点が構築されている。墓壙、溝状遺構、経塚の順で説明を加えたい。

1) 墓壙（O Y 2 第13図、第四図版）

平坦面の西南コーナー部に位置す。発掘前の状況は小規模な塚の様相を呈し周辺には大小形状の河原石と切石の破片が散乱していた。塚は方形で周囲には溝がめぐる形態と推測した。

精査の結果、周囲をめぐる溝はなく実測図に示したプランを有す基壇（以下マウンドと言う）を確認した。規模は南北2.4m(8尺)×東西2.8m(9尺)、高さは約30cm(1尺)に造成したものと想定される。マウンドの中央部には火葬骨を埋納した土壌を構築している。

土壙はレンズ状に堀られており、内部からは多量の木炭、火葬骨（第九図版）、第5図26の銅玉、36、37の永楽通寶が検出された。出土した遺物は焼成を受けた痕跡が認められ37の永楽通寶は変形した形状を呈す。古銭は4点出土しているが拓本可能なのは2点だけであった。他にマウンド上面から同図25、31のかわらけ、陶器片、周辺からは27~29の鉄製品が出土している。

土壙内部の壁面および底面とも焼成を受けた痕跡は認められない事、D地点平坦面からも焼成面は認められず他の場所で火葬したのは明確であり、火葬の際に生じた木炭も一括して埋納した事が多量に出土した炭化物からうかがえる。永楽通寶は「六道錢」と考えられる。

2) 溝状遺構（K Y 6~10）

K Y 10を除き墓壙周辺に集中して確認された。これらの溝の中でK Y 6 東南箇所、K Y 7 はD 1 地点の樹木移直痕に伴う溝であるのは重複関係や断面形態の観察から明確であるので割愛したい。K Y 6、8、9について説明したい。

K Y 6はD地点を造成する為に急勾配に削平した斜面直下に沿って構築された溝である。遺構平面図で途中で止まっているのは今回の精査範囲を「T76」までと設定した事による。従ってK Y 6は北東方向に延びている。幅65cm、深さは20cmを有し、平坦面から掘り込んでいる。斜面側が急勾配、平地側がゆるやかな斜面の断面形態である。この溝は本来、K Y 8と通じていたと想定されるが前述した近年の削平で明確に把握することは出来なかった。

K Y 8は墓壙の南側に位置す。「L」字形に構築され幅は80cm、深さは最深部で30cm、西から東へゆるやかに傾し、K Y 6と同じ掘り方の様相を呈す。

K Y 9はD地点の平坦面南端の縁边上に位置し、東側をK Y 7によって切られている。西方部が最も幅広く1.2m、東方に延びるに従い狭くなり、50cmとなる。性格としてはK Y 6、8、9とも配置された場所から考慮して排水溝と理解したい。ただしマウンドを区画する目的も含まれているのもつけ加えておきたい。K Y 10は一字一石礫経塚（以下経塚と呼ぶ）に配置された溝であり、次に述べる経塚の頁で説明したい。

3) 経塚（第14図、第五図版）

D地点の南側端縁辺部に位置す。経塚の下方には景観・あるいは土砂の崩れを防止するために構築されたと想定される参道（道路）がテラス状や階段状に整形されている。（第12図参照）

発掘前の状況は上部の中央部がややボール状に凹み、上部から下場、斜面に少疊の自然石が數十点散乱していた。経塚は平担面との比高差がほとんどない為に目立つ存在ではなく、測量調査（第一次調査）の時点では気づかずいた。発見のきっかけは表面採集した少疊の中に文字が書いてあるのを確認した事による。中央部の凹みは経塚の上部に石塔物「経碑」が建立されていた可能性が強い。

発掘前の平面形状は不整方形を呈し、東面と北面に「L」字形に溝を有す形態で塚のマウンドは約4m四方の隅丸方形であった。マウンド上面から下場までの比高差は1.8mある。下場は5.3mを計り、西側が三段になっている。全体的な様相としてはマウンドが若干、削平された状況と理解され結果として、石疊経が散乱していたものと言えよう。「第3節」、（調査に至るまでの経過）で述べた地元の人が採集したと言う文字の書れた疊はこの地点であった。

塚の調査はマウンド中央部にセクションベルトを残し一層ずつ掘り下げ、出土疊は文字の有無を確認し、有るものは平板に位置を示しながら進めた。その結果疊石経の分布はマウンド上面及び斜面にも分布（散乱していたのを除き）しており、塚全体が疊と客土の混合層で整形されているのが明らかになった。盛土は60cmある。塚はD地点を造成した後に構築し、回んでいた箇所からは直径1.1m、深さ60cmに穿った土壙（DY 1）が検出された。

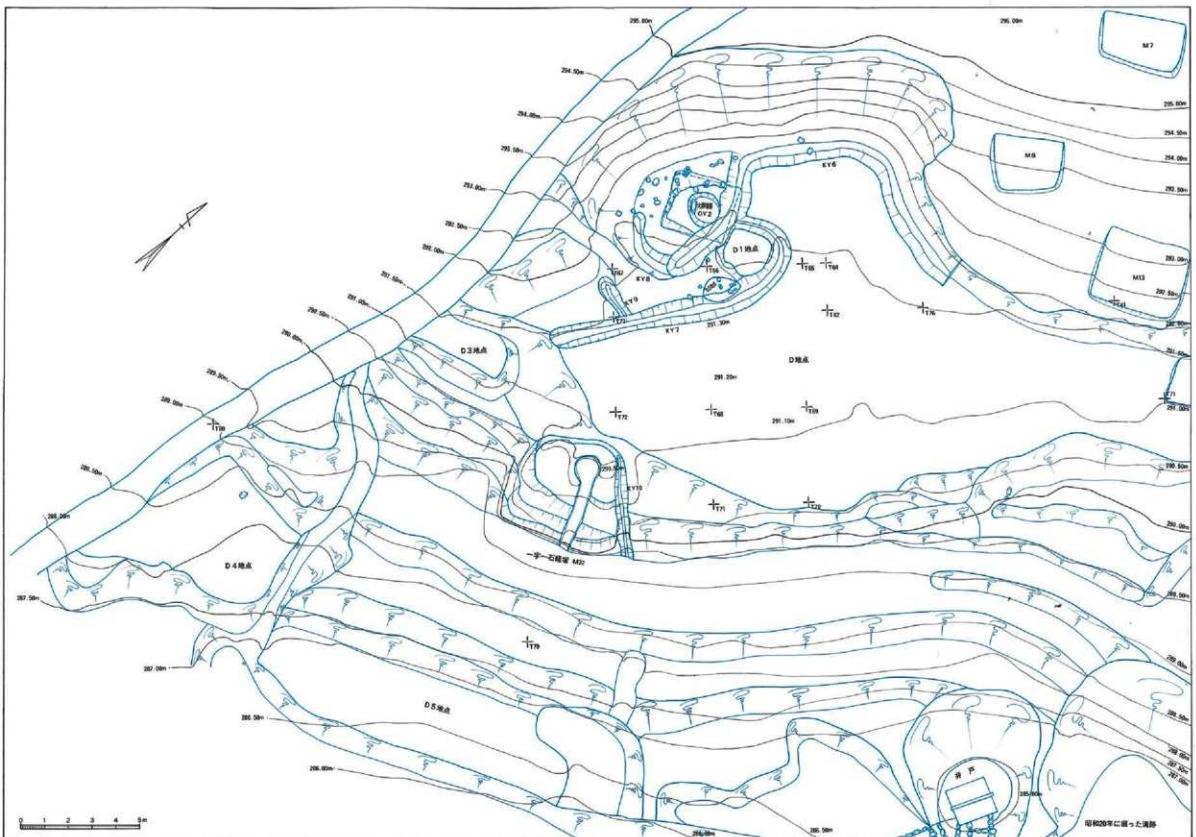
土壙内は4層に分けられ、すべて疊層でおおわれていた。I、III層に疊石経が埋納され、I層上面は大形状の平たい山石や河原石が配置され、I層下方の疊石経を保護する意図と考えたい。

疊石経の分布状況を見ると塚の上面や斜面上方部に最も多く埋納されており、層位的にもIII層が最も多い。しかしながら前述した発掘前の状況から考慮して、今回検出された疊石経の数量が埋納したすべてではないことをつけ加えておきたい。

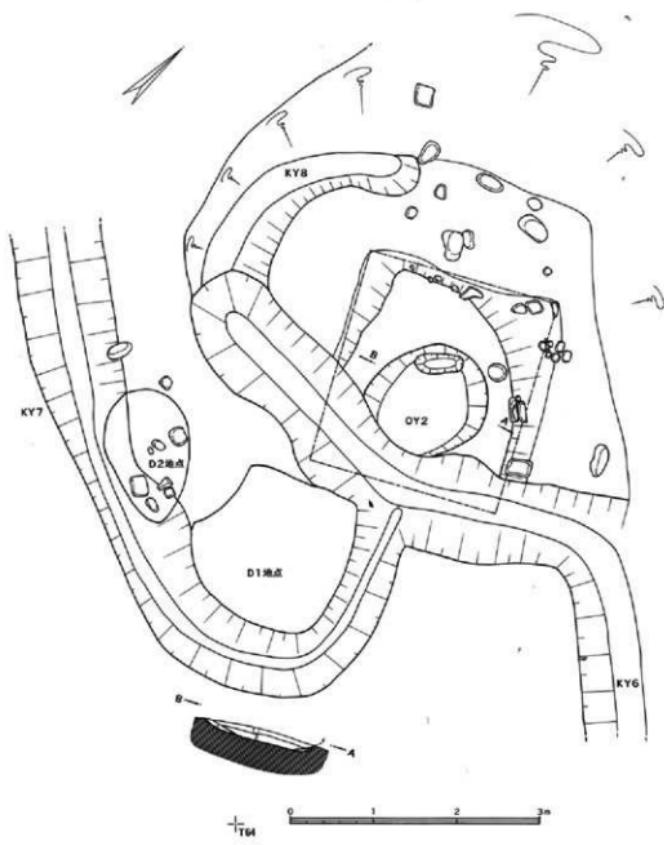
中央部に残しておいたセクションベルトを精査した後、塚の整形状況を観察する目的で中央部にトレンチを配し地山まで掘り下げた。その結果、D地点の平担面は約半分が黒土（客土）を使用して造成していること、次に塚の基部は山土を使用し造成し、その上部に疊および疊石経と山土を混合し塚を構築した事が判明した。疊石経の厚さは（疊と山土を含む）20cmある。

塚の北面・東面に配された溝は幅20~50cmある。北面の溝は平担面と区画するために構築されたものと想定したい。西方には溝は認められず。凹地になっている。階段状に認められる小規模なテラスは西方が東方の溝付近まで間隔を狭くしながら延びる。この為塚は、南面から見ると有段になっている。溝の東方下場より、第九図版に示した牛の顎骨がI層上面から出土している。

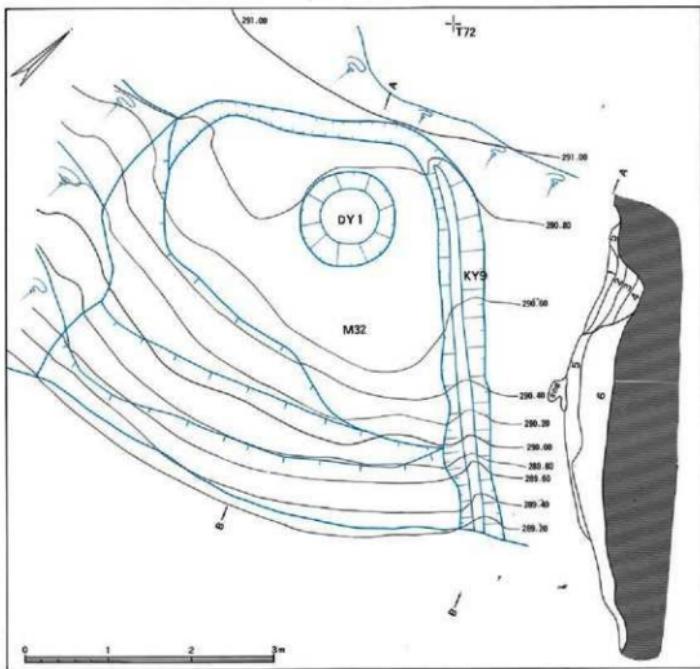
出土状況から経塚に伴う遺物と考えたい。



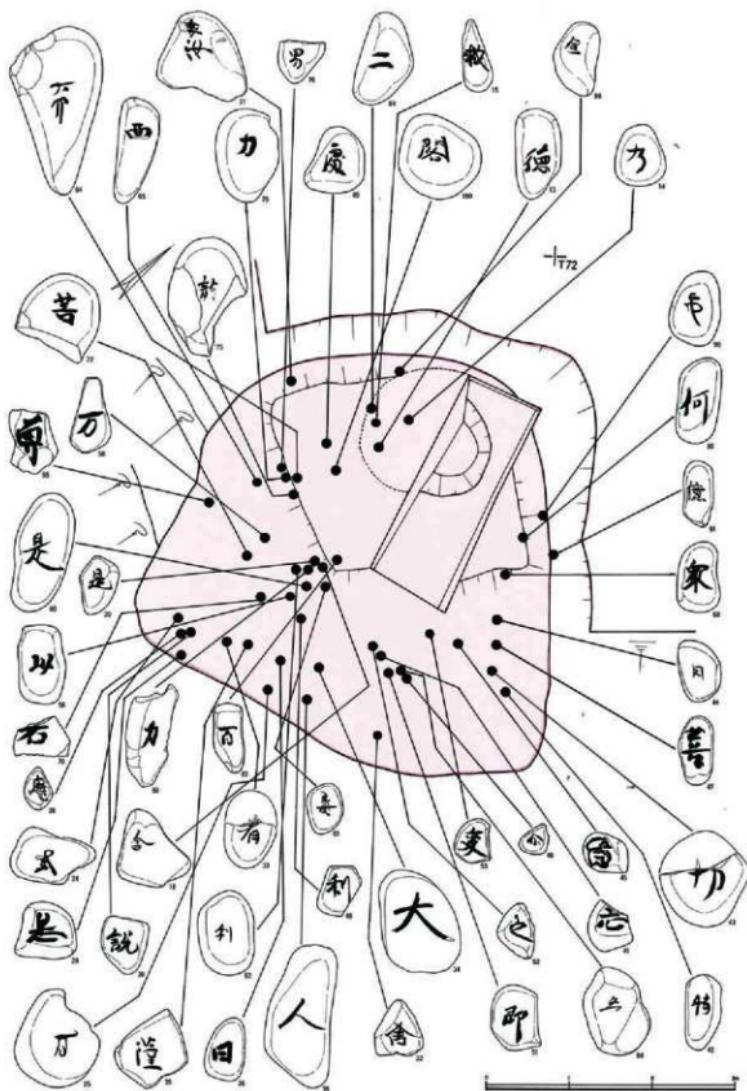
第12図 党籠寺廃寺跡第II次調査D地点遺構平面図



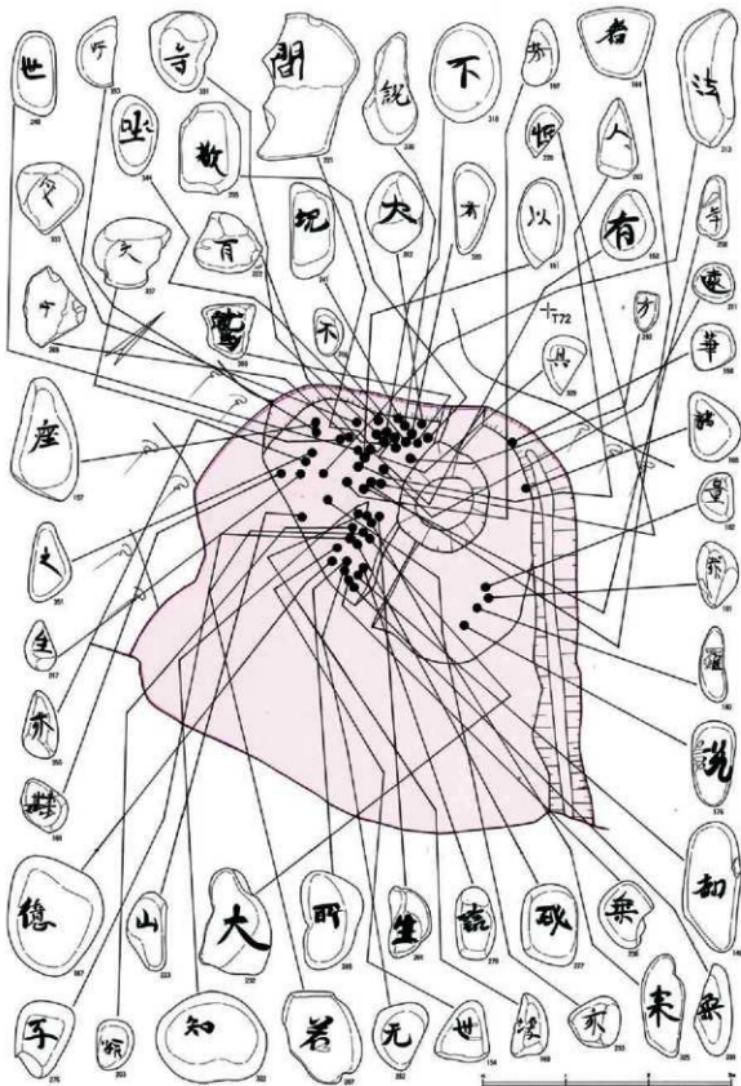
第13図 覚範寺廃寺跡第Ⅱ次調査D地点火葬場墓平面図



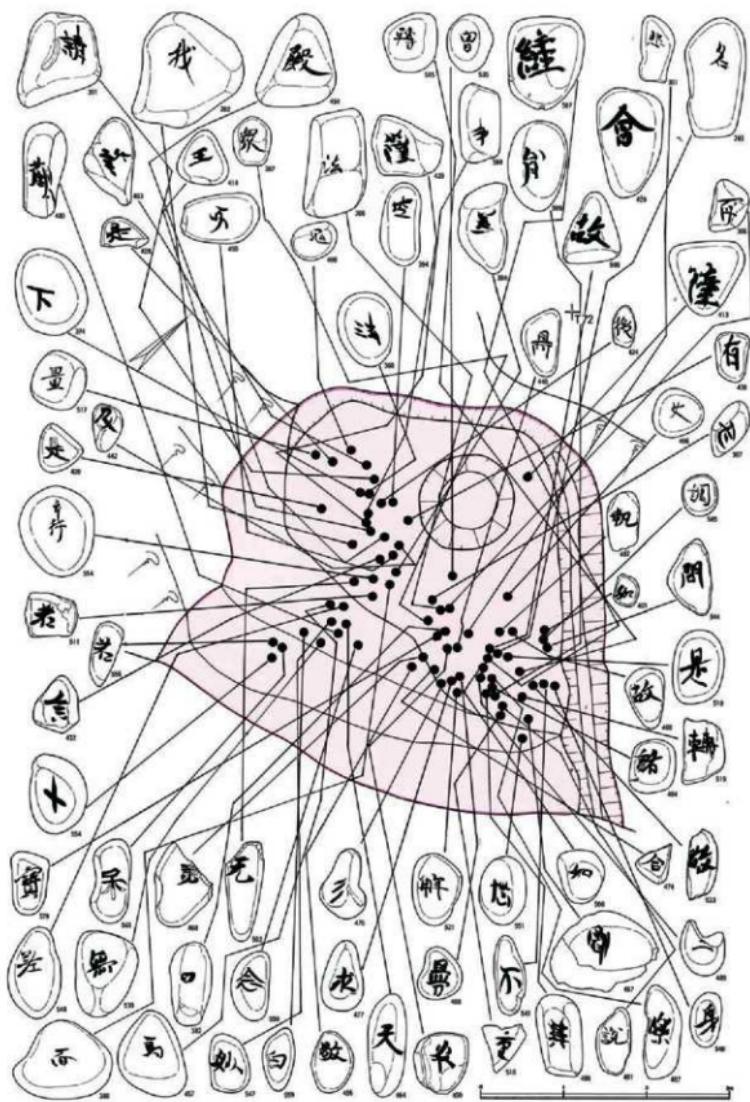
第14図 党純寺庵寺跡第Ⅱ次調査一字一石經塚平面図



第15図 覚範寺廃寺跡第II次調査D地点一字一石経塚I層面平面図



第16図 覚範寺廃寺跡第II次調査D地点一字一石經塚II層面平面図



第17図 党範寺寺跡第Ⅱ次調査D地点一字一石経塚Ⅲ層面平面図

III 検出された遺物

第二次調査により、検出された遺物は土器、石器、陶磁器類、土師質土器、一字一石経、人骨動物骨、古錢貨、鉄製品に大別される。以下これらの遺物について説明を加える。

1) 繩文時代の遺物（第5図33、34 第6図1、第七図版35～37）

土器、石器、凹石がD地点より出土している。土器は平坦面および下場の斜面から検出され6点出土した。いずれも磨滅が著しく拓本が可能なのは2点だけであった。出土した6点の繩文土器破片は口縁部片1点、胴部片4点、底部片1点であり、色調はすべて赤褐色を呈す。胎土にはやや大粒の石英砂を含み焼成は良好である。

図示した33は粗製の広口壺形土器と推測され、口縁部に一条の沈線で区画し、多条のLRを横位に施文している。34は器厚が厚く同一片ではない。胴部片と想定され器面全体に斜繩文が右から左に回転し施文している。

石器は頁岩を素材とした剝片で二次調整が認められなかったので図示しなかった。凹石は2点出土している。一字一石経塚の土壤Ⅰ層上面からの出土であり、緑色班岩を石材に用い長円形状を呈す河原石を素材としている。

これらの遺物は出土状況から判断して他の場所から客土した土砂に混入したものであり、D地点の斜面に繩文時代の遺跡が存在しているわけではないことをつけ加えておきたい。

2) 陶磁器類（第5図31 第七図版11）

二次調査ではD地点の墓壙周辺上面から1点出土している。口縁部片で図上複元すると口径が12.2cmある。器形は底部からゆるやかに外反しながら口縁部に至り、口唇部で極端に外反する。口唇部両面に一条の染付が巡ぐる。その直下には植物の花をデザインした鼻須の青色で描かれている。釉は両面に掛けられており、色調はコバルト色を呈す。

器厚は2mmと薄く胎土は精製された粘土を使用している。釉の掛けられた面と胎土のあいだに黒い微細な斑点が観察される。

3) 土師質土器（第5図25、32 第六図版4、第七図版6）

D地点墓壙のマウンドから散乱した状況で検出されたかわらけがある。口径14.6cmを有し、器高は4.5cmを計る。底部は糸切り無調整で整形されている。焼成はやわらかく他のA、B地点から出土しているかわらけに見られない手法である、指ナデが器面上半に顯著に観察される。

内面の底部は中央部が四部となっている。器厚は底面から口唇部までほぼ一定で6mmある。口唇部がやや内反する器形である。色調は赤褐色で黒く変色している箇所もある。

32は口縁部の破片である。内面は灰褐色で外面は黒く焼成を受けている。器形は平縁で口唇部下がやや厚くなっている。胎土に微細な石英砂を含む。A地点からも同様な破片が1点出土している。両者の胎土や器面の観察から土鍋の破片と想定したい。

4) 鉄製品（第5図26～30、第七図版16～19）

墓壙マウンドを中心に表土剥離の際に出土している。形状別に分類して説明したい。

○銅玉（第5図26、第七図版45）

墓壙内部から1点出土している。不整の球形を呈し直径1cm、重さは1gある。黒色を呈し部分的に緑色を有す。これは銅が酸化して出来る緑青であり、素材が銅であることがわかる。全体的に焼成を受けた痕跡を有す。用途は不明と言わざるを得ないが墓壙からの出土であり、埋葬者又は埋葬の際に関連する事だけは確実である。

○釣針形鉄製品（第5図27、第七図版19）

両端部が平たく整形され、他の箇所の断面形態は円形を呈す。長さは12.2cm、太さは9mmを計る。形状から判断して、物を釣り下げるために用いられた鉄製品であろう。

○和釘（第5図28～30、第七図版16～18）

3点出土している。28、29は同一形態の和釘である。頭部の形状から屋根葺きのおさえに竹を打ちつける釘であるまきがしらと想定される。29は物を掛けするに使用する折釘の形状に類似する。これらの遺物が出土している事はD地点の墓壙上部にもB地点と同様に墓堂の存在が考慮される。出土量が少ないので何らかの理由で持ち去られたとも理解され、遺構の削平状況はそれらの行為を暗示している。

5) 一字一石経

経塚の中で、特に「一字一石経」については、先学の研究が数多くあるが、関秀夫の論考を参考に述べると、「河原石のような丸味のある小さな礫石に、経文を一字ずつ墨書きしたものをして『一字一石経』と呼んでいる。（略）これらを一石経とも呼び、鎌倉時代あたりからはじめられたが、室町時代からの遺物が発見されており、江戸時代には各地で盛んに纂造されている。一字一石経の場合、経石を埋納した上部に、標識として石碑を建てる場合が多い。これを『經碑』と呼んでいる。一字一石経のことを記した經碑としては、大分県大野郡上尾塚の暦応2年（1339）の八角石幢が早い例である。そして一字一石経塚の纂造されている場所として、「寺院や神社の境内、あるいは何らかの形で宗教的な意味あいの濃い場所が選ばれている」と述べられている。又、埋納の方法として、「経石を甕に詰めて埋納するものもあれば、ただ単に土壤を穿って、これに経石を埋納する例も多い」。その願意は、「埋納の願意については、追善供養や現世利益のものがかなり多く見られる」という。

さて、「一字一石経」のことをさすと思われる14C半ばに書かれた『親鸞聖人正明伝』（巻三上）には、次のような一文がある。

「（親鸞）四十八歳ノ時ハ、鹿島、行方、奥部、南庄、國府、梯岡、羽黒、小栗ナトヲ勧メタマヘリケルニ、鹿島ノ近キアタリニ、鳥巣ト云里アリ、此里ニ寺アリ、寺中ノ墓ヨリ女ノ姿ナ

ル妖魔出テ，人ヲ惱マス，寺僧法力ヲ盡セドモ駿ナシ（略）是ハ其カミ山賊悪八郎ト云シ者ノ墓ナリ，四十年以来，カ・ル妖魔アリテ，今ハ入来人サヘタエタエニテ，寺院モ既ニ魔ノ住家トナレリ，（略）東國ノ風ナレバ，小石ヲアツメ，三部ノ經典ヲ書キ，カノ墓所ニ埋ミ，五箇日ノアヒダ誦經念佛シタマヘリ，（略）其後，果シテ妖魔アルコトナシ

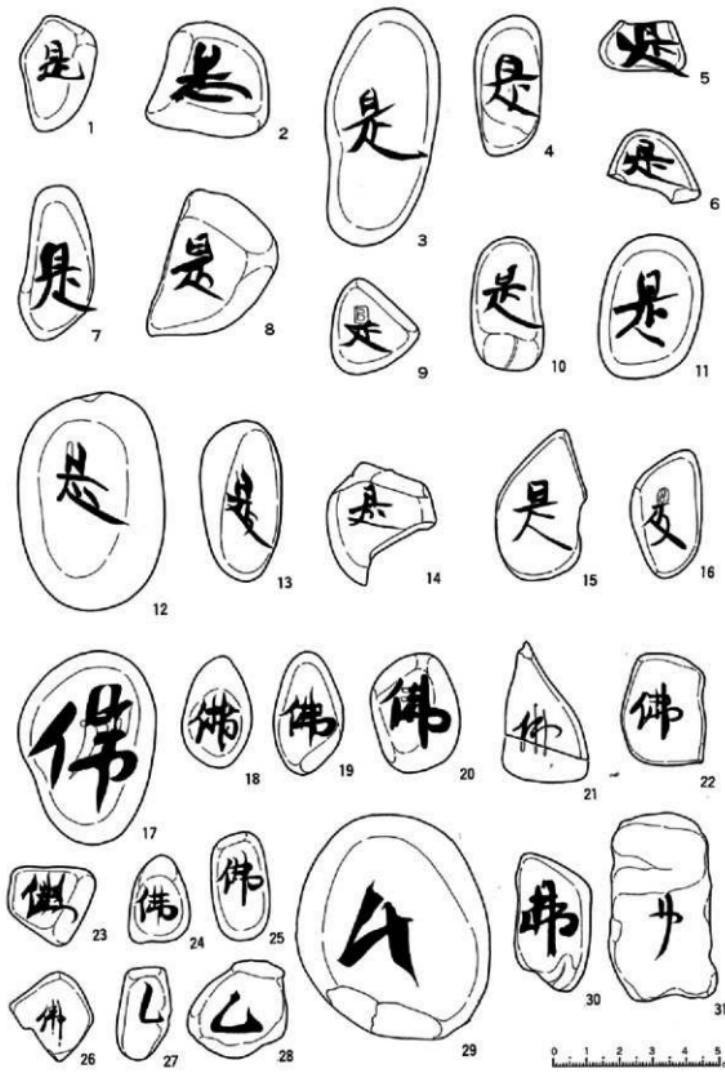
この中でとりわけ重要なことは、「東國ノ風ナレバ」，小石ヲアツメ，三部ノ經典ヲ書キ，カノ墓所ニ埋ミ」とある箇所で，まさに「一字一石經」の謂であることは疑いない。「東國ノ風」とあることで，當時親鸞が布教していた関東地方のことをさし，すでに14C頃には「一字一石經塚」の造立があったことは誤りないといえる。

さて，前述の関氏の論考にそって，本遺跡の「一字一石經」について述べると，本遺跡の經石も丸味をおびた扁平な河原石を用いており，とくに赤味をおびた河原石を中心を選定し，その上に經文の文字を書いている。「經碑」は見つからず，明確なる造立年代は不明であるが，前述の遺構の項でも述べたように，經塚は明確なマウンド状の形態でなく，いつの時代かに削平されており，礫石が表面に擾乱され，散布している状況であった。出土した礫石の総数は43,715点，そのうち墨書きが見られるのは1,367点であった。整理後，墨書き文字が判読できるものは，1,367点のうち791点，およそ58%である。その他は，墨書きがうすれ判然とせず，解説が困難なもの576点であった。經石の大きさは一定ではなく，重さ1gのものから，210gもあるものなど様々である。經石全部を平均していえば，長径4.4cm，短径2.9cm，厚さ約1.6cm，重さは約26gである。石材は，黄灰色，灰褐色の泥岩が主である。

文字についての考察は後述するが，総体的には「一字一石經」であるものの，中には經石表面に2文字書かれたもの（第2表 №735, 736），梵字（パン）と一緒に書かれたもの（同表 №738, 740, 741），表と裏にそれぞれ1文字ずつ書かれたもの（同表 №732, 733, 734）そして，表面に5文字書かれたもの（同表 №739）などが見られ，厳密な意味で「一字一石經」とは言い難い。又，書かれている文字についても，楷書あり，草書あり，異体字（例えば，屋→尼，余→爾等→所，元→無など）など各種様々である。書き方自体も，達筆なもの，金釘流のもの，文字自体知らない人が書いたのではないかと思われるものなど，これ又様々である。なお，文字筆跡についての分析・考察は第6節のⅢで詳述する。

經塚の築造された場所については，前述の通りD地点の東南隅であるが，まさにその場所は「寺院や神社の境内，あるいは何らかの形で宗教的な意味あいの濃い場所」である。

一体に，遺跡の概要でも述べたごとく，この覺範寺は愛宕山丘陵の山麓に所在するが，この丘陵は古來宗教的聖域として考えられてきたのではないかと想われる。丘陵頂上には，愛宕神社（祭神 勝軍地藏）が祀られ，京都の愛宕山と同様「火伏の神」として崇められており，その北側に位置する羽山神社（祭神 薬師瑠璃光如来）は，女人禁制の社として現在も地元では厳重に守



第18図 党範寺庶寺跡第Ⅱ次調査出土一字一石經実測図(1)



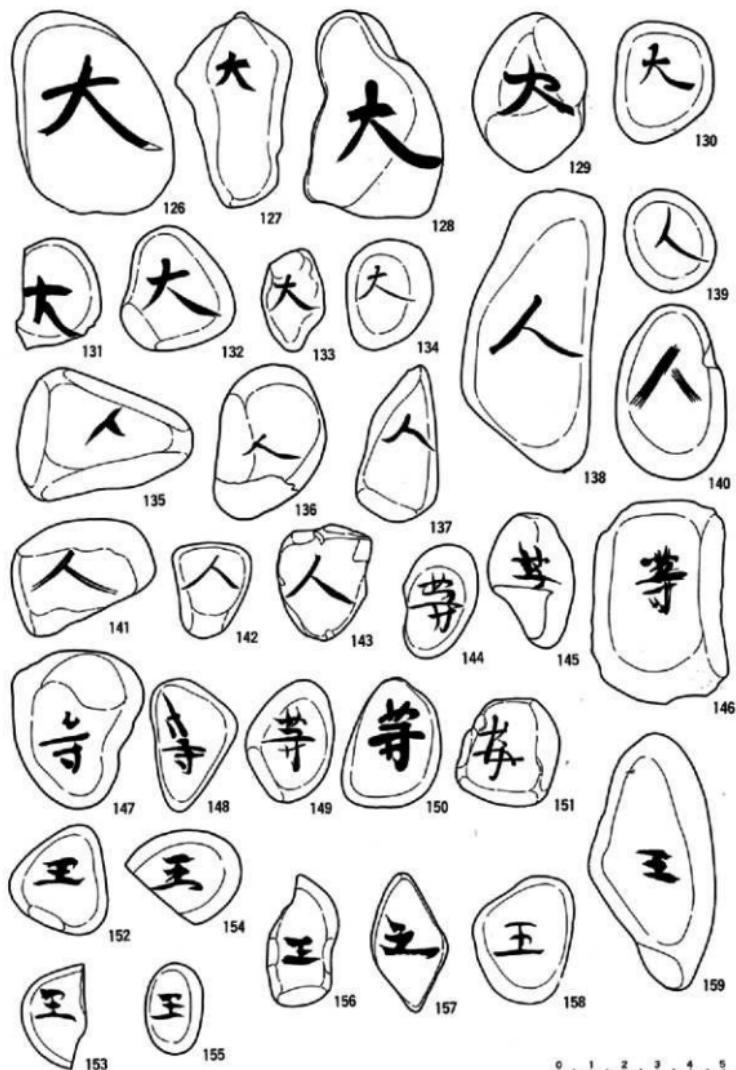
第19図 覚範寺廃寺跡第Ⅱ次調査出土一字一石經実測図(2)



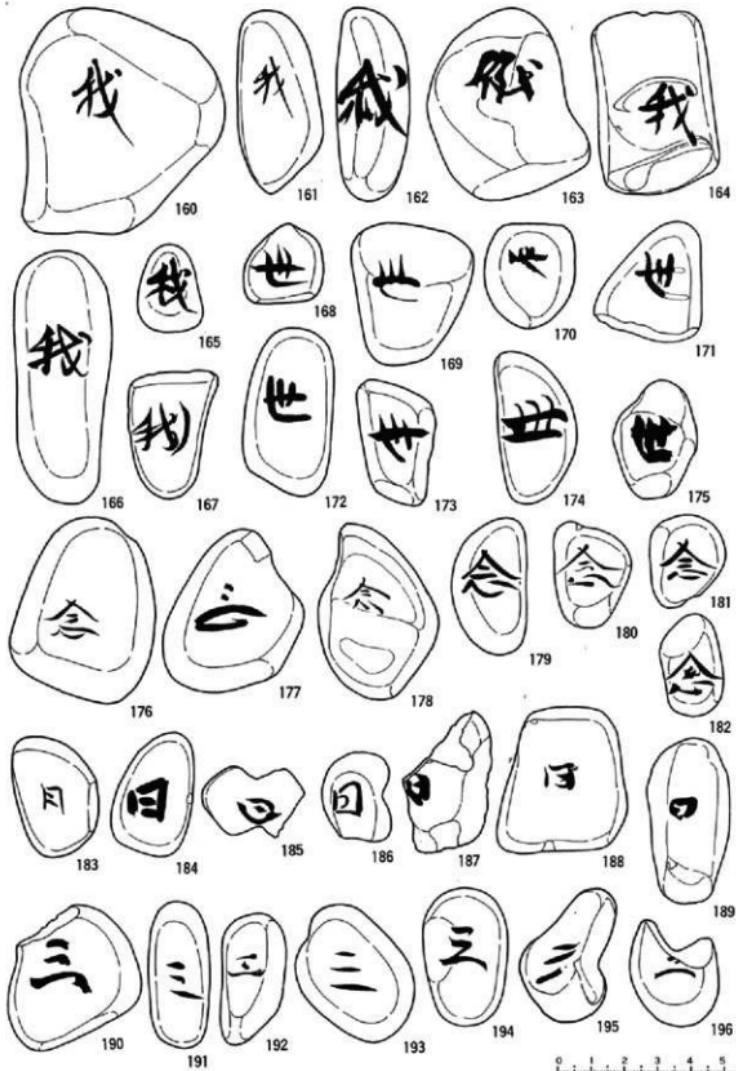
第20図 覚範寺廃寺跡第Ⅱ次調査出土一字一石經実測図(3)



第21図 党舎寺廃寺跡第Ⅱ次調査出土一字一石經実測図(4)



第222図 党範寺庵寺跡第Ⅱ次調査出土一字一石經実測図(5)



第23図 党範寺庵寺跡第2次調査出土一字一石經実測図(6)



0 1 2 3 4 5 cm

第24図 覚範寺唐寺跡第Ⅱ次調査出土一字—石經実測図(7)



0 1 2 3 4 5 cm

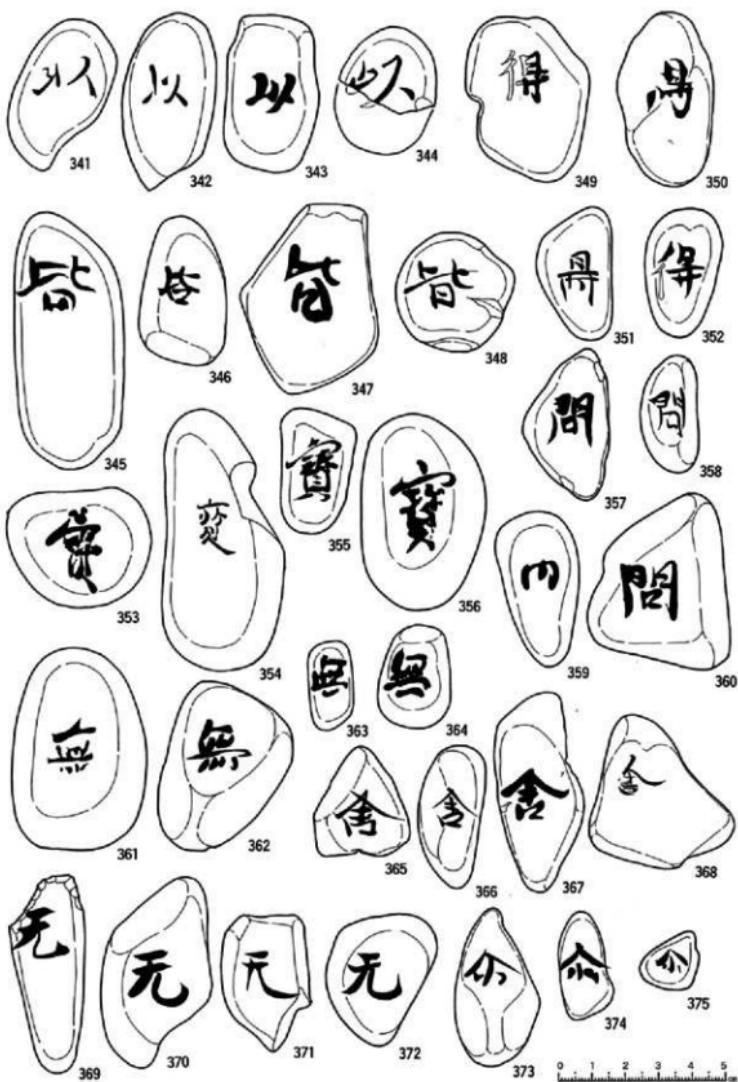
第25図 党範寺廐寺跡第Ⅱ次調査出土一字一石經実測図(8)



第26図 覚範寺廃寺跡第II次調査出土一字一石經実測図(9)



第27図 覚範寺鹿寺跡第Ⅱ次調査出土一字一石經実測図(10)



0 1 2 3 4 5 cm

第28図 覚範寺廣寺跡第Ⅱ次調査出土一字一石經実測図(11)



第29図 覚寳寺跡第Ⅱ次調査出土一字一石經実測図(12)



第30図 覚範寺魔寺跡第Ⅱ次調査出土一字一石經実測図(13)



第31図 党範寺廃寺跡第Ⅱ次調査出土一字一石經実測図(14)



0 1 2 3 4 5 cm

第32図 党範寺廃寺跡第Ⅱ次調査出土一字一石經実測図(15)



第33図 覚範寺廬跡第2次調査出土一字一石經実測図(16)



第34図 覚範寺廃寺跡第Ⅱ次調査出土一字一石經実測図(17)



0 1 2 3 4 5 cm

第35図 覚範寺廃寺跡第Ⅱ次調査出土一字一石經実測図(18)



0 1 2 3 4 5 cm

第36図 覚範寺廣寺跡第Ⅱ次調査出土一字一石經実測図(19)



0 1 2 3 4 5 cm

第37図 覚範寺廐寺跡第Ⅱ次調査出土一字一石經実測図(20)



第38図 覚箱寺廢寺跡第Ⅱ次調査出土一字一石經実測図(21)



第39図 覚範寺廃寺跡第Ⅱ次調査出土一字一石經実測図(22)

られている。又、この丘陵山裾には、南から長泉寺、幸徳院、地蔵院、西明寺とて、さらに遡って丘陵北側の生蓮寺そして丘陵西側には館山寺、龍性院というように真言宗、曹洞宗、淨土宗の古刹が連なっている。さらにこの他にかつては、阿弥陀院、光明寺、觀善寺、医王寺そして今回の覺範寺が存在したが、そのうち覺範寺は、伊達政宗の岩出山移封に伴い移転し、さらに現在仙台市に所在する。このように現在のものを含めて、二社十二ヶ寺がこの愛宕山陵にあり、あるいはあったことは、偶然の所為であろうか。想像するに、この一帯は中世期における一種の靈域あるいは聖域として考えられていたのではないだろうか。上杉氏入封後の城下町形成の中で、藩主関係の寺をのぞき、家臣団・町人の寺院が北寺町・東寺町として、城の北側・東側に配された形態とは全く異なるものである。従って今回の経塚は関氏が述べるところの「宗教的な意味あいの濃い場所」に合致するのではないだろうか。

埋納の方法としては、前述のごとく明確なマウンド状は呈していなかったが、「ただ単に土壤を穿って、これに経石を埋納」した形態と思われる。

さらにその願意としては、天正13年10月8日の輝宗の横死、そして寿徳禪寺で茶毘・資福禪寺での埋葬という一連の動きの中で、その間に覺範寺の建立工事が計画・実行され、翌天正14年中に完成していることから、輝宗の一一周忌法要に関連した経塚と考えたい。即ちこの経塚は輝宗に対する追善供養のために造られたものではなかろうか。導師は覺範寺開基の虎哉宗乙である。

6) その他の

その他検出された遺物としては、墓壙から出土した火葬人骨片と、経塚から出土した獸骨の2点についてである。以下簡単にそのことについて述べる。

○人骨片（第9図版）

D地点の墓壙（M11号墳）から検出された骨片は、重さにして約250 gあり、細かく砕けていて、身体のどの部位の骨であるかは不明。同伴の他の遺物（炭化物、永楽錢、釘など）と同様に火を被った痕跡が見られるものの、墓壙そのものには焼土痕は見られないことから、他の場所で茶毘にふされた後、この地に埋葬されたものと考えられる。この被葬者については、前述のごとく第1次調査によって、A地点は輝宗、B地点は遠藤基信の牌所跡と想定していることから、これは残りの殉死者の二人、内馬場右衛門と須田伯耆いすれかの牌所跡と考えたい。文献（『伊達治家記録』では、ただ単に殉死したことと、覺範寺に牌所を設けたことを記すのみで、詳細については、一切不明である。

○獸骨（第9図版）

M32号墳即ち経塚の南斜面下部から出土したもので、当初馬の顎骨と考えたが、「家畜比較解剖図説」により、牛の左下顎骨であることが判明した。これが何のために埋納されたかについては、経塚とどう関連するかも含めて、目下のところ不明である。

IV 要 約

第Ⅱ次の覺範寺廐跡の學術調査は、以上の成果をあげて終了した。その詳細は上述のごとくであるが、要約すれば次のようなことがいえる。

遺構として、M11の火葬墓とM32の経塚である。M11は、完掘後の土表面には焼土痕が見られないことから、他の場所で火葬された後、この場所に埋葬されたものと推測する。伴出した遺物として、骨片、明鏡、鉄釘、銅玉、炭化物、牛の顎骨、陶磁器片などが検出され、被葬者に関わる副葬品として考えたい。さらに、後世D地点は細や植林などにより地表面が荒されて明確ではないものの、小さな堂宇が建立されていたものと考えられる。その被葬者は誰かは断定できないが、殉死者の内馬場右エ門か須田伯耆のいずれかと思われる。

M32は、これ又上述の開発行為によって削平され明確なマウンドは見られなかつたが、調査の結果、経塚（一字一石経塚）であることが判明した。開発行為は、地表面だけで、塚の内部にまでは至らなかつたことは幸いであったが、反面そのことにより、上部の経石が一部失なわれたことは残念である。従つて、M32から出土した礫石43,715点のうち墨書が認められたのは3%弱の1,367点であり、さらに明確に文字の判読できるのはそのうちの791点と極めて少なく、この分析をより困難にさせたことは否めない。写経された経典は、「法華經」と推定され、細部にわたり全8巻28品のいずれの部分を写経したかを追求したが、断言できるまでには至らなかつた。

第六節 総 括

昭和62年度の第Ⅰ次調査、昭和63年度の第Ⅱ次調査の成果とも合わせ、検出された遺構と遺物それに一字一石経の3項に大別して、覺範寺廐跡を中心に考えてみたい。

I 遺 構

遺構は第Ⅰ次調査のA地点とB地点、第Ⅱ次調査のD地点の三地点を発掘した。既に前述した通り、A地点などを中心に礫石と思われる河原石や切石を相当数山から下げ、用水路のまま石に転用したと聞く。また、D地点、E地点の一部に果樹木を移植したことでも判り、移植痕跡となる落ち込みも検出している。事実、A地点やD地点、E地点には地元の人が言うが如く一点の河原石も存在せず、平坦面の所々で破壊的な落ち込みを調査で確認している。従つて残された遺構で断定することは極めて困難な状況にあると言わねばならない。その点も考慮し、各地点ごとにまとめてみたい。

1) A 地 点

六角形の基壇状を有するA地点からは礫石の抜取り痕跡と考えられる浅い落ち込みが検出された。穴の大きさからして想定される礫石の大きさは50cm~1m前後であり、六角形に配されているものとみられる。抜取り痕の中心から中心までの長さは3.2~3.5m余りを測り、仮に柱の太さ

を一尺と想定すれば個々の間尺は10尺となる。A地点の平坦面は他の地点と異なっており、あえて基壇とここではするが、土盛と溝を併用して横長の六角状を呈することは確実である。このことは、我々が礎石の抜取り痕から六角堂を推測することも自然と考える。また基壇の辺となる東側には六角堂に直面して1.2m(4尺)の参道の入口が開かれ、6m直進しB地点に折れ、B地点の石段に接続していることが判った。

さらに歓光窟の栗野氏の教示によれば、A地点の東に聞く入口付近のFY3に第3図に示した六面石幢が存在していたものを、栗野氏自身が数人の仲間と山裾に移動したと言う。その際に南に面した基壇上面に切り石が不規則に並んでいたものも一緒に運んだと言われ、我々も栗野氏の案内で運び出した切り石數十個を実見した。今回の調査では残念ながら確認されなかつたが、A地点、少なくとも南側に面した基壇上面に切り石が整然と配置されていた公算が強いものとみられる。また北側の方形の張り出しが虚空藏祠が以前に御堂として存在していたと言われるところからその際の基壇と考えるのも可能であり、そうすれば北側の不自然な落ち込みも納得できる。

2) 地 点

A地点から北に10m、比高差で約3m程下った所にB地点がある。一辺約15mの正方形プランを呈しており、階段状テラスと方形の小テラスが付属する平坦面には墓壇を中心に1間×2間の礎石跡と南北両面に浅い溝状の雨落ち溝が確認されている。墓壇の上面は既に掘られて明確でなかったが底面に近い所で90cm四方(3尺)の木質物が混入する土色変化がみられた。四方の隅には鉄釘が23点残存していることから、かつて木棺が設置されていたと考えられる。また墓壇内の堆積層からは多量の切石や小河原石も検出していることから、木棺埋納後に墓壇を配していたと推測される。

礎石からは5尺+5尺×10尺の建物跡が予想され、雨落ち溝から想定すれば2尺の軒を有する切妻形態の堂を有していたものと考えられる。小テラスは4箇所見つかっており、B2地点とB4地点からは本堂形態の石祠が破壊された状況で検出されていることから、あるいは他の地点にも同様もしくはそれらに類する構造物が存在したのかも知れない。

南北に走る階段状のテラスは1.2m(4尺)を有するもので、先述した様にA地点の参道に接合する。北の端は約一辺4mの方形状テラス(B3地点)が張り出し、そのテラスに直面して河原石を利用した石段がある。

3) 地 点

B地点と同様に山の斜面を削平して平坦面を成形している。削平範囲と形況からすれば、12m×10mがD地点の範囲と考えられB地点やE地点と基本的には同規模である。ところが南と東西側に大きく前部が広がっており、特異な形狀を呈している。事実、西端部には一字一石経塚の存在や、南に面した斜面にも大規模な階段状テラスが連続しており、後述する牌所の他に多目的な

広場として利用されていた公算が強い。調査した状況からはB地点にみられた礎石は既に抜取られているために検出できなかったが、火葬墳墓を有する方形の高まりが検出された。この土壇状の基壇はB地点で推測した墓壇上の基壇と同様な形態とも考えられ、当然の如く上部に堂（牌所）が建てられていたものとみるのが自然であろう。

以上、第Ⅰ次、第Ⅱ次調査で実施したA・B・Dの3地点の概要を述べてみた。覚範寺廃寺はこの3地点の他にA地点の西側に位置するC地点、D地点の東に位置するE地点と同じくD地点の南側で山麓から平地に位置するF地点の6地点があり、A・D・E地点を結ぶ中間には2m前後の低い方形状塚が22基存在している。塚は調査を実施していないので明確なことは言えないが墳墓の可能性が高いと思われる。C地点は面積が狭く、建物が存在した可能性は少ない。E地点も平担面の構築状況から察すればB地点と同様なものとみられる。F地点は南北20m、東西30mと最大の面積を有しており、北東隅に現在も当時の井戸跡が残っていることから覚範寺の中心的伽藍である本堂及び庫裡の場所と推測したい。C地点を除くA・B・D・Eの4地点は性山公治家記録に示されている覚範寺殿牌所（伊達輝宗）、医国院（遠藤基信）、辯月庵（須田伯耆）、保福庵（内馬場右衛門）の牌所に相当するものと考えられる。文献内でも牌所の大きさや形態を具体的に書かれていらないこともあって、断定することは危険であるが、六角を有するA地点は伊達輝宗・資福寺の状況からすればB地点が遠藤基信と判断することは可能であろう。

II 遺 物

覚範寺廃寺跡のA・B・D地点より出土した遺物の年代を大別すると、①縄文時代、②歴史時代、③近世・近代の3時期になる。下記に遺物年代の細別について述べたい。

1) 縄文時代の遺物（第6図1、第5図33、34、第七回版35~37）

前述したように縄文時代の遺物は客土（黒土）からの出土であり、遺物の年代を把握することによって客土をどの場所から運搬したのかを想定できる資料といえよう。遺物が出土する客土は同地点から運搬したものと考えるのが自然であり、従って土器、石器、凹石、フレーク、チップは同一年代の遺物と理解したい。

出土した遺物の中で年代を把握できるのは第33、34の土器群である。沈線と撋文を施す壺形土器と粗製土器で関東地方の加曾利B式、東北半島での宝ヶ峯式に併行するものである。本市では左沢遺跡出土のe・m類土器に類例がある。（米沢市埋蔵文化財報告書第11集参照）

調査地点の東方に位置する北沢遺跡（No.141、第1図参照）は本市遺跡地名表によると縄文晩期と記されている。しかしながら労力を考慮すると北沢遺跡の範囲から土砂を運搬したと推測するよりも覚範寺廃寺跡の平地が縄文時代の遺跡と複合している可能性も十分ありえる。

2) 歴史時代の遺物

出土状況や陶磁器の色調、器形から吟味して近世・近代に降らない遺物を一括して歴史時代の

遺物とする。この時期の遺物としては土師質土器、陶磁器、鉄製品、銭貨、石塔、石祠が上げられる。列挙した順に年代について検討を加えたい。

土師質土器

○かわらけ（第6図4, 5, 第5図2, 25, 第六図版1~4）

出土した4点とも底部は糸切り無調整で第5図25にだけ指ナデが観察される。器形や胎土および器面の調整からこれらのかわらけ群は16世紀末葉に位置するものであろう。ただし25は前述した手法から他の3点よりも古い要素を呈す。ちなみに覺範寺は天正14年（1586）の建立で天正19年（1591）の間存在した寺である。文献資料と考古資料とが矛盾しない例と言えよう。

○手焙り（第6図2, 3, 第七図版3, 5）

本市では初めての出土である。スタンプ連続押捺は鎌倉市を中心とした発掘調査による出土例が代表に上げられる。それによると14世紀中頃から出現するようであり、現代に至っている。本遺跡の遺物はかわらけと同様な年代を想定したい。

陶磁器類

○鉄釉桶（第5図24, 第六図版11）

器形は瀬戸の大窯II期に類似する。しかしながら大窯II期の鉄釉桶は瘤状突帯の成形が本遺跡出土と異なり、内面からの押し出しによるものでない事と、胎土が大窯と相違するとの指摘（愛知県陶磁器資料館、学芸員 井上喜久男氏の御教示による）から瀬戸の大窯の製品ではないとの結論に達した。大窯期以降とすれば覺範寺の存続期間に直接関連する遺物とは言えなくなってしまうが、発掘を実施した我々は出土状況から判断して覺範寺に伴う鉄釉桶と考えざるを得ない。

だとすれば瀬戸の大窯の器形を模して成形し、まだ未発見の窯で焼成されたことになろう。未発見の窯は15から16世紀の窯であり、現在関東以北では本市の戸長里窯（16世紀末葉）しか確認されていないが、今後これらの時代の窯が発見される可能性は諸条件から十分に予測され、今後の課題と言える。

○變形陶器（第5図1, 第七図版1）

灰釉陶器より発生した瓷器系陶器窯によって焼成された陶器である。釉薬を用いていないことや器面の観察から常滑系の大形變形陶器に類するものとみられる。これに平行する遺物として第6図7, 8がある。7, 8は須恵器系陶器窯（信楽、備前、丹波）の中世陶器である。

○鉄製品、古銭、石塔、石祠（第5図~第11図、第七図版16~34, 38~48、第八図版）

上記した遺物は各地点の遺構に密接に伴うものである。特に石塔、石祠は覺範寺建立の際に作成したと判断され、覺範寺開山の年代が与えられる。鉄製品も当時の建築様式に使用された形態と理解され、今後これらの遺物は年代を示す資料となろう。銭貨の中では永樂通寶がある。室町時代から江戸時代初期まで流通した通貨であり、火葬墳墓内部より出土している。

3) 近世・近代の遺物

A地点にある石祠、虚空藏信仰に関連する遺物群と理解され、主に陶磁器類が検出された。これらの遺物は19世紀前半から現代（20世紀前半）までの年代幅を有す陶磁器群である。大堀相馬焼や本郷焼で福島県産の陶磁器類が大半を占める。器種別に年代を検討してみよう。

○土瓶（第6図15～18、第六図版7～10）

16, 17は釉や胎土から19世紀前半の大堀相馬焼である。15, 17は在地産と考えられ前者は18から19世紀前半、後者は19世紀前半の年代があたえられる。当市の近世窯の代表として天明元年（1871）開業の成島焼がある。相馬の陶焼師を招いて相良清左エ門を監督として本市の西方に位置す成島で築成した。成島焼は陶土の性格から器厚が厚味で釉は鉄釉と墨灰を用いる。この事項から考慮すると、15は年代的に差があり、17は器厚が薄く両者とも成島焼とは言いがたい。

○呉須文様陶磁器類（第6図20～24、第6図版9, 10, 12, 13）

20の蛇目凹高台染付や21の広東碗、22の小形染付鉢、23の染付茶碗、24の染付小皿はいずれも呉須の色調から19世紀後半の陶磁器類である。広東碗は上の烟焼と考えられる。他は肥前系の窯と理解される。図示しなかった陶磁器類について述べると器形は前述した他に徳利、在地系磁器の筒形碗、トピカンナの文様を有し竹筒を模した陶器が上げられる。年代はいずれも19世紀前半に位置づけられる。器種の中では土瓶の出土量が最も多く11点を数える。

III 一字一石經の分類

経塚から出土した「一字一石經」について、以下その書写対象となった經典、經石の石材、書かれた文字の筆跡・筆法など3点に分けて述べることとする。

1) 経 典

出土した經石が、どのような經典に基づいていたのかを追求することは、一石に一文字という性格の遺物であるだけに、成句として書写されたもの一点（第2表 №739）をのぞいて、經典の特定は困難である。ただ全国で検出された經塚で主に埋納された經典としては、法華三部經（無量義經・妙法蓮華經、仏說觀普賢菩薩行法經）、淨土三部經（無量壽經、觀無量壽經、阿彌陀經）がその主流であり、他に般若心經、弥勒經、大日經、金剛頂經、理趣經などがある。ここでは、出土した經石の文字から「法華經」を書写したものと考えたい。

さて、前述したごとく墨書きられる經石は1,367点であるが、その中で判読可能のものは791点と全体の約60%である。これは法華經の総字数69,384字の1%弱であり、法華經8卷28品のどの部分を書写したものかを探求することは、かなり困難な作業といわざるを得ない。

そこで、「法華經一字索引」によって、經石に書かれた文字791点を具さに当たってみると、法華三部經の中の「妙法蓮華經」の中で、一品に一字しかしない文字は全部で421字であり、うち次の15字が、たった一字しか使用されていない文字であることが判った。

- ①「式」 - 2品 (方便品)
 - ②「虫」, 「保」 - 3品 (臂論品)
 - ③「似」, 「米」 - 4品 (信解品)
 - ④「槁」 - 5品 (荼草論品)
 - ⑤「坎」 - 6品 (授記品)
 - ⑥「村」 - 11品 (見宝塔品)
 - ⑦「喪」 - 16品 (如來壽量品)
 - ⑧「沫」 - 18品 (隨喜功德品)
 - ⑨「魚」 - 25品 (觀世音菩薩普門品)
 - ⑩「桑」, 「侵」, 「斗」, 「旨」 - 26品 (陀羅尼品)
- の以上、15文字である。

次に、出土した判読可能な文字の中で、2品にわたってしか存在しない文字は、「育」, 「鳥」, 「状」, 「角」の4ヶであり、それぞれ次の品にのみみられる。

- ①「育」 - 3品 (臂論品) と15品 (徒地涌出品)
- ②「鳥」 - 3品 (臂論品) と26品 (陀羅尼品)
- ③「状」 - 3品 (臂論品) と4品 (信解品)
- ④「角」 - 2品 (方便品) と28品 (善賢菩薩勸發品)

同様に3品にわたってしかみられない文字は、「俗」, 「反」, 「角」, 「請」, 「欄」, 「驚」, 「専」, 「執」, 「攻」の8ヶである。

- ①「俗」 - 13品 (勸持品) と14品 (安樂行品) と19品 (法師功德品)
- ②「反」 - 3品 (臂論品) と12品 (提婆達多品) と22品 (曇累品)
- ③「請」 - 3品 (臂論品) と7品 (化城論品) と16品 (如來壽量品)
- ④「欄」 - 1品 (序品) と3品 (臂論品) と11品 (見宝塔品)
- ⑤「驚」 - 3品 (臂論品) と12品 (提婆達多品) と16品 (如來壽量品)
- ⑥「専」 - 2品 (方便品) と19品 (法師功德品) と20品 (常不輕菩薩品)
- ⑦「執」 - 4品 (信解品) と17品 (分別功德品) と25品 (觀世音菩薩普門品)
- ⑧「攻」 - 2品 (方便品) と6品 (授記品) と11品 (見宝塔品)

これらを見やすないようにしたのが、第1表である。これをみると、第3品の「臂論品」が一番多く、次いで第26品の「陀羅尼品」そして第2品の「方便品」、第4品の「信解品」の順となるが、この表でみる限り（三経に使われた文字という前提ながら）、28品のうち21品にわたって文字が存在することから、28品の中の特定の經典のみを取り上げて、書写したものではないといえる。当初は覺範寺が臨濟系の寺院であることから、禪宗において特に大切とされる「方便品」「如

第1表 覚範寺出土経石の少數文字分類表

法華三部經	一經に使われる文字 式虫保似米槁次村夷沫魚桑侵斗旨	二經に使われる文字 育鳥状角	三經に使われる文字 俗反請欄驚專執政	計
妙法蓮華經				
第1			○	1
第2	○	○	○ ○ ○	4
第3	○○	○ ○ ○	○ ○ ○ ○	9
第4	○○	○	○	4
第5	○			1
第6	○		○	2
第7			○	1
第8				
第9				
第10				
第11	○		○ ○ ○	3
第12			○ ○	2
第13			○	1
第14			○	1
第15		○		1
第16	○		○ ○	3
第17			○	1
第18	○			1
第19			○ ○	2
第20			○	1
第21				
第22			○	1
第23				
第24				
第25	○			2
第26	○○○○	○		5
第27				
第28		○		1
計	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	2 2 2 2	3 3 3 3 3 3 3 3	47

来寿量品」そして別称「觀音經」といって宗派を問わず読まれる「觀世音菩薩普門品」の3品に焦点をあてて考察してみたのだが、どうも予想は外れたようである。

それならば、1品にしか使われていない文字を中心に、その文字が經典のどのような部分に用いられているかを「長行」と「偈頌」別にみた場合、

①「式」	(方便品)	「如三世諸仏 説法之儀式」	偈頌
②「虫」	(臂論品)	「諸惡蟲輩 交橫馳走」	偈頌
		「蟻蠍諸蟲 而集其上」	偈頌
		「毒蟲之屬 諸惡禽獸」	偈頌
		「惡蟲毒蟲 藏竄孔穴」	偈頌
		「惡鬼毒蟲 火火夢孽」	偈頌
		「多諸毒蟲 魔魅可畏」	偈頌
		「為諸小蟲 之所啖食」	偈頌
③「保」	(臂論品)	「我今為汝任保此事」	長行
④「似」	(信解品)	「我等皆似仏子」	長行
⑤「米」	(信解品)	「諸有所須盆器米鹽醯酢之屬」	長行
⑥「村」	(見宝塔品)	「無諸聚落村營城邑大海江河山川林藪」	長行
⑦「喪」	(如來壽量品)	「是時諸子聞父背喪」「今者捨我遠喪他國」	長行
⑧「沫」	(隨喜功德品)	「世皆不牢固 如水沫泡焰」	偈頌
⑨「魚」	(普門品)	「或漂流巨海 龍魚諸鬼難」	偈頌
⑩「桑」	(陀羅尼品)	「桑履」	長行
「侵」	(陀羅尼品)	「若有侵毀此法師者 則為侵毀是諸仏」	長行
「斗」	(陀羅尼品)	「斗秤欺詐人 調達破僧罪」	偈頌
「旨」	(陀羅尼品)	「旨教」「旨綴桿」	長行

「長行」と「偈頌」とは、総て經文の中の文章の体裁には2つの区別があり、一つは散文、一つは韻文であり、これを仏教では長行と偈頌というのであるが、今上記にみたように、長行と偈頌それぞれから採られており、一貫性はないようである。又、内容的にも、それぞれの品における重要性からみて、即ちその品の要諦となる部分を書写したというものではないようである。

第2表 覚範寺廃寺跡出土一字一石経計測分類表

No.	造物 No.	出土 地区	層位	縦の計測(cm, g)				横書の計測(cm)				報告	等級分類 群一類	石 材	『法華經』の「品」No.	備 考
				長径	短径	厚さ	重さ	たて	よこ	角鉄	たて:よこ					
1	20	塚	■	3.3	2.2	1.6	13	1.2	1.4	6	10:12	是	I-D ^a	泥 岩		
2	29	塚	■	4.0	3.4	1.2	27	2.0	2.6	3	10:13	是	■-A	黄灰色泥岩		
3	80	塚	■	7.2	3.5	1.2	47	2.4	2.4	5	10:10	是	I-E ^b	黄灰色泥岩		
4	102	土壁	■	4.3	2.1	1.2	13	2.0	1.8	5	10:9	是	■-A	黄灰色泥岩		
5	109	土壁	■	2.6	1.6	0.8	5	1.8	2.2	5	10:12	是	■-A	泥 岩		
6	428	塚	■	2.9	1.9	1.3	9	1.4	2.0	5	10:14	是	■-B	黄灰色泥岩		
7	251	塚	II	4.7	2.3	1.2	11	2.1	2.1	4	10:10	是	■-B	黄灰色泥岩		
8	225	塚	II	5.3	3.4	2.7	58	2.1	1.7	5	10:8	是	■-A	黄灰色泥岩		
9	420	塚	■	3.0	2.7	1.2	10	1.5	1.7	3	10:11	是	I-D ^a	黄灰色泥岩	①~④	
10	303	塚	II	4.1	2.1	1.9	18	2.0	1.9	4	10:10	是	■-B	黄灰色泥岩		
11	510	塚	■	4.4	3.0	1.1	21	2.9	2.0	6	10:7	是	■-B	黄灰色泥岩		
12	652	土壁		6.1	4.2	2.0	76	2.4	2.4	4	10:10	是	I-E ^b	灰色 泥岩		
13	1017	塚	■	4.9	2.6	1.2	20	2.2	2.0	5	10:9	是	■-A	泥 岩		
14	612	斜面		3.5	3.3	0.8	7	1.4	1.8	5	10:13	是	■-A	泥 岩		
15	782	塚	■	4.7	2.8	1.0	15	2.1	1.9	5	10:9	是	II-A ^c	黄灰色泥岩		
16	683	土壁		3.9	2.3	1.1	13	1.9	1.4	4	10:7	是	II-A ^c	泥 岩		
17	708	土壁		5.9	4.2	1.8	54	4.0	3.4	7	10:9	佛	I-B ^d	黄灰色泥岩		
18	67	塚	■	3.0	2.4	1.5	10	1.9	1.6	5	10:9	佛	■-C	泥 岩		
19	70	土壁		3.8	2.2	2.0	20	1.9	1.8	5	10:10	佛	I-D ^a	灰色 泥岩		
20	808	塚	II	3.5	2.5	1.9	20	2.2	2.2	6	10:10	佛	I-E ^b	泥 岩		
21	671	土壁		4.1	2.2	0.9	5	1.6	1.5	5	10:9	佛	I-C ^e	黄灰色泥岩		
22	309	塚	II	3.5	2.6	1.9	16	1.7	1.7	6	10:10	佛	■-C	黄灰色泥岩		
23	912	塚	■	2.7	2.4	1.9	18	1.6	1.7	5	10:11	佛	■-A	泥 岩		①~④
24	130	土壁	N	2.6	1.9	0.8	2	1.3	1.3	6	10:10	佛	■-B	黄灰色泥岩		
25	1217	塚	~N	3.3	1.8	1.1	8	1.7	1.5	6	10:9	佛	I-D ^a	黄灰色泥岩		
26	103	土壁	■	2.4	2.1	1.0	2	1.5	0.9	5	10:6	佛	I-C ^e	黄灰色泥岩		
27	1259	塚	~N	2.9	1.8	1.1	8	1.3	0.8	4	10:16	佛	■-A	泥 岩		
28	705	土壁		3.4	2.6	1.8	19	1.3	1.7	3	10:13	佛	■-C	泥 岩		
29	686	塚	■	7.2	5.8	1.7	83	3.1	2.6	4	10:8	佛	■-C	黄灰色泥岩		
30	113	塚	■	4.4	2.7	1.8	18	2.4	1.8	4	10:8	佛	■-B	黄灰色泥岩	①~④⑤⑥⑧	
31	642	土壁		5.6	3.4	1.9	45	2.1	1.1	5	10:5	佛	■-C	黄灰色泥岩		
32	318	塚	II	6.1	4.3	1.4	40	2.0	2.1	4	10:11	不	■-A	黄灰色泥岩		
33	990	塚	表面	5.6	4.8	1.7	67	2.1	2.0	5	10:10	不	I-A ^b	泥 岩		
34	846	塚	I	3.9	2.8	1.2	15	1.7	1.7	5	10:10	不	I-B ^d	灰色 泥岩		
35	1195	塚	~N	3.2	2.5	0.7	8	1.7	1.8	5	10:11	不	■-A	黄灰色泥岩		
36	592	斜面		4.5	2.5	2.2	25	1.6	1.7	5	10:11	不	■-B	黄灰色泥岩	①~④	
37	316	塚	II	2.9	1.5	1.5	6	1.3	1.2	5	10:9	不	■-B	黄灰色泥岩		
38	601	斜面		2.1	1.6	0.9	1	1.2	1.3	5	10:11	不	I-B ^d	黄灰色泥岩		
39	1037	塚	表面	4.0	2.2	1.2	13	1.6	1.3	5	10:8	不	■-B	黄灰色泥岩		
40	1206	塚	~N	2.6	1.9	1.4	9	1.7	1.4	5	10:8	不	II-A ^c	黄灰色泥岩		
41	541	塚	■	4.8	2.0	1.5	16	1.8	1.4	4	10:8	不	■-C	灰色 泥岩		

No.	遺物 No.	出土 地区	層位	理の計測(cm,g)				墨書の計測(cm)				墨書	裝飾分類 群一類	石 材	「法華鏡」の品 No.	備 考
				長径	短径	厚さ	重さ	たて	よこ	角数	たて:よこ					
42	927	塚	■	3.1	1.9	1.6	13	1.6	1.5	6	10:9	諸	V-B	黄灰色泥岩		
43	602	斜面		4.0	2.0	1.5	14	1.3	1.4	6	10:11	諸	V-D	灰色泥岩		
44	273	塚	II	2.6	1.8	1.5	9	1.1	1.1	5	10:10	諸	II-B	灰褐色泥岩		
45	594	塚	斜面	2.1	2.0	1.4	5	1.0	1.0	6	10:10	諸	II-B	黄灰色泥岩		
46	654	土壤		6.1	4.7	2.6	104	2.2	2.2	6	10:10	諸	II-A'	灰色泥岩		
47	857	塚	■	3.8	1.8	2.2	12	1.5	1.3	5	10:9	諸	II-B	黄灰色泥岩		
48	165	塚	II	4.3	3.1	2.1	31	1.2	1.4	6	10:12	諸	V-B	黄灰色泥岩	①~⑩	
49	1131	塚	II	5.2	4.8	2.3	69	2.5	2.9	6	10:12	諸	V-A	灰色泥岩		
50	522	塚	■	5.3	3.2	2.1	38	1.5	1.5	5	10:10	諸	V-A	黄灰色泥岩		
51	110	土壤	■	3.6	3.5	1.2	18	1.8	1.7	7	10:10	諸	V-D	灰色泥岩		
52	484	塚	■	3.2	2.8	1.6	19	1.6	1.8	6	10:11	諸	V-A	黄灰色泥岩		
53	1221	塚	ペクト	5.4	3.7	1.7	35	1.0	1.4	5	10:14	諸	II-B	黄灰色泥岩		
54	435	塚	■	3.8	2.3	1.8	20	1.6	1.8	5	10:11	法	V-B	黄灰色泥岩		
55	668	土壤		6.5	2.6	1.8	40	1.7	1.6	5	10:10	法	V-B	泥岩		
56	366	塚	■	6.5	3.6	1.7	53	1.2	1.2	5	10:10	法	V-D	黄灰色泥岩		
57	1212	塚	ペクト	3.4	3.1	2.0	26	1.5	1.5	5	10:10	法	V-C	黄灰色泥岩		
58	633	土壤		4.4	3.4	0.8	10	1.2	1.3	5	10:11	法	V-D	黄灰色泥岩		
59	475	塚	■	4.1	4.0	1.5	35	1.8	1.6	6	10:9	法	V-B	黄灰色泥岩	①~⑩	
60	1207	塚	ペクト	8.6	5.1	2.4	140	2.3	1.9	6	10:8	法	V-C	泥岩		
61	369	塚	■	4.6	3.4	1.2	20	2.1	1.5	4	10:7	法	V-A	黄灰色泥岩		
62	313	塚	II	8.3	3.8	1.3	48	2.4	1.8	6	10:8	法	V-A	黄灰色泥岩		
63	49	塚	■	6.4	3.6	1.8	48	1.5	1.3	6	10:9	法	V-C	黄灰色泥岩		
64	30	塚	■	3.6	3.1	0.5	6	1.7	1.9	5	10:11	説	V-A	黄灰色泥岩		
65	816	塚	II	5.1	4.5	1.2	28	1.5	1.9	6	10:13	説	V-B	泥岩		
66	176	塚	II	5.1	2.6	0.9	16	2.6	2.5	5	10:10	説	II-A'	黄灰色泥岩		
67	278	塚	II	4.5	2.4	2.3	33	1.8	1.9	5	10:11	説	V-C	黄灰色泥岩		
68	448	塚	■	5.1	4.1	1.8	58	1.5	2.2	5	10:15	説	I-E'	灰色泥岩	①~⑩	
69	481	塚	■	3.9	2.0	0.7	7	1.1	1.7	5	10:16	説	V-B	灰褐色泥岩		
70	755	土壤		5.9	4.6	1.3	45	2.7	3.3	5	10:12	説	V-A	黄灰色泥岩		
71	336	塚	II	6.6	3.4	1.8	36	1.6	1.9	5	10:12	説	V-B	黄灰色泥岩		
72	806	塚	■	5.0	3.0	1.8	35	1.7	2.0	6	10:12	説	V-C	泥岩		
73	568	斜面		5.1	2.3	3.1	26	2.0	1.7	5	10:9	説	V-C	黄灰色泥岩		
74	253	塚	II	4.4	2.4	1.1	13	1.1	1.0	4	10:9	所	I-C'	黄灰色泥岩		
75	1222	塚	ペクト	6.6	2.8	1.1	30	1.6	1.1	5	10:8	所	I-A'	黄灰色泥岩		
76	562	斜面		5.2	4.7	1.6	52	2.4	2.0	6	10:8	所	II-A'	黄灰色泥岩		
77	669	土壤		4.6	3.0	1.3	22	2.1	1.9	5	10:9	所	V-C	泥岩		
78	1018	塚	表面	4.3	3.4	1.9	41	1.6	1.5	6	10:9	所	V-A	黄灰色泥岩	①~⑩	
79	285	塚	II	6.0	3.9	1.8	59	1.6	1.9	5	10:12	所	V-A	黄灰色泥岩		
80	685	土壤		4.7	3.1	2.7	57	1.3	1.8	4	10:14	所	II-A'	黄灰色泥岩		
81	386	塚	II	3.2	2.1	1.0	9	1.6	1.6	5	10:10	所	V-C	黄灰色泥岩		
82	617	土壤		5.0	2.6	1.0	8	1.4	1.4	5	10:10	所	I-A'	黄灰色泥岩		
83	553	塚	II	6.6	3.8	2.5	59	1.6	1.4	5	10:9	所	I-A'	黄灰色泥岩		
84	578	斜面		5.8	4.2	1.3	40	2.4	2.1	5	10:9	蘇	V-C	泥岩		

No.	遺物 No.	出土 地図	層位	縦の計測(cm, g)				横の計測(cm)				墨書	裏跡分類 群-類	石 材	『法華経』の「品」No.	備 考
				長径	短径	厚さ	重さ	たて	よこ	角数	たて・よこ					
85	413	塚	Ⅲ	4.5	4.5	1.3	29	2.7	2.0	5	10:8	麻	V-D ^a	黄灰色泥岩		
86	170	塚	Ⅲ	5.6	2.6	2.0	38	2.0	1.6	7	10:8	麻	V-B	黄灰色泥岩		
87	1203	塚	~64ト	3.8	2.6	1.3	20	2.4	1.6	5	10:7	麻	V-C	泥 岩		
88	591	塚	斜面	4.7	2.5	0.9	7	2.2	2.2	6	10:10	麻	V-A	黄灰色泥岩	①~88	
89	98	土壇	Ⅱ	5.2	2.3	1.3	11	2.3	1.6	6	10:7	麻	V-B	黄灰色泥岩		
90	35	塚	Ⅲ	4.6	4.2	1.3	28	2.0	1.5	5	10:8	麻	III-C	灰 地 泥 岩		
91	429	塚	Ⅲ	4.3	3.5	1.5	27	2.3	1.7	6	10:7	麻	V-C	黄灰色泥岩		
92	38	塚	Ⅱ	4.6	3.0	1.1	16	2.3	1.9	5	10:8	麻	V-B	黄褐色泥岩		
93	295	塚	Ⅱ	5.4	2.7	1.5	25	1.8	1.5	6	10:8	麻	I-B ^a	黄灰色泥岩		
94	1243	塚	~64ト	4.3	2.3	0.7	7	1.9	1.2	5	10:6	麻	V-C	泥 岩		
95	578	斜面		3.6	2.8	1.4	18	2.1	1.8	5	10:9	麻	V-A	泥 岩		
96	145	塚	Ⅱ	3.7	2.7	1.1	19	2.1	1.7	6	10:8	麻	V-A	灰 色 泥 岩		
97	1302	塚	~64ト	5.2	4.7	1.2	39	1.8	1.4	5	10:8	麻	I-E ^a	黄灰色泥岩	①~88	
98	365	塚	Ⅲ	5.4	3.4	1.1	24	1.5	1.6	5	10:11	麻	I-A ^a	黄褐色泥岩		
99	50	塚	Ⅱ	5.4	3.7	1.7	47	1.0	1.8	5	10:18	麻	V-D	玄 武 岩		
100	783	塚	Ⅲ	4.7	3.6	1.7	39	1.8	1.7	4	10:10	麻	V-C	泥 岩		
101	142	土壇	IV	3.7	3.2	1.6	15	1.8	1.4	5	10:8	麻	I-A ^a	黄灰色泥岩		
102	139	土壇	Ⅲ	4.6	3.7	1.7	30	1.9	1.5	6	10:8	者	II-A ^a	黄灰色泥岩		
103	184	塚	Ⅱ	4.6	4.4	1.1	25	1.6	5	10:12	者	V-C	黄灰色泥岩			
104	511	塚	Ⅲ	3.2	2.8	1.3	13	1.5	1.5	7	10:10	者	V-B	黄灰色泥岩		
105	234	塚	Ⅱ	7.2	2.9	1.8	32	2.9	2.9	5	10:10	者	N	黄灰色泥岩	①~49	
106	300	塚	Ⅱ	5.3	4.4	1.9	39	2.2	2.1	6	10:10	者	V-B	黄灰色泥岩		
107	33	塚	Ⅲ	3.1	2.7	1.5	14	1.8	1.5	5	10:9	者	V-D	泥 岩		
108	166	塚	Ⅱ	2.6	1.4	1.0	2	1.4	1.0	6	10:7	者	V-B	黄灰色泥岩		
109	1158	塚	Ⅲ	3.0	2.4	1.6	25	1.2	1.0	4	10:8	者	V-B	泥 岩		
110	758	土壇		7.3	4.1	2.5	93	1.2	2.3	4	10:19	細	I-E ^a	泥 岩		
111	848	理	I	5.6	3.5	2.3	40	1.4	1.6	6	10:12	細	I-B ^a	泥 岩		
112	401	塚	Ⅲ	1.9	1.4	0.9	2	0.9	1.2	5	10:13	細	II-B	黄灰色泥岩		
113	926	塚	Ⅲ	4.2	1.9	1.1	10	1.8	1.8	5	10:10	細	V-A	泥 岩	①~48	
114	500	塚	Ⅲ	3.2	2.7	1.6	15	1.0	1.5	5	10:15	細	V-B	黄灰色泥岩		
115	1205	塚	~64ト	5.9	3.3	1.5	36	1.7	2.3	5	10:14	細	V-A	泥 岩		
116	530	塚	Ⅲ	3.5	2.8	1.4	15	1.5	1.7	6	10:11	細	I-D ^a	黄灰色泥岩		
117	647	土壇		3.4	1.8	1.1	8	1.7	1.9	5	10:11	細	V-C	黄灰色泥岩		
118	64	塚	Ⅲ	10.1	5.6	2.8	170	2.4	1.7	5	10:7	薄	I-E ^a	黄灰色泥岩		
119	838	塚	I	7.1	3.1	1.5	53	2.1	2.0	5	10:10	薄	I-B ^a	黄灰色泥岩		
120	1163	塚	Ⅱ	4.1	2.0	0.9	10	1.4	1.1	6	10:8	薄	V-D	黄灰色泥岩		
121	47	塚	Ⅲ	4.1	2.1	0.6	6	2.5	1.8	5	10:7	薄	V-C	黄灰色泥岩	①~48	
122	615	塚	斜面	4.7	2.4	1.2	18	1.5	1.8	7	10:12	薄	I-A ^a	灰 色 泥 岩		
123	72	塚	Ⅲ	4.8	4.6	1.0	29	2.0	1.6	6	10:8	薄	V-B	黄褐色泥岩		
124	525	塚	Ⅲ	3.2	2.6	1.1	13	1.8	1.8	5	10:10	薄	V-A	黄灰色泥岩		
125	265	塚	Ⅱ	4.0	3.7	0.8	13	1.1	0.9	5	10:8	薄	I-C ^a	黄灰色泥岩		
126	34	塚	Ⅲ	6.5	4.2	1.9	87	3.1	3.8	5	10:12	大	I-B ^a	泥 岩		
127	684	土壇		5.9	3.6	2.1	43	1.2	1.3	5	10:11	大	V-A	泥 岩		

No.	地物 No.	出土 地区	層位	礫の計測(cm, g)				粘岩の計測(cm)				岩相	準鉱分類 群一級	石材	『法華經』の「品」No.	備 考
				長径	短径	厚さ	重さ	たて	よこ	角数	たて:よこ					
128	232	塚	II	6.6	4.6	1.7	50	2.9	3.2	4	10:11	大	I-B ¹	黄灰色泥岩		
129	312	塚	II	4.8	3.5	2.0	32	1.8	2.5	5	10:14	大々	V-B	黄灰色泥岩		
130	778	塚	III	3.6	3.0	0.9	14	1.5	1.7	6	10:11	大	I-D ³	泥 岩	①~卷	
131	106	土壤	II	3.6	3.0	1.0	10	2.0	1.8	5	10:9	大	V-C	黄灰色泥岩	②~卷	
132	87	塚	II	3.5	3.4	1.0	15	2.0	2.4	5	10:12	大	I-B ²	灰色泥岩		
133	423	塚	II	3.0	1.9	1.0	6	1.1	1.6	4	10:15	大	I-D ³	泥 岩		
134	398	塚	II	3.3	2.9	1.9	18	1.2	1.8	3	10:15	大	I-A ³	泥 岩		
135	1252	塚	ペクト	5.4	4.4	3.0	88	1.2	1.2	3	10:10	人	I-C ³	泥 岩		
136	1008	塚	表面	4.9	3.4	1.7	25	0.7	1.6	3	10:26	人	I-A ³	黄灰色泥岩		
137	283	塚	II	4.6	2.1	2.4	18	1.1	1.7	3	10:15.5	人	V-B	黄灰色泥岩		
138	39	塚	II	8.3	3.6	2.1	63	1.9	2.8	3	10:15	人	I-B ⁴	黄灰色泥岩		
139	1188	塚	ペクト	3.2	2.8	1.3	13	1.7	1.7	3	10:10	人	I-C ³	黄灰色泥岩	①~④	
140	272	塚	II	5.3	3.5	1.8	44	2.0	2.2	3	10:11	人	I-D ³	黄灰色泥岩		
141	577	斜面		4.5	2.9	1.5	30	1.4	2.7	3	10:19	人	I-D ¹	灰色泥岩		
142	860	塚	I	3.1	2.5	1.3	11	1.1	1.6	3	10:16	人	I-A ³	灰色泥岩		
143	419	塚	III	3.4	2.9	1.7	12	1.6	2.2	3	10:14	人	I-B ³	黄灰色泥岩		
144	434	塚	III	3.6	2.3	1.4	13	1.9	1.7	7	10:9	等	V-B	黄灰色泥岩		
145	1272	塚	ペクト	4.3	2.7	1.8	22	1.5	1.5	7	10:10	等	V-B	黄灰色泥岩		
146	1190	塚	ペクト	6.3	4.1	1.1	36	2.1	1.5	6	10:7	等	N	黄灰色泥岩		
147	331	塚	II	5.8	4.1	1.8	45	2.0	1.6	5	10:8	等々	II-A ¹	黄灰色泥岩	①~④	
148	117	土壤	II	4.0	2.6	1.1	13	2.5	1.4	4	10:5.5	等々	V-B	黄灰色泥岩		
149	537	塚	III	3.8	2.8	1.5	18	2.0	1.6	7	10:8	等	V-B	黄灰色泥岩		
150	828	塚	II	4.0	2.7	0.7	10	2.2	1.7	6	10:8	等	II-A ¹	泥 岩		
151	582	斜面		3.2	2.7	1.2	15	1.5	1.3	6	10:9	等	II-B	泥 岩		
152	414	塚	III	3.3	3.1	1.3	12	0.9	1.6	4	10:18	王	V-C	黄灰色泥岩	①~⑦	
153	1228	塚	ペクト	3.3	2.0	0.9	7	1.0	1.3	4	10:13	王	V-A	黄灰色泥岩	⑨~⑩	
154	1204	塚	ペクト	3.4	2.6	1.5	18	1.1	1.7	4	10:15.5	王	V-A	黄灰色泥岩	⑪~⑬	
155	10	塚	II	2.7	1.8	0.7	4	0.8	1.1	5	10:14	王	V-D	黄灰色泥岩	⑫~⑬	
156	667	土壤		4.0	2.2	1.8	9	0.9	1.2	4	10:13	王	V-A	黄灰色泥岩		
157	112	土壤	II	4.2	2.4	1.3	13	1.5	1.9	4	10:12.5	王々	V-C	泥 岩		
158	1342	塚	ペクト	4.0	3.1	1.2	18	1.0	1.6	4	10:16	王	I-D ³	黄灰色泥岩		
159	790	塚	III	7.9	3.7	3.3	139	1.0	1.4	4	10:14	王	V-C	泥 岩		
160	392	塚	III	7.1	6.6	3.1	210	2.9	1.8	5	10:6	我	I-E ³	黄褐色泥岩		
161	641	土壤		5.5	2.6	2.0	39	1.9	1.2	6	10:6	我	I-D ⁴	灰色砂岩		
162	658	土壤		5.9	2.4	1.6	25	2.5	2.2	6	10:9	我	V-A	黄灰色泥岩		
163	831	塚	II	5.6	4.6	2.8	97	1.7	2.4	5	10:14	我々	V-A	泥 岩	①~③	
164	341	塚	II	5.7	3.7	1.7	38	2.0	1.8	5	10:9	我	I-E ⁴	黄灰色泥岩	⑩~⑫	
165	639	塚	I	2.6	2.0	1.1	7	1.7	1.7	6	10:10	我	V-C	黄灰色泥岩		
166	89	塚	III	7.4	2.7	1.5	48	1.6	1.9	6	10:12	我	V-B	灰色泥岩		
167	426	塚	III	3.9	2.8	0.5	9	1.7	1.9	5	10:11	我	V-A	黄灰色泥岩		
168	666	塚	I	2.7	2.3	1.8	12	1.3	1.8	5	10:14	世	V-A	黄灰色泥岩		
169	1189	塚	ペクト	4.5	3.8	1.7	35	1.4	1.4	6	10:10	世	V-A	黄灰色泥岩		
170	680	土壤		3.3	2.8	1.3	17	1.0	1.2	5	10:12	世	V-D	黄灰色泥岩		

No	遺物 No	出土 地図	層位	縦の計測(cm, g)			横書の計測(cm)				断面	等分断 面一張	石 材	『法華經』の品目 No	備 考
				長径	短径	厚さ	重さ	たて	よこ	角筋					
171	154	塚	II	3.8	3.1	1.0	8	1.4	1.7	6	10:12	Ⅴ	Ⅱ-A*	黄灰色泥岩	
172	248	塚	II	4.9	2.4	1.4	22	1.4	1.4	6	10:10	Ⅴ	Ⅱ-A*	灰色泥岩	①~④
173	1199	塚	ペクト	4.1	2.4	1.8	20	1.6	1.9	4	10:12	Ⅴ	Ⅱ-A	黄灰色泥岩	
174	807	塚	III	4.7	2.3	1.6	23	1.4	2.1	6	10:15	Ⅴ	Ⅱ-A	黄褐色泥岩	
175	796	塚	III	3.6	2.6	1.7	18	2.0	1.5	6	10:7.5	Ⅴ	Ⅱ-C	泥 岩	
176	210	塚	II	5.5	4.4	1.8	57	1.2	1.8	5	10:15	念	I-A*	黄灰色泥岩	①~④
177	1949	塚	ペクト	5.2	3.9	1.7	42	1.4	2.2	3	10:16	念	I-B*	泥 岩	②~③
178	405	塚	III	5.3	3.5	1.2	24	1.2	1.4	5	10:12	念	Ⅲ-B	灰色泥岩	④~⑥
179	550	塚	III	4.1	2.2	1.3	13	1.4	1.8	6	10:13	念	I-A*	黄灰色泥岩	
180	447	塚	III	3.3	2.4	1.5	10	1.4	2.0	5	10:14	念	I-E*	黄灰色泥岩	
181	626	土壁		3.0	2.2	1.5	10	1.3	1.8	5	10:14	念	Ⅲ-D	黄灰色泥岩	
182	453	塚	III	3.3	2.0	1.5	12	1.4	1.8	5	10:13	念	Ⅲ-D	黄灰色泥岩	
183	44	塚	III	3.7	2.5	0.8	12	1.1	0.7	4	10: 6	H s	I-A*	泥 岩	①~⑤
184	36	塚	III	3.8	2.4	0.7	8	1.9	1.3	4	10: 7	H	Ⅲ-A	黄褐色泥岩	①~③④⑤⑦
185	963	塚	III	3.2	2.2	0.7	5	1.3	0.9	4	10: 7	H	Ⅲ-A	泥 岩	⑨⑩⑪~⑫
186	818	塚	II	3.0	2.2	0.8	4	1.1	1.0	4	10: 9	H	Ⅲ-B	黄褐色泥岩	
187	692	土壁		4.5	3.7	1.4	13	1.0	0.8	6	10: 8	H	Ⅲ-A	黄灰色泥岩	
188	636	土壁		4.5	4.2	2.6	56	0.9	1.0	4	10:11	H	Ⅲ-A	泥 岩	
189	382	塚	III	5.1	2.6	2.5	62	0.7	0.9	4	10:13	H s	Ⅲ-C	黄灰色泥岩	
190	810	塚	II	4.6	3.9	1.6	23	1.7	1.9	4	10:11	三	Ⅲ-A	黄灰色泥岩	
191	490	塚	III	4.5	2.9	1.1	10	1.2	1.0	4	10: 8	三	Ⅲ-B	灰色泥岩	
192	345	塚	II	4.1	1.9	2.0	17	0.7	1.2	4	10:17	三	Ⅲ-D	黄灰色泥岩	
193	656	土壁		4.4	3.2	1.1	19	1.2	1.4	5	10:12	三	灰色泥岩		①~④
194	179	塚	III	4.2	2.6	0.7	7	1.4	1.5	4	10:11	三	Ⅲ-A	黄灰色泥岩	
195	476	塚	III	4.2	2.8	1.5	17	1.6	0.9	4	10: 6	三 s	I-D*	黄灰色泥岩	
196	489	塚	III	3.4	2.7	1.4	12	0.8	1.3	3	10:16	三	I-D*	黄灰色泥岩	
197	777	塚	III	6.5	3.8	1.8	16	1.1	1.1	7	10:10	其	I-C*	黄灰色泥岩	
198	147	塚	II	6.4	3.3	2.3	15	2.1	2.3	7	10:11	其	I-B*	黄褐色泥岩	
199	486	塚	III	5.0	3.2	2.3	52	1.9	1.3	6	10: 7	其	V-C	黄灰色泥岩	
200	735	土壁		3.6	1.3	1.2	6	1.6	1.1	7	10: 7	其	I-D*	黄灰色泥岩	①~④
201	324	塚	II	2.8	2.5	1.1	6	1.5	1.4	7	10: 9	其	Ⅲ-A	黄灰色泥岩	
202	1244	塚	ペクト	4.5	4.2	2.6	52	2.0	1.9	8	10:10	其	I-B*	黄灰色泥岩	
203	583	斜面		4.1	2.6	1.7	27	1.5	1.3	7	10: 9	其	I-D*	泥 岩	
204	171	塚	II	5.3	3.5	1.0	25	2.2	2.5	7	10:11	其	II-A*	黄灰色泥岩	
205	342	塚	II	4.5	4.2	1.2	23	1.2	1.4	6	10:12	其	Ⅲ-B	黄灰色泥岩	
206	820	塚	II	4.5	3.0	1.4	24	2.2	1.9	5	10: 9	其	I-B*	黄灰色泥岩	
207	707	土壁		3.5	2.6	1.6	11	1.1	1.5	6	10:14	其	II-A*	黄灰色泥岩	①~④
208	440	塚	III	6.8	4.2	0.9	38	2.2	2.2	7	10:10	其	Ⅲ-B	泥 岩	
209	849	塚	I	3.4	2.0	0.8	4	1.7	1.8	5	10:11	其	Ⅲ-B	黄灰色泥岩	
210	1155	塚	II	3.5	1.9	1.5	17	1.5	1.2	5	10: 8	其	Ⅲ-B	泥 岩	
211	1186	塚	ペクト	5.4	2.6	1.8	31	1.7	1.5	5	10: 9	有	I-A*	黄灰色泥岩	
212	1138	塚	II	4.2	2.3	1.0	15	1.4	0.9	5	10: 7	有	Ⅲ-B	泥 岩	
213	320	塚	II	5.6	2.6	1.5	21	1.2	1.2	5	10:10	有	Ⅲ-C	黄灰色泥岩	

No	遺物 No	出土 地名	層位 -	縦の計測(cm, g)				横の計測(cm)				墨書	筆跡分類 新一組	石 材	「法華経」の品 の品 No	備 考
				長径	短径	厚さ	重さ	たて	上こ	角数	たて:よこ					
214	152	塚	II	4.3	3.4	1.8	23	2.4	2.2	6	10:9	有	V-B	黄灰色泥岩	①~④	
215	438	塚	III	2.9	2.0	0.7	4	2.2	1.2	6	10:6	有	V-C	黄灰色泥岩		
216	864	塚	III	2.9	2.1	1.2	9	1.3	1.2	6	10:9	有	V-B	黄灰色泥岩		
217	826	塚	II	2.7	2.0	0.8	5	1.5	1.0	6	10:7	有	V-B	黄灰色泥岩		
218	294	塚	II	5.3	5.0	1.7	38	2.8	2.4	5	10:9	第6	V-A	黄灰色泥岩	①②③~⑤⑥	
219	90	塚	III	4.5	3.0	1.8	22	2.1	1.1	5	10:5	第6	II-A'	黄灰色泥岩	④⑤⑥⑦⑧⑨	
220	1149	塚	II	4.0	2.5	1.2	12	1.7	1.4	5	10:8	第6	V-A	泥 岩		
221	780	塚	III	4.0	3.1	1.3	22	1.8	1.1	6	10:6	第6	I-D'	泥 岩		
222	99	土壁	III	3.5	2.0	1.6	9	1.5	0.8	5	10:5	第6	III-B	黄灰色泥岩		
223	121	土壁	III	3.0	2.8	1.5	13	2.2	2.0	5	10:9	第6	I-E'	黄灰色泥岩		
224	332	塚	II	2.4	2.1	0.9	4	1.8	1.5	5	10:8	衆	V-C	黄灰色泥岩		
225	68	塚	III	4.3	2.7	1.1	15	2.1	1.8	6	10:9	衆	V-C	黄灰色泥岩		
226	387	塚	III	2.8	2.3	1.3	7	1.6	1.7	5	10:11	衆	I-C'	黄灰色泥岩	①~④	
227	418	塚	III	5.7	3.1	2.2	43	2.0	1.4	6	10:7	衆	V-D	黄灰色泥岩		
228	469	塚	III	3.2	1.8	0.8	6	2.4	1.4	6	10:7	衆	II-D'	泥 岩		
229	253	塚	II	3.1	3.0	2.0	22	1.7	1.5	6	10:9	衆	I-E'	黄灰色泥岩		
230	1214	ペルト	2.8	1.9	0.6	4	1.1	1.3	6	10:12	文6	IV	黄灰色泥岩	①②		
231	209	塚	II	5.8	3.9	1.3	39	2.1	2.6	5	10:12	文	I-B'	黄灰色泥岩	③④⑤	
232	348	塚	II	3.7	3.4	1.6	27	1.4	1.1	5	10:8	文	V-D	黄灰色泥岩	③④	
233	383	塚	III	5.1	2.7	0.8	11	2.0	1.5	5	10:8	文	V-A	黄灰色泥岩		
234	1638	塚	表面	4.3	3.1	2.1	40	1.1	1.9	4	10:17	文	V-D	黄灰色泥岩		
235	814	塚	II	2.8	1.9	1.7	9	1.0	1.1	5	10:11	文	I-C'	黄灰色泥岩		
236	503	土壁	III	4.7	3.9	2.0	37	3.0	2.4	6	10:8	序	I-B'	黄灰色泥岩		
237	704	土壁	III	3.6	2.9	0.7	9	2.5	1.5	6	10:6	序	I-B'	黄灰色泥岩		
238	55	塚	III	4.0	2.9	5.9	8	3.2	1.7	6	10:5	序	I-B'	黄灰色泥岩		
239	693	土壁	III	4.3	4.0	1.7	35	1.6	1.7	5	10:11	序	V-C	泥 岩	①~④	
240	291	塚	II	3.0	2.2	2.7	15	1.6	1.1	6	10:7	序	I-C'	黄褐色泥岩		
241	935	塚	III	3.3	1.6	1.3	9	2.1	1.3	5	10:6	序	V-A	泥 岩		
242	1014	塚	III	5.6	3.9	1.0	25	2.8	2.4	4	10:9	羅	V-C	黄灰色泥岩		
243	439	塚	III	5.7	2.0	1.7	22	2.1	1.5	6	10:7	羅	II-A'	泥 岩		
244	529	塚	III	2.6	2.0	0.7	4	1.8	1.2	6	10:7	羅	V-B	褐色泥岩	①~④	
245	1276	塚	ペルト	5.8	2.7	1.5	20	1.8	1.6	3	10:9	羅	V-D	黄灰色泥岩		
246	608	斜面	III	4.7	3.3	2.0	42	2.1	1.7	5	10:8	羅	V-A	泥 岩		
247	180	塚	II	4.4	1.6	1.3	10	1.4	1.3	4	10:9	羅	V-D	黄灰色泥岩		
248	78	塚	III	4.8	3.5	1.0	17	2.5	1.8	5	10:7	減	IV	黄灰色泥岩	①~④	
249	1274	塚	ペルト	6.5	3.9	1.3	51	3.9	2.7	6	10:7	減	IV	黄灰色泥岩	④~⑤	
250	1120	塚	II	4.9	3.6	2.1	37	1.3	1.6	6	10:12	減	V-B	泥 岩	④~⑤	
251	227	塚	II	5.3	3.2	1.6	33	2.1	2.1	7	10:10	減	I-E'	黄灰色泥岩	④~⑤	
252	941	塚	III	3.4	2.9	1.6	23	1.5	1.7	5	10:11	減	V-A	黄灰色泥岩		
253	203	塚	II	3.1	2.3	1.5	7	1.1	1.4	6	10:13	減	V-B	黄灰色泥岩		
254	1222	塚	ペルト	3.1	2.8	1.8	17	1.8	2.0	6	10:11	處	V-C	黄灰色泥岩	①~④	
255	478	塚	III	3.4	2.7	2.3	23	2.2	1.9	6	10:9	處	V-B	黄灰色泥岩	④~⑤⑥	
256	85	塚	III	4.8	3.1	2.3	30	2.0	1.5	6	10:8	處	V-B	泥 岩	④~⑤	

No.	遺物 No.	出土 地区	層位	環の計測(cm, g)			環書の計測(cm)					環書	草録分類 群一頭	石 材	『法學稿』の「品」No.	備 考
				長径	短径	厚さ	重さ	たて	よこ	角質	たて:よこ					
257	291	塚	II	4.2	3.1	0.9	8	1.8	1.6	5	10:9	虚々	V-B	黄灰色泥岩		
258	1130	塚	II	5.2	2.8	2.6	22	1.6	1.3	5	10:8	虚々	V-B	黄灰色泥岩		
259	785	塚	III	5.5	2.9	2.9	66	2.4	2.0	6	10:8	虚	V-B	灰 色 泥 岩		
260	517	塚	III	3.4	3.2	1.2	16	1.5	1.6	6	10:11	量	I-A ³	黄灰色泥岩		
261	183	塚	II	3.0	2.2	1.4	8	1.5	1.5	5	10:10	量	I-A ³	黄灰色泥岩		
262	775	塚	III	2.6	2.5	1.1	5	1.4	1.7	5	10:12	量	I-A ⁴	黄灰色泥岩	①~④	
263	168	塚	II	4.0	2.1	1.3	15	1.8	1.9	6	10:11	量	V-C	黄灰色泥岩		
264	613	剖面		4.3	3.5	2.4	46	1.5	1.3	4	10:9	量	III-B	黄灰色泥岩		
265	194	塚	II	4.8	3.0	1.8	26	1.3	2.2	4	10:17	香	I-A ¹	黄灰色泥岩	①~③⑤⑦	
266	640	土被		4.5	3.6	2.0	40	1.6	2.2	4	10:14	香	I-B ²	泥 石	⑧~⑪⑫~⑯	
267	757	土被		3.8	1.9	1.8	11	1.4	1.6	5	10:12	香	I-A ⁴	泥 石	⑫⑬⑭	
268	699	土被		2.6	2.0	1.8	11	1.4	2.5	4	10:18	香	I-A ¹	泥 石	⑮	
269	1225	塚	IV-B	7.4	4.5	3.1	110	1.1	1.7	5	10:16	香	I-A ²	灰 色 泥 石		
270	677	土被		4.2	2.8	1.8	30	2.8	2.7	5	10:10	成	V-A	灰 色 泥 石	①~⑩	
271	277	塚	II	4.7	3.2	1.8	39	1.8	2.1	6	10:12	成	V-A	灰褐色泥岩	⑩~⑫	
272	520	塚	III	2.8	1.8	1.0	5	1.5	1.4	5	10:9	成	V-B	黄褐色泥岩	⑫~⑯	
273	779	塚	III	4.1	2.1	1.9	23	1.5	1.4	5	10:9	成	I-B ²	灰 色 泥 石	⑯	
274	140	土被		6.6	3.5	1.3	14	2.0	2.1	5	10:11	成	II-A ²	黄褐色泥岩		
275	75	塚	III	5.8	3.8	2.6	66	1.5	1.3	5	10:9	力	V-B	黄褐色泥岩	①~③⑦⑩	
276	996	表面		5.8	1.3	1.6	17	1.3	1.2	5	10:9	力	V-D	灰 色 泥 石	⑩~⑯	
277	59	塚	III	6.4	2.9	1.3	23	1.7	1.0	5	10:6	力	V-A	黄褐色泥岩	⑩~⑯	
278	663	土被		4.2	3.2	1.3	12	1.4	1.6	4	10:12	力	II-A ⁴	黄褐色泥岩	⑯	
279	718	土被		2.8	2.4	0.5	5	1.8	1.6	4	10:9	力	I-E ²	黄褐色泥岩		
280	507	塚	III	5.6	4.6	1.6	45	2.9	3.0	5	10:10	經	V-A	黄褐色泥岩		
281	856	塚	III	5.7	2.7	0.9	18	1.4	1.6	4	10:12	經	V-B	泥 石	①~④⑥⑦	
282	739	土被		4.5	3.4	1.6	32	1.6	1.9	7	10:12	經	II-A ³	泥 石	⑩~⑯	
283	665	土被		4.0	2.6	1.1	13	1.6	2.1	5	10:13	經	V-B	黄褐色泥岩		
284	1213	塚	IV-B	3.9	3.0	1.0	13	1.7	1.7	5	10:10	經	V-C	泥 石		
285	156	塚	II	3.7	3.3	2.1	38	2.3	2.1	6	10:9	善	V-A	黄褐色泥岩	①~⑩	
286	661	土被		5.2	3.0	1.4	28	1.5	1.8	5	10:12	善	I-A ⁴	黄褐色泥岩	⑩~⑯	
287	384	塚	III	5.5	2.8	2.0	45	1.6	1.5	4	10:9	善	V-A	泥 石	~	
288	102	塚	II	3.5	3.2	1.0	6	2.0	1.8	6	10:9	善	I-B ³	黄褐色泥岩		
289	237	塚	II	4.1	3.9	2.8	27	1.8	1.9	6	10:11	善	I-B ³	黄褐色泥岩		
290	287	塚	II	6.0	4.2	1.1	38	2.1	2.0	4	10:10	善	V-C	黄褐色泥岩	①~⑩	
291	200	塚	II	4.8	1.7	1.1	7	1.5	1.3	5	10:9	善	V-A	黄褐色泥岩	⑩~⑯	
292	465	塚	III	2.7	3.1	0.7	10	1.9	1.4	5	10:7	善	V-C	黄褐色泥岩		
293	70	塚	III	3.4	2.3	1.8	14	1.2	1.9	4	10:16	善	V-A	黄褐色泥岩		
294	556	塚	III	3.9	1.5	1.2	7	1.5	1.3	6	10:9	善	V-A	泥 石		
295	427	塚	III	5.8	3.7	1.5	33	1.7	1.0	4	10:6	中	V-C	泥 灰 石		
296	508	塚	III	4.0	3.7	2.5	48	2.6	1.8	5	10:7	中	II-A ³	泥 石		
297	482	塚	III	3.2	2.6	1.2	11	2.3	1.3	4	10:6	中	V-C	黄褐色泥岩		
298	687	土被		3.7	1.5	1.3	8	1.9	1.0	5	10:5	中	V-B	泥 石	①~⑩	
299	925	塚	III	2.2	1.8	1.8	10	1.1	0.7	4	10:6	中	V-B	黄褐色泥岩		

No.	遺物 No.	出土 地図	層位	堆の計測(cm, g)			窓の計算(cm)			窓	窓部分 群一類	石 材	「法華経」の「品」No.	備 考	
				長径	短径	厚さ	重さ	たて	よこ						
300	590	斜面		3.4	1.6	1.3	8	1.3	1.3	4	10:10	生	V-A-C	黄灰色泥岩	①~④
301	217	塚	II	3.0	2.0	1.1	5	1.5	1.3	3	10:9	生	V-C	黄灰色泥岩	
302	931	塚	Ⅲ	5.2	3.6	1.9	47	1.5	2.0	4	10:13	生	V-C	黄灰色泥岩	
303	201	塚	II	4.2	2.4	2.4	27	1.9	1.7	6	10:9	生	V-A	黄灰色泥岩	
304	1021	塚	表面	5.2	3.5	1.3	35	2.8	2.8	8	10:10	生	V-A	泥 岩	
305	793	塚	Ⅲ	3.8	1.9	0.6	6	1.4	1.6	4	10:12	此	V-A	黄灰色泥岩	
306	774	塚	Ⅲ	4.5	3.5	1.7	33	1.5	2.0	5	10:13	此	I-B ¹	泥 岩	
307	93	土壁	I	3.2	2.0	1.5	11	1.0	1.7	5	10:17	此	I-A ¹	黄灰色泥岩	①~④
308	1229	塚	ペント	3.8	1.3	1.3	9	1.0	1.9	4	10:19	此	I-A ¹	黄灰色泥岩	
309	58	塚	Ⅲ	4.6	2.4	1.3	12	1.6	1.7	4	10:11	万	I-B ¹	黄灰色泥岩	①~④
310	668	土壁		5.3	3.5	3.8	19	1.5	2.1	3	10:14	万	V-B	泥 岩	④~⑨
311	867	塚	Ⅲ	3.1	1.8	1.2	9	1.5	1.5	4	10:10	万	II-A ⁴	黄褐色泥岩	
312	25	塚	Ⅲ	5.6	5.0	2.2	84	1.5	1.5	4	10:10	万+	V-A	泥 岩	
313	94	土壁	I	4.6	3.7	1.5	36	2.2	1.6	6	10:7	萬	V-B	黄灰色泥岩	
314	706	土壁		4.1	2.3	1.3	18	2.9	1.8	5	10:6	利	I-A ⁴	泥 岩	①~⑧⑩
315	46	塚	Ⅲ	3.0	2.2	1.0	5	1.9	1.5	6	10:8	利	V-D	黄灰色泥岩	②~⑨
316	776	塚	II	2.4	1.8	0.8	1	1.5	1.0	5	10:7	利	I-D ⁴	黄灰色泥岩	④~⑨
317	116	土壁	Ⅲ	4.2	2.9	2.4	30	1.3	1.4	6	10:11	利	I-A ⁴	灰褐色泥岩	
318	82	塚	Ⅲ	5.1	3.4	1.4	36	2.1	1.0	6	10:8	利	I-C ²	泥 岩	
319	506	塚	Ⅲ	4.2	3.7	2.1	15	2.0	2.5	5	10:12.5	政	I-A ¹	黄灰色泥岩	
320	513	塚	Ⅲ	5.6	3.5	1.5	14	1.6	2.1	4	10:13	政	I-A ²	黄灰色泥岩	
321	533	塚	Ⅲ	4.2	1.9	1.1	10	1.8	1.7	6	10:9.5	政	I-A ¹	黄灰色泥岩	①~⑤
322	468	塚	Ⅲ	3.7	2.6	1.4	12	1.6	1.7	5	10:11	政	I-E ²	黄灰色泥岩	
323	1235	塚	ペント	2.7	1.6	0.7	3	1.1	1.7	4	10:15.5	政	V-B	黄灰色泥岩	
324	269	塚	Ⅲ	5.2	4.0	2.4	68	2.0	2.2	7	10:11	道	I-B ⁴	黄灰色泥岩	
325	1173	塚	II	4.0	1.6	0.7	7	1.5	1.3	4	10:8.5	道	V-D	泥 岩	①~⑩⑪
326	696	土壁	Ⅲ	4.2	3.0	1.2	20	1.3	1.1	4	10:8.5	道	V-B	黄灰色泥岩	①~⑩⑪
327	908	塚	Ⅲ	2.5	2.2	1.7	13	1.5	1.9	5	10:12.5	道	V-B	黄灰色泥岩	②~⑩⑪
328	397	塚	Ⅲ	3.9	3.3	1.8	16	1.8	2.0	4	10:11	道	I-A ¹	黄灰色泥岩	
329	328	塚	Ⅲ	4.8	3.9	2.0	47	1.6	1.6	4	10:10	間	V-A	黄灰色泥岩	①~⑩⑪
330	221	塚	II	9.0	5.7	1.4	61	2.4	2.1	5	10:9	間	V-A	黄灰色泥岩	④~⑩⑪
331	293	塚	II	7.9	4.2	2.7	149	2.5	2.1	5	10:8.5	間	V-A	泥 岩	
332	302	塚	II	5.5	2.0	1.6	22	1.3	1.0	5	10:7.5	間	V-B	黄灰色泥岩	
333	388	塚	Ⅲ	5.6	4.4	2.6	66	1.1	1.5	6	10:13.5	面	I-A ¹	泥 岩	
334	378	塚	Ⅲ	3.1	2.4	0.7	6	1.3	1.2	5	10:9	面	I-D ¹	黄灰色泥岩	
335	395	塚	Ⅲ	8.0	5.3	3.5	135	1.9	1.5	5	10:8	面	V-B	泥 岩	①~⑩
336	123	土壁	Ⅲ	3.7	2.1	1.3	12	1.2	1.0	5	10:8	面	V-C	泥 岩	
337	321	塚	II	4.7	3.2	1.7	37	2.0	0.8	3	10:4	心	V-B	黄灰色泥岩	
338	1035	塚	Ⅲ	5.5	3.6	2.4	59	0.7	1.6	3	10:22	心	V-B	泥 岩	
339	409	塚	Ⅲ	2.4	2.0	1.7	9	0.6	1.1	4	10:18	心	V-D	黄灰色泥岩	①~⑩
340	206	塚	II	3.2	2.4	1.3	6	0.6	1.4	6	10:23	心	I-A ¹	黄灰色泥岩	
341	1200	塚	ペント	4.8	2.8	1.2	23	1.3	2.1	4	10:16	以	V-B	黄灰色泥岩	①~⑩
342	151	塚	II	5.4	2.9	1.1	20	1.3	1.4	4	10:11	以	V-B	黄灰色泥岩	

No.	遺跡 No.	出土 地区	層位	堆の計測(cm, g)				窓の計測(cm)				報告	堆分類 群一類	石材	『法規』の「品」No.	備考
				長径	短径	厚さ	重さ	たて	よこ	角面	たて:よこ					
345	56	塚	Ⅲ	4.7	2.8	1.1	38	1.3	1.6	5	10:12	Ⅳ	Ⅳ-C	黄灰色泥岩		
344	446	塚	Ⅲ	2.9	2.5	0.6	4	1.5	2.1	5	10:14	Ⅳ-A	Ⅰ-B ²	灰色泥岩		
345	268	塚	Ⅲ	7.9	3.5	1.5	55	1.8	2.5	6	10:14	Ⅳ	Ⅰ-B ²	黄灰色泥岩	①~②	~
346	231	塚	Ⅲ	4.6	2.7	1.6	24	1.2	1.3	6	10:11	Ⅳ	Ⅳ-B	灰色泥岩	②③	
347	527	塚	Ⅲ	5.9	4.1	3.1	109	2.5	1.8	6	10:7	Ⅳ	Ⅳ-A	黄灰色泥岩		
348	566	斜面		3.6	3.5	1.6	18	1.5	2.1	7	10:14	Ⅳ	Ⅰ-B ²	黄灰色泥岩		
349	669	土壤		5.2	3.8	1.6	34	1.7	1.5	6	10:9	Ⅳ	Ⅳ-C	灰色泥岩		
350	811	塚	Ⅲ	5.3	3.1	1.9	34	1.8	1.5	5	10:8	Ⅳ	Ⅳ-A	褐色岩	①~②	
351	445	塚	Ⅲ	3.8	2.1	1.6	12	1.7	1.3	6	10:7.5	Ⅳ	Ⅳ-D	黄灰色泥岩		
352	607	塚	斜面	3.9	2.4	1.3	14	1.8	1.7	6	10:9.5	Ⅳ	Ⅰ-B ²	灰色泥岩		
353	224	塚	Ⅲ	4.5	3.7	2.9	49	2.7	1.8	6	10:6.5	Ⅳ	Ⅳ-B	灰色泥岩	①~④	
354	760	土壤		8.1	3.7	1.8	68	1.8	1.1	5	10:6	Ⅳ	Ⅲ-C	泥岩	⑥~⑩	
355	379	塚	Ⅲ	3.9	2.4	2.0	25	2.0	1.8	5	10:9	Ⅳ	Ⅳ-B	黄灰色泥岩	⑧~⑩	
356	660	土壤		5.7	3.6	2.1	51	2.8	2.0	5	10:7	Ⅳ	Ⅳ-A	灰色泥岩	⑦~⑨⑩	
357	544	塚	Ⅲ	4.6	2.7	0.9	8	1.7	1.4	4	10:8	Ⅳ	Ⅳ-C	黄灰色泥岩	①~④⑥~⑩	
358	470	塚	Ⅲ	3.6	1.8	2.1	14	1.6	1.2	4	10:7.5	Ⅳ	Ⅳ-B	黄褐色泥岩	⑧~⑩	
359	600	斜面		4.8	2.5	1.5	26	1.0	1.2	5	10:12	Ⅳ	Ⅳ-B	泥岩	⑧~⑩	
360	567	斜面		5.1	4.0	1.9	48	1.8	1.7	4	10:9.5	Ⅳ	Ⅳ-A	黄灰色泥岩		
361	672	塚	Ⅲ	6.3	4.2	2.1	73	1.8	1.5	6	10:8	Ⅳ	Ⅳ-C	褐色岩		
362	539	塚	Ⅲ	4.9	3.6	2.6	47	1.6	2.1	6	10:13	Ⅳ	Ⅳ-B	黄灰色泥岩		
363	1193	塚	△4ト	2.7	1.4	1.1	6	1.3	1.2	6	10:9	Ⅳ	Ⅱ-A ²	黄灰色泥岩	①~⑩	
364	1197	塚	△4ト	3.3	2.3	1.6	17	1.6	1.5	6	10:9	Ⅳ	Ⅱ-A ²	黄灰色泥岩		
365	32	塚	Ⅲ	3.5	2.9	1.7	21	1.8	2.3	6	10:15	Ⅳ	Ⅰ-A ²	黄灰色泥岩	①~④⑤⑦⑧⑩	
366	697	土壤		4.3	2.0	1.2	13	1.2	1.4	5	10:11.5	Ⅳ	Ⅳ-D	黄灰色泥岩	⑨⑩⑪⑫~⑬	
367	624	土壤		6.0	2.6	1.8	15	1.6	2.1	5	10:13	Ⅳ	Ⅳ-B	泥岩	⑨⑩	
368	18	塚	Ⅲ	4.6	4.2	1.7	31	1.2	1.4	4	10:12	Ⅳ	Ⅰ-A ²	黄灰色泥岩		
369	509	塚	Ⅲ	6.0	2.3	0.8	8	1.6	1.7	5	10:10.5	Ⅳ	Ⅳ-A	黄灰色泥岩		
370	524	塚	Ⅲ	5.9	3.4	2.0	36	1.8	1.9	4	10:10.5	Ⅳ	Ⅳ-C	灰色泥岩		
371	1176	塚	Ⅲ	4.3	3.1	1.9	28	1.5	1.8	5	10:12	Ⅳ	Ⅳ-A	黄灰色泥岩	①~⑩	
372	282	塚	Ⅲ	4.0	3.5	1.7	18	1.4	1.9	6	10:13.5	Ⅳ	Ⅰ-D ²	黄灰色泥岩		
373	710	土壤		4.8	2.6	1.2	12	1.2	1.8	5	10:15	Ⅳ	Ⅳ-B	泥岩		
374	1231	塚	△4ト	3.3	1.6	1.2	8	1.4	1.6	5	10:11.5	Ⅳ	Ⅳ-B	黄灰色泥岩	①~⑩	
375	48	塚	Ⅲ	2.7	2.0	1.7	8	0.8	1.1	4	10:14	Ⅳ	Ⅳ-B	黄灰色泥岩		
376	1289	塚	△4ト	4.8	2.9	1.8	30	1.3	1.8	6	10:14	Ⅳ	Ⅳ-A	黄灰色泥岩	①~⑥⑩	
377	515	塚	Ⅲ	4.1	3.5	3.0	44	1.4	1.4	7	10:10	Ⅳ	Ⅳ-A	黄灰色泥岩	⑨~⑭⑯⑰	
378	519	塚	Ⅲ	3.9	2.5	1.2	20	2.0	2.0	6	10:10	Ⅳ	Ⅰ-B ²	泥岩	⑩⑬	
379	504	塚	Ⅲ	3.6	3.5	1.8	23	1.7	1.7	6	10:10	Ⅳ	Ⅳ-A	灰色泥岩		
380	678	土壤		5.5	3.8	1.1	16	2.6	2.1	6	10:8	Ⅳ	Ⅳ-A	黄灰色泥岩	①~③	
381	245	塚	Ⅲ	4.5	3.2	1.0	12	2.2	2.7	5	10:12	Ⅳ	Ⅰ-E ²	黄灰色泥岩	⑤~⑩	
382	364	塚	Ⅲ	3.2	2.9	1.9	12	2.2	2.0	6	10:9	Ⅳ	Ⅳ-B	黄灰色泥岩	⑩⑪⑫~⑬⑯	
383	1144	塚	Ⅲ	5.3	1.8	1.8	23	2.0	1.3	5	10:6.5	Ⅳ	Ⅳ-A	泥岩		
384	822	塚	Ⅲ	8.1	3.0	1.3	35	1.6	1.5	5	10:9	Ⅳ	Ⅳ-B	黄灰色泥岩	①~⑩	
385	213	塚	Ⅲ	3.6	3.0	1.7	20	1.4	1.0	5	10:7	Ⅳ	Ⅳ-C	黄灰色泥岩		

No.	透視 %	出土 地区	剖面	縦の計測(cm, g)			横の計測(cm)			崩落	歩路分類 群一類	石 材	『法華經』の「品」No.	備 考	
				長径	短径	厚さ	重さ	たて	よこ						
386	432	塚	Ⅲ	3.3	2.8	1.0	10	1.9	1.5	5	10:8	青	II-A ³	黄灰色泥岩	
387	1022	塚	鉛面	3.1	2.8	1.7	21	1.5	1.2	5	10:8	青	Ⅳ-C	泥 岩	①~②⑤~⑨⑪
388	847	塚	I	3.8	2.6	2.4	30	1.5	1.3	5	10:9	白	II-A ³	泥 砂	①~②⑤~⑨⑪
389	621	土壁	Ⅲ	5.4	3.3	1.9	33	1.4	1.7	4	10:12	白+	Ⅳ-C	泥 岩	⑫~⑬
390	222	塚	Ⅲ	3.8	3.6	1.3	11	1.5	1.6	4	10:10.5	白+	Ⅳ-C	黄褐色泥岩	
391	83	塚	Ⅲ	4.2	1.8	1.2	11	1.2	1.2	4	10:10	白	Ⅳ-C	泥 岩	
392	1378	塚	Ⅲ	3.7	2.6	1.1	16	1.5	1.4	4	10:9	能	Ⅳ-C	黄灰色泥岩	
393	462	塚	Ⅲ	3.6	2.0	1.3	10	1.6	1.6	5	10:10	能	Ⅵ-A	黄灰色泥岩	
394	505	塚	Ⅲ	5.5	3.6	1.9	42	2.5	1.7	5	10:7	能	Ⅰ-E ¹	黄灰色泥岩	①~⑫
395	260	塚	Ⅱ	3.5	3.1	1.1	11	2.2	2.0	5	10:9	能	II-A ³	黄褐色泥岩	
396	351	塚	Ⅱ	4.7	2.6	1.5	21	2.0	1.3	3	10:6.5	之	I-E ³	黄灰色泥岩	
397	52	塚	Ⅲ	3.4	2.3	1.6	14	1.8	1.5	3	10:8	之	I-A ³	黄灰色泥岩	
398	1224	塚	鉛面	5.6	3.5	2.0	36	1.6	2.2	4	10:14	之	I-B ²	黄灰色泥岩	①~⑫
399	575	塚	鉛面	3.4	1.8	0.8	8	1.2	0.9	3	10:7.5	之	I-D ³	黄灰色泥岩	
400	1191	塚	鉛面	3.8	2.9	2.0	25	2.1	1.6	3	10:8.5	見	Ⅳ-A	黄灰色泥岩	①~⑫
401	543	塚	Ⅲ	4.7	3.1	1.0	18	1.5	1.8	5	10:12	見	I-B ²	黄灰色泥岩	⑫~⑬
402	126	土壁	Ⅲ	2.7	1.9	1.1	5	1.8	1.5	3	10:11.5	見	Ⅵ-B	黄灰色泥岩	⑫~⑬
403	523	塚	Ⅲ	5.2	2.6	1.6	22	1.6	1.6	6	10:10	進	Ⅳ-D	黄灰色泥岩	①~②③④⑤⑨⑩⑪
404	623	土壁	Ⅲ	6.3	3.8	1.7	17	1.9	2.3	5	10:12	進	II-A ³	黄灰色泥岩	⑫~⑬⑭~⑯
405	1277	塚	鉛面	3.8	2.0	0.8	6	1.7	1.4	6	10:8	進	Ⅵ-B	黄灰色泥岩	
406	736	土壁	Ⅲ	3.7	2.7	1.1	17	1.4	2.0	4	10:14	合	I-A ³	灰 色 泥 岩	①~④⑥~⑨⑩⑪
407	474	塚	Ⅲ	2.7	2.1	2.2	10	1.1	1.6	5	10:14.5	合	Ⅵ-B	黄灰色泥岩	⑫~⑬⑭~⑯
408	709	塚	Ⅲ	4.3	2.7	1.8	24	1.2	1.4	5	10:11.5	合	I-C ³	灰 色 泥 岩	
409	659	土壁	Ⅲ	6.4	3.0	2.0	34	2.4	1.6	6	10:6.5	優	I-E ³	黄灰色泥岩	①~③⑦~⑯
410	326	塚	Ⅱ	5.0	2.9	1.7	34	1.7	1.5	7	10:9	優	I-B ²	黄灰色泥岩	⑫~⑬⑭~⑯
411	473	塚	Ⅲ	3.7	2.4	0.9	30	2.2	1.7	6	10:8	優	I-E ¹	黄灰色泥岩	
412	141	土壁	Ⅳ	4.6	2.9	1.2	18	1.8	2.6	5	10:15	安	II-A ³	黄灰色泥岩	①~②③⑦~⑯
413	450	塚	Ⅲ	3.9	3.3	1.9	26	2.0	1.7	4	10:8.5	安	Ⅳ-B	黄灰色泥岩	⑫~⑬⑭~⑯
414	493	塚	Ⅲ	3.2	2.5	1.6	15	1.4	1.5	6	10:11	安	Ⅳ-B	黄褐色泥岩	
415	1126	塚	Ⅲ	6.2	2.6	2.5	50	1.5	2.3	4	10:15	直	I-E ¹	黄灰色泥岩	①③④⑦~⑨⑩⑪
416	1379	塚	Ⅲ	4.3	2.0	1.6	16	1.8	1.6	6	10:9	衣	Ⅳ-C	黄灰色泥岩	⑫~⑬⑭~⑯
417	673	土壁	Ⅲ	3.4	2.2	1.2	10	1.3	1.7	6	10:13	衣	Ⅳ-C	黄灰色泥岩	
418	1194	塚	鉛面	3.4	3.1	1.2	10	0.8	1.7	4	10:21	四	Ⅳ-B	黄灰色泥岩	①~③⑦~⑨⑩⑪
419	809	塚	Ⅱ	4.5	2.6	1.0	14	1.1	0.5	4	10:5	四	Ⅵ-D	黄灰色泥岩	⑫~⑬⑭~⑯
420	940	塚	Ⅲ	3.6	2.0	1.1	9	0.7	1.6	4	10:23	四	Ⅳ-C	泥 岩	
421	518	塚	Ⅲ	3.3	2.7	1.4	10	2.0	1.5	5	10:8	後	I-E ¹	黄灰色泥岩	①~③⑦~⑨⑩⑪
422	254	塚	Ⅱ	3.6	1.2	1.6	10	1.1	0.6	5	10:6	後	Ⅳ-D	黄灰色泥岩	⑫~⑬⑭~⑯
423	424	塚	Ⅲ	2.5	1.4	0.7	1	1.4	1.3	6	10:9	後	Ⅳ-C	黄灰色泥岩	
424	382	塚	Ⅲ	4.1	1.7	1.6	12	1.4	1.0	5	10:7	乃	Ⅳ-D	黄灰色泥岩	②~④⑥~⑩
425	14	塚	Ⅲ	3.8	3.1	1.7	23	1.9	1.2	6	10:6	乃	Ⅳ-C	黄灰色泥岩	⑫~⑬⑭~⑯
426	676	土壁	Ⅲ	3.2	1.9	1.3	10	1.1	1.1	4	10:10	乃	Ⅳ-D	黄灰色泥岩	
427	325	塚	Ⅱ	5.9	2.4	1.6	20	2.6	2.1	7	10:8	未	II-A ³	灰 色 泥 岩	①~⑫
428	127	土壁	Ⅲ	4.7	2.1	1.2	11	1.5	1.3	7	10:9	未	II-B	泥 岩	⑫~⑬

No	遺物 No	出土 地区	層位	礫の計測(cm, g)			泥炭の計測(cm)					泥炭	等分分類 群-類	石材	「法華經」の「品」No	備考
				長径	短径	厚さ	重さ	たて	上こ	内数	たて:よこ					
429	663	土壤		3.5	2.2	1.1	7	1.5	1.7	4	10:11	米	I-D ²	黄褐色泥岩		
430	657	土壤		5.0	3.4	1.0	22	1.4	1.5	7	10:11	切	Ⅱ-B	灰色泥岩		
431	43	理	Ⅲ	5.3	4.7	2.0	58	2.6	2.2	6	10:9	切	Ⅰ-E ²	黄褐色泥岩	①~⑥⑦~⑩⑪~⑫	
432	358	理	Ⅲ	4.1	3.1	1.2	11	1.5	1.7	5	10:11	切	Ⅱ-A	黄褐色泥岩		
433	865	理	Ⅲ	3.4	1.6	1.5	11	2.2	1.5	7	10:7	行	Ⅱ-A	泥岩	①~⑫	
434	555	理	Ⅲ	4.4	2.5	1.2	18	1.8	1.7	6	10:10	行	Ⅰ-B ²	泥岩		
435	266	理	Ⅲ	4.7	3.2	2.0	12	2.3	2.1	5	10:9	行	Ⅱ-A	黄色泥岩		
436	734	土壤		5.4	2.6	1.4	28	2.2	1.5	4	10:7	質	I-E ²	灰色泥岩	①④⑤⑥	
437	111	土壤		5.8	3.3	1.9	41	2.5	1.7	5	10:7	質	I-E ²	黄褐色泥岩		
438	609	理	洞面	3.4	3.0	2.4	35	2.1	1.4	4	10:7	質	I-E ²	灰色泥岩		
439	157	理	Ⅱ	7.0	3.8	2.9	87	1.9	2.0	5	10:11	礁	I-E ²	礁	①~④⑦~⑩⑪⑫	
440	628	土壤		4.6	3.8	1.0	29	2.0	1.6	6	10:8	礁	Ⅱ-C	黄褐色泥岩	①~⑨	
441	344	理	Ⅱ	4.7	2.7	1.6	27	2.1	2.1	5	10:10	礁	Ⅱ-B	黄褐色泥岩	①~②③⑦⑧~⑩⑪~⑫	
442	230	土壤		4.8	3.3	1.9	29	1.9	2.4	6	10:13	礁	I-A ²	黄褐色泥岩	①~④⑦~⑪	
443	824	理	Ⅱ	4.6	2.9	1.9	34	1.7	2.3	7	10:14	礁	I-B ²	黄褐色泥岩	⑩~⑬⑯	
444	270	理	Ⅱ	5.2	3.6	1.1	26	2.8	3.0	6	10:11	礁	Ⅱ-A	黄褐色泥岩		
445	639	土壤		3.2	2.1	1.6	12	1.1	1.0	3	10:9	已+	Ⅱ-A	灰色泥岩	①③⑪⑫	
446	531	理	Ⅲ	3.2	2.9	1.2	15	1.6	1.4	4	10:9	已	I-E ²	黄褐色泥岩		
447	702	土壤		3.2	2.8	1.0	11	1.4	1.7	5	10:8	已	Ⅱ-A	黄褐色泥岩		
448	726	土壤		6.2	3.3	2.0	42	1.5	1.5	4	10:10	天	I-E ²	泥岩	①~⑫	
449	464	理	Ⅲ	6.1	2.3	1.3	22	1.9	2.0	3	10:11	天	Ⅱ-B	黄褐色泥岩	⑩~⑫	
450	889	土壤	Ⅲ	6.6	5.0	1.4	68	1.6	2.0	4	10:13	天	Ⅱ-B	灰色泥岩		
451	1247	理	ペクト	4.0	2.9	2.2	35	1.8	1.8	4	10:10	下	Ⅱ-C	黄褐色泥岩	①③~⑦⑧	
452	374	理	Ⅲ	5.4	4.3	1.7	48	1.4	1.8	4	10:13	下	Ⅱ-A ²	黄褐色泥岩	⑩~⑭⑯~⑭	
453	1005	理	表面	3.4	2.2	1.0	12	1.1	1.1	4	10:10	下	Ⅱ-B	泥岩		
454	655	土壤		5.5	4.4	2.1	45	2.5	2.4	5	10:10	河	Ⅱ-A	黄褐色泥岩	①~⑫	
455	88	理	Ⅲ	5.2	2.6	1.3	24	2.4	1.7	4	10:7	河	I-E ²	黄褐色泥岩	⑩~⑫	
456	1133	理	Ⅱ	7.0	3.9	2.6	85	2.3	2.8	5	10:12	河	Ⅱ-A	泥岩		
457	560	理	Ⅲ	4.6	3.0	1.1	15	1.7	2.3	5	10:14	女	Ⅱ-D	黄褐色泥岩	①④⑤⑩~⑫	
458	406	理	Ⅲ	3.1	2.9	1.0	8	1.3	1.3	5	10:10	女	I-C ²	黄褐色泥岩	⑩~⑭⑯~⑫	
459	700	土壤		3.1	2.3	1.4	12	1.7	1.4	4	10:8	女	Ⅱ-B	泥岩	~	
460	751	土壤		3.8	2.5	1.4	14	1.4	0.7	5	10:5	年	I-C ²	黄褐色泥岩	①④⑤⑩~⑫	
461	258	理	Ⅱ	3.9	2.7	1.6	12	1.6	0.9	5	10:6	年	I-C ²	黄褐色泥岩	⑩~	
462	128	土壤	Ⅲ	3.9	1.9	0.6	6	2.4	1.3	5	10:6	年	V-D	灰色泥岩		
463	551	理	Ⅲ	4.1	3.0	1.5	23	1.7	1.3	5	10:8	慨	Ⅱ-C	灰色泥岩	①~④⑦⑩~⑫	
464	619	土壤		2.7	2.1	0.6	2	1.4	1.5	6	10:11	慨	Ⅱ-C	黄褐色泥岩	⑩~⑭⑯	
465	228	理	Ⅱ	3.2	2.3	1.4	8	1.5	1.5	5	10:10	慨	Ⅱ-A ²	黄褐色泥岩		
466	1168	理	Ⅱ	3.0	2.3	1.1	12	1.5	1.2	5	10:8	慨	I-C ²	泥岩	①~④⑦~⑫	
467	819	理	Ⅱ	2.6	2.3	0.9	5	1.6	1.7	6	10:11	慨	Ⅱ-A ²	黄褐色泥岩	⑩~⑭	
468	150	理	Ⅱ	4.4	2.8	1.5	20	2.5	2.1	7	10:9	慨	Ⅱ-A	黄褐色泥岩		
469	823	理	Ⅱ	3.5	2.2	2.0	18	1.9	1.6	7	10:9	慨	Ⅱ-C	黄褐色泥岩	①~④⑥~⑫	
470	235	理	Ⅲ	5.7	3.7	2.4	83	2.2	2.0	6	10:9	慨	Ⅱ-A	黄褐色泥岩	⑩~⑭	
471	456	理	Ⅲ	3.7	2.6	0.7	6	1.3	1.7	5	10:13	慨	I-A ²	黄褐色泥岩		

No.	遺物 No.	出土 地名	層位	縦の計測(cm, g)			横の計測(cm)				馬骨	単純分類 群一組	石 材	『法華經』の「品」No.	備 考
				長径	短径	厚さ	重さ	たて	よこ	角筋					
472	1096	塚	Ⅲ	5.6	3.2	1.4	38	1.7	1.5	6	10:9	復	V-C	黄灰色泥岩	①~②④~⑤
473	431	塚	Ⅲ	3.8	2.9	1.1	13	1.7	1.2	6	10:7	復	I-E ³	黄灰色泥岩	②~③⑥~⑦
474	216	塚	Ⅲ	3.5	3.3	2.6	36	2.2	1.7	5	10:8	復	V-A	灰 色 泥 岩	
475	107	土壌	Ⅲ	5.5	2.9	1.3	32	1.3	1.8	4	10:14	出	V-C	黄灰色泥岩	①~③⑨~⑩
476	576	鈎面	Ⅲ	3.8	2.5	1.3	15	1.5	1.0	5	10:7	出	V-C	黄灰色泥岩	②~③⑨~⑩
477	509	塚	Ⅲ	2.5	2.6	1.5	8	1.2	0.9	5	10:8	出	V-D	黄灰色泥岩	
478	1225	塚	ペルト	2.7	2.5	1.8	16	2.0	2.0	5	10:10	水	V-C	黄灰色泥岩	②③⑨⑩
479	625	土壌	Ⅲ	3.6	2.5	0.8	12	2.2	2.4	6	10:11	水	V-B	黄灰色泥岩	
480	164	塚	Ⅱ	4.9	3.2	1.6	34	1.5	1.7	4	10:11	水	V-A	黄灰色泥岩	
481	656	土壌	Ⅲ	7.2	3.2	1.5	38	1.2	1.3	4	10:11	上	V-A	灰 色 泥 岩	①~⑧
482	92	土壌	Ⅲ	3.4	2.2	1.8	11	1.0	1.4	4	10:14	上	V-A	黄灰色泥岩	⑨~⑩
483	863	塚	Ⅲ	2.6	2.0	1.1	9	1.5	1.5	4	10:10	上	V-C	砾 石	
484	733	土壌	Ⅲ	5.6	3.5	2.0	18	1.7	1.5	5	10:9	楕	V-C	泥 岩	⑤
485	643	土壌	Ⅲ	4.8	2.5	2.1	31	1.4	1.2	7	10:9	楕	V-B	黄灰色泥岩	
486	335	塚	Ⅱ	2.8	1.8	0.6	4	1.2	1.2	5	10:10	楕	V-C	黄灰色泥岩	
487	499	塚	Ⅲ	3.2	3.1	1.0	4	2.0	1.8	5	10:9	淨	V-A	黄灰色泥岩	①~②③④⑤
488	225	塚	Ⅱ	5.4	3.5	1.6	40	2.5	1.6	5	10:7	淨	V-B	黄灰色泥岩	⑨~⑩⑪~⑫
489	1215	塚	ペルト	4.5	2.6	1.4	20	1.2	1.5	4	10:13	汝	V-C	泥 岩	①~⑩
490	206	塚	Ⅱ	3.3	2.6	0.8	9	1.4	1.2	4	10:9	汝	I-C ³	黄灰色泥岩	
491	1288	塚	ペルト	4.4	2.9	1.8	28	0.8	0.8	4	10:10	·	V-C	泥 岩	
492	721	土壌	Ⅲ	3.1	2.4	1.6	15	0.8	0.9	3	10:11	·	V-C	泥 岩	
493	129	土壌	Ⅲ	5.5	4.7	1.5	60	0.6	0.3	4	10:4	·	V-A	黄灰色泥岩	
494	1260	塚	ペルト	4.6	3.4	2.5	35	0.8	0.6	3	10:8	·	V-C	泥 岩	
495	1209	塚	ペルト	5.3	3.2	1.0	30	2.2	2.5	4	10:11	令	I-B ⁴	黄灰色泥岩	①~③⑨~⑩
496	618	土壌	Ⅲ	5.1	3.3	2.1	36	1.6	2.5	5	10:16	令	I-B ²	黄灰色泥岩	
497	664	土壌	Ⅲ	7.0	5.5	2.7	100	1.6	2.0	6	10:13	惟	V	泥 岩	①~④⑦~⑨⑩
498	188	塚	Ⅱ	4.6	2.9	1.5	26	2.5	2.6	7	10:11	禮	V-A	泥 岩	②③④~⑤⑥
499	148	塚	Ⅱ	7.8	3.4	1.4	49	1.5	2.1	5	10:14	却	I-B ²	黄灰色泥岩	④⑤⑥⑦
500	1198	塚	ペルト	3.8	2.3	2.0	17	2.1	1.5	5	10:7	却	I-A ⁴	黄灰色泥岩	
501	651	土壌	Ⅴ	5.5	4.2	1.0	30	1.7	2.3	4	10:14	土	II-A ¹	泥 岩	①~②
502	654	土壌	Ⅲ	3.6	2.2	1.2	12	1.1	1.6	3	10:15	土	I-A ¹	黄灰色泥岩	⑨~⑩
503	164	土壌	Ⅲ	3.1	2.3	1.6	11	1.4	1.6	4	10:11	名	II-A ¹	灰 色 泥 岩	①~③⑨~⑩
504	263	塚	Ⅲ	7.2	3.7	1.1	44	1.7	1.2	4	10:7	名	V-B	黄灰色泥岩	②~⑩
505	564	鈎面	Ⅲ	4.9	3.5	0.8	16	2.2	2.1	5	10:10	愛	I-E ⁴	泥 岩	①~③⑦~⑩
506	681	土壌	Ⅲ	4.7	3.7	2.0	47	2.3	2.1	6	10:9	愛	I-B ³	黄灰色泥岩	⑨~⑩
507	1245	塚	ペルト	5.3	3.7	1.1	28	1.6	1.9	5	10:12	妙	I-E ¹	黄灰色泥岩	①~③⑨~⑩
508	547	塚	Ⅲ	3.6	2.5	0.9	11	1.7	2.0	5	10:12	妙	I-E ¹	研 色 泥 岩	④~⑤⑥~⑦⑧⑨
509	158	塚	Ⅱ	3.4	1.9	1.3	5	0.9	1.5	4	10:16.5	丘	V-D	黄灰色泥岩	①~③⑥~⑦⑨~⑩
510	240	塚	Ⅱ	2.7	1.8	1.6	8	0.9	1.4	5	10:15.5	丘	V-C	黄灰色泥岩	⑨~⑩⑪~⑫
511	631	土壌	Ⅲ	4.3	4.1	1.0	18	1.5	1.9	5	10:13	忍	I-A ⁴	黄灰色泥岩	①②③⑦~⑨~⑩
512	817	塚	Ⅱ	2.6	2.3	1.1	7	1.7	1.8	5	10:11	忍	V-B	黄灰色泥岩	⑨~⑩⑪~⑫
513	1241	塚	ペルト	4.5	3.2	1.1	18	3.1	1.7	4	10:5.5	事	V-B	黄灰色泥岩	①~③⑨~⑩
514	380	塚	Ⅲ	4.7	2.6	1.9	32	1.7	1.1	4	10:4.5	事	V-B	黄灰色泥岩	⑨~⑩⑪

No	遺物 No	出土 地図	層位	縦の計測(cm, g)				横の計測(cm)				層番	準時分類 群一類	石・材	『法華經』の「品」No	備考
				長径	短径	厚さ	重さ	たて	上こ	角付	たてよこ					
515	542	塚	III	3.8	3.0	1.2	18	2.0	1.5	4	10:7.5	圓	I-B ²	黄褐色泥岩	①~③⑦~⑨	
516	105	土壤	III	4.1	3.1	1.1	18	1.9	1.6	4	10:8.5	圓	V-A	黄褐色泥岩	②~⑤	
517	480	塚	III	5.9	3.1	2.0	31	3.2	1.5	5	10:4.5	圓	V-A	泥 石	①~③⑦~⑨	表裏2文字
								2.8	2.0	6	10:7	圓	V-C		②④⑧~⑩	
518	1006	塚	IV-A	3.6	3.0	1.4	13	1.6	1.5	5	10:9.9	圓	V-A	黄褐色泥岩	②④	
519	1196	塚	IV-B	3.7	2.8	0.8	11	1.5	2.3	3	10:15	人	I-B ²	黄褐色泥岩	①~③⑦⑨~⑩⑪	
520	987	塚	IV	4.2	3.0	1.7	28	2.0	1.6	3	10:5	人	V-C	泥 岩	②~⑤⑨	
521	800	塚	III	3.6	1.4	0.7	3	1.2	1.4	4	10:11.5	無	V-B	黄褐色泥岩		
522	812	塚	II	5.2	4.6	3.0	69	1.1	2.9	6	10:26	無	V-D	灰色 泥 岩		
523	795	塚	III	2.8	1.7	1.7	7	1.2	1.5	6	10:13	手	V-C	灰色 泥 岩	①~③⑦⑨⑩⑪	
524	563	斜面	III	5.8	2.9	2.2	52	1.6	1.4	5	10:9	手	I-E ²	黄褐色泥岩	②④⑧	
525	630	土壤	IV	4.4	3.7	0.9	17	1.9	2.0	6	10:11	亂	V-B	黄褐色泥岩	①③⑨	
526	408	塚	III	2.8	2.2	1.5	9	1.0	1.2	4	10:12	鬼	V-B	黄褐色泥岩	①~③⑤~⑨⑩~⑪	
527	1226	塚	III	5.9	3.5	1.7	41	1.3	1.6	6	10:12	品	I-A ²	黄褐色泥岩	②④⑧	
528	632	土壤	IV	4.3	4.2	1.7	29	1.5	2.6	6	10:13	品	V-A	泥 岩		
529	404	塚	III	8.6	6.1	2.0	130	1.5	1.1	5	10:8	千	V-D	黄褐色泥岩	①~⑨	
530	892	土壤	III	4.7	3.0	1.8	30	1.2	1.7	4	10:14	千	V-C	泥 岩	①③⑦~⑨⑩~⑪	
531	902	土壤	III	5.3	4.3	1.8	65	0.5	3.0	3	10:6	八	V-A	泥 岩	①③⑦~⑨⑩~⑪	
532	841	塚	I	4.6	2.7	2.4	46	0.8	0.8	3	10:10	八	V-B	泥 岩	②~⑩	
533	233	塚	II	4.5	2.4	1.8	18	1.6	1.2	5	10:7.5	山	V-B	黄褐色泥岩	①③⑤~⑨⑩⑪	
534	71	塚	III	5.6	2.8	1.1	17	1.5	1.6	5	10:16.5	山	I-B ²	黄褐色泥岩	②④⑧⑨~⑩⑪	
535	1185	塚	IV-A	4.8	4.4	1.1	31	2.4	2.3	5	10:9.5	時	V-B	黄褐色泥岩	①~⑨	
536	644	土壤	IV	2.7	1.5	1.7	6	1.2	1.2	6	10:10	時	V-B	泥 岩		
537	173	塚	II	4.2	3.4	1.3	26	1.7	1.5	5	10:9	魔	V-C	黄褐色泥岩	①③④⑦⑨⑩⑪	
538	28	塚	III	2.6	1.8	1.4	3	1.7	1.1	4	10:6.5	魔	V-B	黄褐色泥岩	②④⑧	
539	455	塚	III	4.1	2.1	1.8	13	2.5	1.9	5	10:8	本	I-B ²	灰褐色泥岩	①③⑦~⑨⑩~⑪	
540	732	土壤	IV	2.8	2.8	1.3	9	1.0	1.2	5	10:12	本	V-C	黄褐色泥岩	②④⑧~⑩⑪	
541	1263	理	IV-A	3.5	2.6	1.4	19	1.2	0.8	6	10:7	米	II-B	泥 岩	④	
542	1123	理	II	5.8	2.6	2.0	34	1.1	1.1	5	10:10	米	V-B	泥 岩		
543	1170	塚	II	3.7	2.6	1.4	19	2.5	1.7	6	10:7	義	V-A	灰色 泥 岩	①~②③⑩	
544	637	土壤	IV	4.5	3.5	1.0	18	1.7	1.5	5	10:9	魔	V-A	灰色 泥 岩	①③⑤⑦⑨⑩⑪	
545	333	塚	II	4.1	4.0	2.4	50	1.5	1.5	5	10:10	便	V-B	黄褐色泥岩	①~④⑦~⑩⑪	
546	275	塚	II	5.8	2.8	1.2	21	2.6	1.7	4	10:8.5	便	V-A ²	黄褐色泥岩	②~⑩	
547	1192	塚	IV-A	4.2	2.7	0.8	10	1.5	2.1	5	10:14	惡	V-A	黄褐色泥岩	①~③⑦~⑩	
548	675	土壤	IV	6.2	3.2	2.1	38	1.5	1.5	5	10:10	惡	V-B	泥 岩	②~⑩	
549	394	塚	III	5.0	2.4	0.9	14	1.3	1.3	6	10:10	空	V-C	灰色 泥 岩	①~③⑦⑩⑪	
550	638	土壤	IV	4.2	2.5	1.1	14	1.4	1.1'	4	10:8	惡	II-A ²	灰色 泥 岩	②④⑧~⑩⑪	
551	698	土壤	III	3.1	2.9	1.2	14	2.0	1.4	7	10:7	華	I-D ²	黄褐色泥岩	①~⑦⑨~⑩	
552	198	塚	II	3.2	2.8	1.6	15	2.0	1.4	6	10:7	華	I-D ²	黄褐色泥岩	②④⑧	
553	239	塚	II	3.9	2.3	0.9	10	1.5	1.4	4	10:9	尼	V-B	灰色 泥 岩	①~③⑦⑩⑪~⑩⑪	
554	1220	塚	IV-A	3.0	2.4	1.5	7	1.3	1.5	3	10:11.5	尼	V-B	黄褐色泥岩		
555	193	塚	II	2.8	2.0	1.0	8	2.2	1.8	5	10:8	桑	V-A	黄褐色泥岩	①~③⑦⑩⑪~⑩⑪	
556	236	塚	II	4.0	3.3	1.2	15	2.0	2.0	6	10:10	桑	I-B ²	黄褐色泥岩	②	

No	遺物 No	出土 地図	剖位	縦の計測(cm, g)				横の計測(cm)				墨書	筆跡分類 群一組	石 村	「法華経」の「品」No	備 考
				長径	短径	厚さ	重さ	たて	よこ	角数	たて・よこ					
557	322	塚	II	6.3	5.1	2.3	102	1.2	1.7	5	10:14	知	V-B	黄灰色泥岩	①~④⑤⑥	
558	250	塚	II	3.2	2.5	1.7	15	1.4	1.8	4	10:13	知	V-A	黄灰色泥岩		
559	368	塚	III	5.5	4.2	1.2	25	2.1	2.2	5	10:16.5	後	I-B ²	黄灰色泥岩	①②③④⑤⑥⑦⑧	
560	488	塚	III	3.2	2.6	0.8	9	2.3	1.5	6	10:6.5	後	I-D ³	黄褐色泥岩		
561	540	塚	III	3.1	1.8	1.7	14	2.0	1.5	6	10:7.5	身	V-B	黄灰色泥岩	①~③	
562	134	土壤	II	2.9	2.1	0.5	1	1.6	0.9	4	10:5.5	身	I-C ²	黄灰色泥岩	③~⑨	
563	267	塚	II	2.9	2.6	0.8	5	1.4	1.3	5	10:9	白	V-B	黄灰色泥岩	①~④⑤⑥⑦~⑩	
564	559	塚	III	3.7	2.0	1.0	12	1.1	1.2	5	10:11	白	V-D	黄灰色泥岩	③④⑤⑥~⑩	
565	356	塚	II	4.2	2.8	2.2	28	1.0	0.5	4	10:5	月	I-C ²	黄灰色泥岩	①②③④~⑩	
566	1180	塚	II	3.1	2.0	0.8	7	1.2	0.6	3	10:5	月	V-D	泥 岩	③④⑤	
567	167	塚	II	7.3	5.9	1.3	83	2.1	2.3	7	10:11	總	V-C	泥 岩	①~③④~⑩	
568	91	塚	III	4.0	1.6	0.9	8	1.2	1.2	5	10:10	總	V-B	泥 岩	③~⑩	
569	276	塚	II	4.7	3.5	1.5	22	1.8	2.0	5	10:11	子	V-C	黄灰色泥岩	①~⑩	
570	264	塚	II	3.1	1.8	1.5	9	0.9	0.9	4	10:10	子	V-D	黄褐色泥岩		
571	858	塚	I	4.6	2.1	0.9	10	1.6	1.6	9	10:10	總	V-C	灰褐色泥岩	①~③④~⑩	
572	13	塚	III	5.4	2.8	1.6	32	1.8	1.7	5	10:9.5	總	V-C	黄褐色泥岩	③~⑩	
573	679	土壤	II	5.8	4.0	3.5	105	1.6	2.0	5	10:12.5	次	V-B	黄灰色泥岩	①~⑩	
574	890	土壤	III	3.1	2.2	1.6	12	1.9	1.6	5	10:9.5	次	V-B	黄灰色泥岩	③~⑩	
575	250	塚	II	4.0	2.1	1.5	21	1.1	1.1	5	10:10	面	V-D	黄灰色泥岩	①②③④~⑩⑪⑫	
576	65	塚	III	6.3	2.3	2.0	30	1.0	1.7	6	10:17	面	V-B	灰 色 泥 岩	①~⑩⑪⑫⑬⑭	
577	914	塚	III	2.7	2.2	0.7	4	2.3	1.4	4	10:6	十	V-C	黄灰色泥岩	①~⑩	
578	554	塚	III	4.8	3.5	1.6	39	2.3	1.4	4	10:6	十	V-A	黄灰色泥岩		
579	655	土壤	II	6.6	4.0	2.8	72	1.7	2.0	4	10:12	及	I-A*	黄灰色泥岩	①~⑩	
580	442	塚	III	2.9	1.9	1.3	4	1.4	1.6	5	10:11.5	及	I-B ³	黄灰色泥岩		
581	147	塚	III	5.2	2.1	2.2	26	1.7	2.1	6	10:12	通	V-A	黄灰色泥岩	①③~④⑤~⑩	
582	122	土壤	III	5.3	3.4	1.2	29	2.2	1.7	6	10:8	通	I-E ⁴	灰 色 泥 岩	③~⑩	
583	565	鉛皿	II	5.6	4.5	3.2	110	2.0	2.6	7	10:13	秦	I-B ⁴	泥 岩	①~⑩⑪⑫	
584	487	塚	III	5.6	2.2	1.8	34	2.0	1.4	6	10:7	秦	V-A	黄灰色泥岩	③~⑩	
585	1012	塚	II	5.4	4.6	2.0	55	1.8	0.8	5	10:5	巾	V-D	泥 岩	④⑤⑥⑦⑧⑨⑩	
586	389	塚	III	3.8	3.7	3.1	43	1.9	1.1	4	10:6	巾	I-E ³	灰 色 泥 岩		
587	137	土壤	IV	4.8	2.6	2.2	32	2.8	2.0	7	10:7	青	V-C	黄灰色泥岩	⑦⑧⑨⑩~⑪⑫⑬	
588	1248	塚	IV-6ト	4.7	4.4	2.3	55	1.2	1.1	5	10:9	辯	I-B	泥 岩	①②③④⑤⑥⑦⑧⑨~⑩	
589	561	塚	III	5.0	2.4	1.3	20	1.9	1.6	6	10:8.5	保	I-B ³	黄褐色泥岩	③	
590	355	塚	II	4.1	2.1	1.5	15	1.7	1.5	5	10:9	赤	V-B	黄灰色泥岩	①~⑩⑪~⑩	
591	674	土壤	II	3.0	2.9	1.0	13	1.3	0.8	5	10:6	豈	V-C	泥 岩	①②③④⑤⑥⑦	
592	1046	塚	III	4.7	3.5	2.0	42	1.0	0.8	5	10:8	台	V-C	黄灰色泥岩	④⑤⑥⑦⑧⑨⑩	
593	604	鉛皿	II	4.5	3.1	1.4	23	1.6	1.5	6	10:9	耶	V-A	泥 岩	①②③④~⑩	
594	806	塚	III	3.7	2.4	0.9	10	1.1	1.0	5	10:9	霧	V-B	黄灰色泥岩	①~⑩⑪~⑩⑫⑬⑭	
595	516	塚	III	3.2	2.6	0.7	1	1.8	1.3	5	10:7	重	V-A	黄灰色泥岩	①~⑩⑪~⑩⑫⑬⑭	
596	670	土壤	II	8.3	5.0	1.4	73	2.2	1.8	6	10:8	術	I-A ³	黄灰色泥岩	④⑤⑥⑦⑧⑨⑩	
597	589	鉛皿	II	3.0	2.4	0.9	9	1.4	1.2	5	10:8.5	勿	V-C	泥 岩	①~⑩⑪~⑩⑫⑬⑭	
598	997	塚	書画	3.3	2.5	1.9	25	1.4	1.7	4	10:12	向	V-B	泥 岩	①②③④⑤⑥⑦⑧⑨~⑩	
599	1187	塚	ペルト	3.8	3.2	1.4	24	0.4	1.5	4	10:37.5	--	I-B ⁴	砂 岩	①~⑩	

No	遺物 No	出土 地図	層位	理の計測(cm, g)				理書の計測(cm)				墨書き	等分分類 群一類	石 材	「法華経」の品目 No	備 考
				長径	短径	厚さ	重さ	たて	よこ	角数	たて:よこ					
600	24	塚	II	5.3	3.2	3.0	59	1.6	1.4	4	10:9	式	II-C	泥 岩	④	
601	297	塚	II	6.4	3.9	2.4	62	3.1	3.4	4	10:11	源	II	黄灰色泥岩	②④~③①④③~③②	
602	673	土壤		6.4	3.0	1.1	25	1.3	1.1	4	10:8.5	曾カ	I-C*	黄灰色泥岩	④	~
603	454	塚	III	5.8	4.3	2.1	58	2.0	3.0	5	10:15	脚	I-B*	灰 色 泥 岩	①②③④⑤⑥~③⑦	
604	241	塚	II	5.8	2.7	2.1	59	1.4	2.2	5	10:16	块々	II-A	黄灰色泥岩	⑥	
605	521	塚	II	4.4	3.1	2.7	32	1.6	1.8	8	10:11	解	I-A*	黄灰色泥岩	①~②③~③	
606	548	塚	III	5.3	3.1	1.3	25	1.5	1.6	6	10:11	悉	I-A*	灰褐色泥岩	②③④⑤⑥⑦	
607	196	塚	II	4.8	4.0	1.9	35	1.3	2.0	6	10:15	地	I-B*	黄灰色泥岩	①~②③④⑤⑥~③⑦~⑨	
608	495	塚	III	5.0	3.6	2.3	45	2.5	1.5	5	10:6	究	II-C	黄灰色泥岩	②~③④⑤⑥~③⑦	
609	496	塚	III	4.1	2.8	1.5	22	2.8	2.0	6	10:7	謙	II-A	灰褐色泥岩	①~③④⑤~③⑦~⑧	
610	682	土壤		4.2	2.7	1.4	12	2.1	1.9	6	10:9	深	II-A*	泥 岩	①~②③~③⑦	
611	354	塚	II	5.1	2.4	2.1	30	0.9	1.0	7	10:11	状	II-B	黄灰色泥岩	③④	
612	1234	塚	②6	3.3	2.1	1.1	9	1.0	1.6	5	10:6	正	II-B	黄灰色泥岩	①~②③④⑤~③⑦~⑨	
613	259	塚	II	4.5	2.5	2.2	31	1.3	1.5	5	10:11.5	似	II-A	黄灰色泥岩	④~⑨	
614	535	塚	III	3.5	3.1	2.6	25	1.3	1.1	4	10:8.5	曾々	II-D	黄灰色泥岩	④	
615	1216	塚	②6	2.8	2.1	1.5	6	1.8	1.6	5	10:9	未々	I-D*	泥 岩		
616	120	土壤	III	3.4	2.8	1.7	21	1.6	1.5	6	10:9	家	II-A*	黄灰色泥岩	①②③④⑤⑥~③⑦	
617	337	塚	II	4.6	3.7	2.4	41	1.4	1.4	4	10:10	矢々	I-C*	黄灰色泥岩		
618	545	塚	III	2.5	2.1	0.6	4	1.9	1.5	5	10:10	調	I-A*	黄灰色泥岩	③④~③⑤⑥⑦⑧⑨~③⑨	
619	1240	塚	②6	2.2	2.0	0.6	2	1.4	1.0	7	10:7	共	V-B	黄灰色泥岩	②~③④⑤⑥⑦⑧~③⑨	
620	124	塚	III	2.5	1.8	1.0	4	1.3	1.1	5	10:8.5	信々	II-B	灰 色 泥 岩	②~③④⑤⑥~③⑦~⑨	
621	1013	塚	表面	2.7	2.3	1.5	8	1.8	1.6	5	10:9	色	II-A	黄灰色泥岩	①②~③④⑤⑥⑦~⑨	
622	299	塚	II	3.8	3.0	2.5	40	1.3	0.4	3	10:3	七々	II-D	黄灰色泥岩		
623	272	塚	II	4.5	2.5	2.0	25	2.6	1.7	5	10:6.5	履	I-E*	黄灰色泥岩	③~④⑤⑥~③⑦⑧⑨	
624	919	土壤		3.6	3.5	1.7	34	2.5	2.4	6	10:9.5	熟	I-B*	灰 色 泥 岩	①②③④⑤⑥~③⑦⑧⑨	
625	161	塚	II	3.6	2.6	1.4	11	1.3	0.9	5	10:7	諒	II-B	黄灰色泥岩	②~③④⑤⑥~③⑦⑧⑨	
626	361	塚	III	3.9	2.1	0.8	6	1.0	1.0	6	10:10	悲	II-B	黄灰色泥岩	①~②③④⑤⑥~③⑦⑧⑨	
627	340	塚	II	2.5	2.0	1.2	4	1.2	1.2	6	10:10	宿々	II-B	黄灰色泥岩	④⑤⑥	
628	1167	塚	II	3.2	2.5	1.5	13	1.5	1.6	4	10:10.5	悔	I-A*	泥 岩	①②~③④⑤⑥~③⑦⑧⑨	
629	595	斜面		4.5	2.4	1.0	17	1.9	1.8	5	10:9.5	待	II-A	泥 岩	①②③④⑤⑥~③⑦⑧⑨	
630	396	塚	III	3.0	1.9	1.7	12	1.2	1.3	7	10:11	豫	II-B	黄灰色泥岩	①~②③④⑤⑥~③⑦⑧⑨	
631	381	塚	II	4.0	3.7	1.3	12	2.0	2.2	5	10:11	曾々	II-B	黄灰色泥岩		
632	815	塚	II	3.8	3.7	2.0	13	2.1	2.6	6	10:12	興	II-B	泥 岩	①~②③④⑤⑥~③⑦⑧⑨	
633	61	塚	II	2.8	2.1	1.4	8	1.5	1.2	5	10:8	毒	I-C*	研 色 泥 岩	①②③④⑤⑥~③⑦⑧⑨	
634	452	塚	II	3.9	2.4	1.6	17	1.3	2.0	6	10:15	各	II-B	黄灰色泥岩	①~②③~③⑦⑧⑨	
635	281	塚	II	5.5	2.3	1.0	9	1.7	1.7	5	10:10	桑々	I-B*	黄灰色泥岩	④	
636	783	塚	III	9.0	3.5	1.8	68	3.5	1.9	7	10:5	喪	II-B	灰 色 泥 岩	④	
637	1039	塚	表面	5.3	3.5	1.8	44	1.9	1.3	6	10:7	魚	I-D*	泥 岩	②③④⑤⑥~③⑦⑧⑨	
638	199	塚	II	3.6	2.3	1.8	12	1.3	1.6	4	10:12	履々	II-A*	灰 色 泥 岩	①~②③④⑤⑥~③⑦⑧⑨	
639	359	塚	III	3.2	2.0	0.9	7	1.4	1.4	5	10:10	演	I-A*	黄灰色泥岩	④⑤⑥	
640	722	土壤		5.9	5.5	2.7	93	3.0	2.2	6	10:7	黒	II-A	泥 岩	①②~③④⑤⑥~③⑦⑧⑨	
641	315	塚	II	4.4	4.0	1.6	30	2.2	1.6	5	10:7	普	II-A*	黄灰色泥岩	②~③④⑤⑥~③⑦⑧⑨	
642	479	塚	III	5.2	2.4	1.1	15	2.0	1.6	6	10:8	梵	II-C	黄灰色泥岩	①~②③④⑤⑥~③⑦⑧⑨	

No	地名 No	出土地 地区	層位	礫の計測(cm, g)				箇内の計測(cm)				墨書き	葉輪分類 器一組	石材	『法華経』の「品」No	備考
				長径	短径	厚さ	重さ	たて	よこ	角数	たて:よこ					
643	457	堺	Ⅲ	5.2	3.9	1.3	35	1.7	1.3	5	10:7.5	馬+	I-D ²	黄灰色泥岩	①②⑨	
644	813	堺	Ⅲ	4.8	3.7	1.2	25	0.8	0.9	5	10:11	六	Ⅲ-B	黄灰色泥岩	①-②⑤-③④-④⑥	
645	472	堺	Ⅲ	3.7	1.3	1.3	9	1.4	1.4	5	10:10	四+	Ⅲ-C	黄灰色泥岩	~	
646	1237	堺	ペクト	2.8	2.4	1.5	7	1.8	1.9	5	10:10.5	訓	Ⅲ-C	黄灰色泥岩	①②③-④⑤⑥⑦⑧⑨-⑩ ⑪-⑫⑬	
647	211	堺	Ⅲ	2.6	2.4	1.0	9	1.7	2.0	3	10:12	速	Ⅲ-A	黄灰色泥岩	①-②③④-⑤⑥-⑦⑧-⑨	
648	191	堺	Ⅲ	5.0	1.8	1.1	7	1.6	1.1	5	10:7	牛	Ⅲ-A ⁴	黄灰色泥岩	⑧	
649	41	堺	Ⅲ	3.1	2.9	1.6	12	1.4	2.0	6	10:14	三+	Ⅲ-B	黄灰色泥岩	①②③④⑤⑥⑦⑧	
650	161	堺	Ⅲ	3.5	2.6	1.9	19	1.8	2.0	5	10:11	鶴+	Ⅲ-A	灰色泥岩		
651	403	堺	Ⅲ	5.3	3.2	1.2	20	1.9	1.9	5	10:10	鶴	Ⅲ-C	灰色泥岩		
652	1238	堺	ペクト	2.5	2.3	1.1	7	1.6	1.7	5	10:10.5	鶴	Ⅲ-B	黄灰色泥岩	①-④⑤⑥⑦-⑧⑨-⑩	
653	407	堺	Ⅲ	3.1	2.0	0.6	5	0.8	1.1	4	10:14	功	I-C ²	黄褐色泥岩	②-③④-⑤⑥-⑦⑧-⑨⑩-⑪	
654	443	堺	Ⅲ	3.1	2.4	2.4	23	1.5	1.2	5	10:8	付	Ⅲ-B	泥岩	④⑤⑥⑦⑧	
655	173	堺	Ⅲ	2.7	2.7	1.4	10	2.5	2.2	6	10:9	善	Ⅲ-A ¹	黄灰色泥岩	①-③④⑤-⑥⑦⑧⑨⑩	
656	370	堺	Ⅲ	6.1	3.6	0.9	23	1.9	2.1	7	10:11	懸	Ⅲ-C	黄灰色泥岩	②③④⑤⑥⑦⑧	
657	380	堺	Ⅲ	3.7	3.3	2.0	35	1.9	1.7	7	10:9	解	Ⅲ-C	泥岩	①-②③-④	
658	549	堺	Ⅲ	4.1	1.9	0.8	8	1.1	1.0	4	10:9	死	Ⅲ-B	黄灰色泥岩	①-②③④⑤⑥⑦⑧-⑨	
659	715	土壤		6.5	4.9	1.7	70	1.4	1.2	6	10:8.5	作	I-C ²	黄灰色泥岩	①-⑩	
660	329	堺	Ⅲ	5.6	3.7	1.6	6	1.3	1.5	5	10:11.5	津	I-A ⁶	黄灰色泥岩	①-②③-④⑤-⑦	
661	338	堺	Ⅲ	4.4	3.1	1.6	20	0.9	1.0	3	10:11	欠	Ⅲ-D	泥岩	①②③④⑤⑥	
662	109	土壤		3.3	2.6	2.0	12	1.9	2.0	7	10:10.5	腰	I-B ²	黄灰色泥岩	①-③④⑤⑥⑦⑧	
663	1204	堺	ペクト	6.2	4.7	1.3	32	2.2	2.8	5	10:13	疑	I-B ²	黄灰色泥岩	①-②③-④⑤⑥⑦⑧	
664	467	堺	Ⅲ	3.6	2.1	1.4	8	1.2	1.7	6	10:14	純	I-E ⁴	黄灰色泥岩	④⑤⑧	
665	288	堺	Ⅲ	4.3	3.0	0.9	11	2.2	1.6	5	10:7	美	I-D ⁴	黄灰色泥岩	②-⑦⑧⑨⑩⑪	
666	622	土壤		4.9	3.0	1.0	16	1.9	1.8	5	10:9.5	器	Ⅲ-B	黄灰色泥岩	④⑤⑥⑧	
667	79	堺	Ⅲ	5.3	3.2	3.4	68	1.8	1.5	5	10:8	臥	I-B ²	黄灰色泥岩	①④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪	
668	441	堺	Ⅲ	4.1	3.3	1.9	27	1.6	1.5	6	10:9	次	I-D ⁴	泥岩	②③-④⑤⑥⑦⑧-⑩⑪	
669	720	土壤		8.4	2.5	1.4	30	1.3	1.0	5	10:7.5	自	Ⅲ-A	泥岩	①-③⑦-⑨	
670	645	土壤		3.4	3.0	1.7	12	1.8	2.2	6	10:12	脛	Ⅲ-A	黄灰色泥岩	①-②③-⑨	
671	160	堺	Ⅲ	5.4	5.1	1.9	85	1.6	1.9	4	10:12	闇	Ⅲ-D	泥岩	②③-⑧⑨-⑩	
672	1174	堺	Ⅲ	4.0	3.6	1.7	38	2.3	2.3	4	10:10	休	Ⅲ-C	泥岩	②③	
673	1265	堺	ペクト	5.2	1.8	1.1	11	1.9	1.5	6	10:8	智	Ⅲ-B	黄灰色泥岩	①-②③④-⑤⑥⑦⑧	
674	391	堺	Ⅲ	5.5	4.1	1.8	56	2.4	1.8	7	10:8	諭	Ⅲ-B	泥岩	②⑦⑧	
675	51	堺	Ⅲ	4.0	3.0	1.2	16	2.3	1.6	5	10:7	即	I-B ³	泥岩	①-②③④⑤⑥-⑨	
676	53	堺	Ⅲ	2.7	2.2	0.8	2	1.8	1.9	6	10:10.5	寢	Ⅲ-A	黄灰色泥岩	②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪	
677	620	土壤		3.2	3.1	1.3	11	1.4	2.0	5	10:14	達	Ⅲ-B	泥岩	②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪	
678	352	堺	Ⅲ	4.7	4.6	2.0	15	1.2	0.9	4	10:8	明	I-A ⁴	黄灰色泥岩	①-②③④⑤⑥⑦⑧	
679	526	堺	Ⅲ	6.3	3.4	1.7	64	3.1	2.3	6	10:7.5	導	I-E ¹	粘土岩	①-②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪	
680	789	堺	Ⅲ	3.1	3.0	0.7	6	1.3	1.9	5	10:15	塔	Ⅲ-C	黄灰色泥岩	①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪	
681	627	土壤		4.4	3.6	2.5	14	2.0	1.8	5	10:9	福	Ⅲ-C	灰色泥岩		
682	1219	堺	ペクト	3.9	1.9	2.0	12	1.9	1.6	4	10:9	侵	Ⅲ-B	黄灰色泥岩	⑧	
683	552	堺	Ⅲ	3.6	3.3	1.3	17	2.4	1.7	5	10:7	當	I-B ³	灰褐色泥岩	①-⑨	
684	574	鉄面		5.1	3.1	1.9	33	1.6	1.4	5	10:9	火	Ⅲ-A	黄褐色泥岩	①-③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪	
685	580	鉄面		3.4	2.4	1.1	6	1.2	1.4	5	10:11.5	麗	I-C ²	黄褐色泥岩	①②⑩	

No.	遺物 No.	出土 地名	層段	縦の計測(cm, g)				横の計測(cm)				品名	厚さ	算出分類 群一級	石材	『法隆經』の「品」No.	著者
				長径	短径	厚さ	重さ	たて	よこ	角数	たて・よこ						
686	492	塚	Ⅲ	6.4	3.7	2.0	65	2.6	3.3	4	10:13	食	I-B ¹	黄灰色泥岩	①-②-③-④-⑤-⑥-⑦- 25-26		
687	991	塚	表面	6.6	4.3	2.3	86	1.4	0.8	3	10:6	イ	Ⅱ-C	黄灰色泥岩			
688	143	土壤	IV	6.1	2.8	1.3	28	2.4	2.0	5	10:8	蟹	Ⅱ-A ²	黄灰色泥岩			
689	1007	塚	表面	5.2	3.3	1.6	33	1.4	1.6	4	10:6	?	Ⅱ-C	泥岩			
690	843	塚	I	5.8	3.9	1.7	41	2.5	2.2	7	10:9	神	I-E ²	泥岩	①-②-③-④-⑤-⑥-⑦- 25-26		
691	252	塚	II	5.1	3.7	1.3	18	2.3	2.4	7	10:10.5	無	Ⅱ-A ¹	黄灰色泥岩	②-③-④-⑤-⑥-⑦- 25-26		
692	349	塚	II	2.9	1.8	1.3	4	1.2	1.0	5	10:8	實	Ⅲ-B	黄灰色泥岩	①-②-③-④-⑤-⑥- 25-26		
693	546	塚	III	3.1	2.3	1.6	13	1.0	0.6	5	10:6	實	Ⅲ-B	黄灰色泥岩	③-⑨		
694	449	塚	III	3.2	2.2	1.0	3	2.0	1.7	8	10:8.5	補	I-E ²	黄灰色泥岩	①-②-③-④-⑤-⑥-⑦- 25-26		
695	584	斜面		3.9	3.5	2.2	28	1.4	1.9	5	10:14	分	Ⅱ-B	灰色泥岩	②-③-④-⑤-⑥-⑦- 25-26		
696	1273	塚	べた	2.8	2.4	0.9	8	0.5	0.6	4	10:16	七	Ⅱ-D	泥岩	①-②-③-④-⑤- 25-26-27-28		
697	497	塚	III	6.8	5.1	3.4	97	2.4	1.4	5	10:5	圓	Ⅱ-A	黄灰色泥岩	①-25-26		
698	532	塚	III	3.9	1.6	1.4	12	2.2	1.3	6	10:6	高	Ⅲ-C	黄灰色泥岩	①-②-③-④-⑤- 25-26-27		
699	144	土壤	IV	3.2	2.7	1.9	19	2.6	1.7	8	10:9	學	I-A ²	玄武岩	①-②-③-④-⑤- 25-26-27		
700	534	塚	III	2.7	1.6	1.5	10	1.4	1.1	4	10:8	同	Ⅱ-B	黄褐色泥岩	①-②-③-④- 25-26-27		
701	862	塚	III	4.5	2.8	2.1	36	1.6	1.5	4	10:9	鄉	Ⅱ-A	黄灰色泥岩			
702	84	塚	III	5.7	3.1	1.7	44	1.0	1.6	4	10:16	二	Ⅱ-A	黄灰色泥岩	①-②-③-④- 25-26-27		
703	346	塚	II	6.5	3.6	2.0	54	2.0	2.0	4	10:10	遇	Ⅱ-A	綠色粘板岩	①-②-③- 25-26		
704	86	塚	III	4.4	2.6	1.7	24	1.1	1.0	4	10:9	金	Ⅱ-D	泥岩	①-②-③-④-⑤- 25-26-27		
705	635	土壤		7.2	4.3	1.5	17	1.4	1.2	5	10:8.5	云	I-E ²	灰色泥岩	①-②-③- 25-26-27		
706	271	塚	II	4.3	3.0	1.6	27	1.0	1.2	5	10:12	光	I-C ¹	黄灰色泥岩	②-③-④- 25-26-27		
707	629	土壤		4.7	3.4	1.6	14	1.6	1.5	5	10:9	既	Ⅱ-A ³	灰色泥岩	①-②-③- 25-26-27		
708	243	塚	II	4.7	3.0	1.5	24	1.9	2.4	5	10:12.5	除	Ⅱ-A ¹	泥岩	①-②-③- 25-26-27		
709	496	塚	III	4.9	3.9	1.0	10	1.6	1.6	4	10:10	遮	I-A ²	黄灰色泥岩	①-②-③-④- 25-26-27		
710	292	塚	II	2.4	1.5	0.8	4	1.3	1.1	5	10:8.5	方	I-C ¹	灰色泥岩	①-②-③- 25-26-27		
711	303	塚	II	3.4	2.9	2.3	24	2.8	2.1	7	10:7.5	實	Ⅱ-C	黄灰色泥岩	①-②-③		
712	1043	塚	表面	5.8	3.6	2.3	58	2.1	2.5	5	10:12	便	Ⅱ-A	灰色泥岩	②-③-④- 25-26-27		
713	477	塚	III	4.3	2.7	2.0	24	1.6	1.6	5	10:10	求	Ⅱ-B	灰色泥岩	①-②-③- 25-26-27		
714	1233	塚	べた	2.0	1.9	1.1	5	1.3	1.5	6	10:12.5	近	Ⅱ-A ²	黄灰色泥岩	①-②-③-④- 25-26-27		
715	1211	塚	べた	5.2	3.2	1.7	30	1.0	0.6	4	10:6	日	Ⅱ-B	黄灰色泥岩	①-②-③-④- 25-26-27		
716	845	塚	I	4.4	2.5	1.7	36	1.9	1.6	6	10:8.5	村	Ⅱ-C	泥岩	①-②-③		
717	588	斜面		3.0	2.5	1.4	12	1.9	1.9	6	10:10	未	I-B ²	泥岩	①-②-③-④- 25-26-27		
718	738	土壤		3.7	1.5	1.2	12	1.6	1.3	5	10:8	反	Ⅱ-C	黄灰色泥岩	①-②-③		
719	716	土壤		4.2	3.4	1.8	33	1.8	2.3	4	10:13	直	Ⅱ-C	塚	①		
720	570	斜面		4.6	4.5	1.4	40	1.3	1.5	6	10:12	忠	Ⅱ-B	灰色泥岩			
721	1216	塚	べた	4.6	3.0	1.9	26	1.7	1.5	6	10:10.5	果	Ⅱ-B	黄灰色泥岩	①-②-③-④- 25-26-27		
722	666	土壤		3.7	2.2	1.3	10	1.4	1.4	5	10:10	離	Ⅱ-B	黄灰色泥岩	①-②-③- 25-26-27		
723	937	塚	III	4.6	3.6	1.2	16	1.7	1.6	5	10:10	往	I-D ²	黄灰色泥岩	①-②-③- 25-26-27		
724	842	塚	I	4.1	2.6	1.2	17	1.7	1.6	7	10:9	種	Ⅱ-C	玄武岩	①-②-③- 25-26-27		
725	1156	塚	II	4.9	1.7	1.4	15	1.3	1.5	5	10:11.5	升	Ⅱ-A	灰色泥岩			
726	371	塚	III	4.0	1.8	1.7	11	1.7	1.4	5	10:8	唯	Ⅱ-D	泥岩	①-②-③-④		
727	15	塚	III	4.3	1.9	1.1	8	1.6	1.7	7	10:10.5	數	Ⅱ-B	黄褐色泥岩	①-②-③-④- 25-26-27		
728	186	塚	II	3.3	2.4	1.3	11	1.4	1.4	4	10:10	少	I-D ¹	黄灰色泥岩	①-②-③-④- 25-26-27		

No.	遺物 No.	出土 地区	解説	表面の計測(cm, g)			裏面の計測(cm)					番号	等級分類 群一類	石 材	「法規」の品 No.	備 考
				長径	短径	厚さ	重さ	たて	よこ	角数	たて:よこ					
729	197	塚	Ⅱ	3.9	2.2	0.6	12	1.3	1.6	4	10:12	芳+	I-C ¹	黄灰色泥岩		
730	177	塚	Ⅱ	4.1	2.1	1.3	10	2.1	1.4	5	10:6.5	酒	V-A	黄灰色泥岩	①④⑤⑥⑦	
731	76	塚	Ⅲ	2.9	2.5	1.1	7	1.3	0.9	4	10:7	男	II-B	黄褐色泥岩	①④⑤⑥⑦⑧⑨~⑩⑪~	
732	1232	塚	ベクト	3.6	2.1	0.6	7	1.6	2.0	5	10:12.5	雌	III-B	黄灰色泥岩	①~⑩	書面2文字
								1.4	1.0	5	10:7	雌	III-D		①②③④⑤~⑩⑪	
733	752	土被		4.0	3.8	1.8	30	2.0	1.7	4	10:8.5	同	I-E ²	灰色泥岩	①~④⑤⑥⑦~⑩	書面2文字
								2.1	0.8	5	10:4	尊+	I-E ¹		①~④⑤⑥⑦⑧	
734	1227	塚	ベクト	6.2	5.8	2.9	105	1.3	1.2	6	10:9	佛	VI-C	黄灰色泥岩	①~⑩	書面2文字
								2.1	0.8	5	10:4	佛	VI-B		①~④⑤⑥⑦⑧	
735	599	斜面		4.6	2.4	1.8	23	1.2	1.0	6	10:8	?	VI-B	黄灰色泥岩	①~⑩~⑪~⑫~⑬~⑭	書面2文字
								1.2	1.0	6	10:8	出	VI-D		①~⑩~⑪~⑫~⑬~⑭	
736	21	塚	Ⅲ	5.6	4.8	2.1	54	1.2	1.2	5	10:10	専	II-B	灰 武 岩	①②③	書面2文字
								1.3	1.7	6	10:13	液	II-B ²		①~⑩	
737	459	塚	Ⅲ	4.8	3.1	0.8	15	1.7	1.3	5	10:7.5	同+	VI-B	黄灰色泥岩	①~⑩	書面2文字
								1.7	1.3	5	10:7.5	同+	VI-A		①~⑩	
738	190	塚	Ⅱ	6.1	2.8	1.5	31	2.0	1.5	4	10:7.5	樹	I-B ⁴	黄灰色泥岩	①~⑩⑪~⑫⑬⑭⑮~⑯~⑰	書面2文字
								2.3	1.9	6	10:8	樹	II-A ⁵		①~⑩⑪~⑫⑬⑭⑮~⑯~⑰	
739	1064	表面		8.1	6.9	2.0	120					?	VI-D	黄灰色泥岩	南無阿彌陀佛+	
740	1279	塚	ベクト	8.3	6.5	4.3	270	1.8	1.0	4	10:5	氣	II-A ¹	泥 岩		表面2文字
								1.5	1.4	5	10:9	氣	VI-C			
741	514	塚	Ⅲ	5.5	4.6	1.6	56	1.3	0.5	5	10:4	?	VI-D	黄灰色泥岩	①~⑩	書面2文字
								1.4	1.1	5	10:8	?	I-A ⁶			
742	905	土被		4.0	2.9	1.7	26	1.7	1.4	4	10:8	?	VI-D	泥 砂 岩		
743	305	塚	Ⅱ	2.8	2.1	1.4	10	1.4	0.5	4	10:3.5	梵	VI-D	黄色粘板岩	①~⑩⑪⑫⑬⑭~⑯~⑰	
744	512	塚	Ⅲ	3.6	2.2	1.6	17	1.2	1.1	8	10:9	?	VI-B	黄灰色泥岩		
745	780	土被		3.7	3.3	1.6	26	1.6	2.0	3	10:12.5	?	I-B ²	黄灰色泥岩		
746	45	塚	Ⅲ	3.2	2.3	1.4	12	2.0	1.7	7	10:8.5	?	II-A ²	黄灰色泥岩		
747	903	塚	Ⅲ	3.5	2.3	1.8	16	1.7	1.3	5	10:7.5	?	III-C	泥 岩		「土壤剖面判別法」
748	861	塚	Ⅲ	3.6	2.2	0.9	10	1.4	1.1	5	10:8	?	VI-B	灰色泥岩		
749	1028	塚	Ⅲ	3.7	2.0	2.1	25	1.2	1.7	4	10:14	?	III-A	泥 岩		
750	844	塚	I	6.1	4.0	3.3	69	2.9	1.2	3	10:4	?	VI-C	黄灰色泥岩		
751	763	土被		5.6	2.7	2.5	58	1.6	1.7	5	10:10.5	?	VI-A	灰色泥岩		
752	1171	塚	Ⅱ	4.2	2.8	0.8	12	1.5	1.7	5	10:11	?	V-A	黄灰色泥岩		
753	399	塚	Ⅲ	3.8	3.2	1.9	21	1.6	1.8	5	10:11	?	VI-A	黄灰色泥岩	①~⑩⑪⑫⑬⑭~⑯~⑰	
754	42	塚	Ⅲ	4.5	2.2	1.7	26	1.4	1.1	5	10:8	?	VI-A	黄灰色泥岩	①④⑤⑥	
755	939	塚	Ⅲ	4.1	1.4	1.2	5	1.3	1.0	6	10:8	?	VI-C	黄灰色泥岩		
756	888	塚	Ⅲ	4.4	2.2	2.3	27	2.1	1.8	5	10:7.5	?	V-A	泥 岩		
757	436	塚	Ⅲ	3.1	2.2	1.2	10	1.2	0.5	4	10:4	?	I-C ¹	黄灰色泥岩		
758	375	塚	Ⅲ	4.5	2.0	1.4	16	1.2	2.0	4	10:16.5	?	V-C	黄灰色泥岩		
759	1230	塚	ベクト	3.0	2.0	1.1	6	1.4	1.4	4	10:10	?	VI-A	黄灰色泥岩		
760	1139	塚	Ⅲ	3.6	2.5	1.7	15	1.7	1.0	5	10:6	?	VI-C	黄灰色泥岩		
761	1020	塚	表面	6.1	5.0	2.4	77	1.6	1.8	6	10:11	液	VI-C	灰色泥岩	①~⑩⑪~⑫⑬~⑭	

No.	遺物 No.	出土 地区	層位	磚の計測(cm, g)			墨書の計測(cm)				墨書	筆跡分類 群一類	石 材	『法華經』の「品」No.	備 考
				長径	幅径	厚さ	重さ	たて	よこ	角筋					
762	416	塚	Ⅲ	7.9	3.6	3.0	120	1.4	1.7	4	10 ¹²	墨	Ⅲ-A	礫岩	①~④
763	430	塚	Ⅲ	-5.4	1.9	1.5	16	1.2	0.8	7	10 ⁷	?	Ⅲ-B	黄灰色泥岩	
764	572	斜面		5.5	3.3	1.5	39	1.1	0.9	5	10 ⁸	墨	Ⅲ-C	黄灰色泥岩	③④⑤⑥~⑦~⑧~⑨
765	759	土壠		2.8	2.0	1.9	11	1.5	1.2	5	10 ⁸	墨	Ⅲ-C	泥 岩	①~④⑥~⑨~⑩
766	1236	塚	ペクト	2.4	1.7	0.9	5	1.6	1.4	5	10 ⁹	?	Ⅲ-C	黄灰色泥岩	
767	1284	塚	ペクト	4.2	2.8	1.3	16	1.1	0.7	4	10 ⁶	角	Ⅲ-C	黄灰色泥岩	②④
768	1216	塚	ペクト	2.5	1.5	2.0	8	1.2	1.6	5	10 ¹⁵	吹	Ⅰ-D*	黄灰色泥岩	②④⑨
769	597	塚	斜面	3.3	2.3	1.0	8	0.9	1.1	5	10 ¹²	鬼	Ⅲ-B	黄灰色泥岩	①~④⑤~⑦~⑧~⑨
770	169	塚	Ⅱ	3.6	2.1	1.2	9	1.4	1.4	5	10 ¹⁰	浮	Ⅰ-D*	黄灰色泥岩	②④⑤⑥⑦~⑨~⑩
771	1015	塚	Ⅲ	2.9	2.2	1.3	10	1.4	1.5	3	10 ¹¹	?	Ⅲ-C	泥 岩	
772	840	塚	I	5.4	3.2	1.6	38	1.1	0.9	4	10 ⁸	?	Ⅲ-D	黄灰色泥岩	
773	159	塚	Ⅲ	4.7	3.2	2.4	39	1.3	1.5	4	10 ^{11.5}	氣	Ⅲ-A	黄灰色泥岩	③④⑤⑥⑦⑧⑨
774	1287	塚	ペクト	7.1	5.1	1.3	42	2.4	2.1	6	10 ⁹	晋	Ⅲ-D	黄灰色泥岩	①~⑨~⑩
775	1276	塚	ペクト	3.5	2.8	0.9	5	0.9	0.8	5	10 ⁹	?	Ⅲ-A	黄灰色泥岩	
776	367	塚	Ⅲ	3.7	2.1	1.7	16	1.7	1.1	5	10 ^{6.5}	?	Ⅰ-D*	黄灰色泥岩	
777	1133	塚	Ⅲ	3.7	3.0	0.7	9	1.3	1.2	4	10 ⁹	?	Ⅲ-C	黄灰色泥岩	
778	384	塚	Ⅱ	4.0	3.3	1.0	18	1.2	1.5	6	10 ^{12.5}	族	Ⅲ-C	黄灰色泥岩	①④⑤⑥⑦⑧⑨⑩
779	1285	塚	ペクト	5.4	3.6	1.4	19	1.1	1.1	6	10 ¹⁰	?	Ⅲ-B	黄灰色泥岩	
780	314	塚	Ⅲ	6.2	4.4	2.3	92	1.3	1.6	5	10 ¹⁴	?	Ⅰ-A*	黄灰色泥岩	
781	108	土壠	Ⅲ	5.0	3.4	1.6	33	1.5	1.7	6	10 ¹¹	墨	Ⅲ-C	黄灰色泥岩	②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩
782	1208	塚	ペクト	4.3	3.9	1.1	16	1.0	1.7	4	10 ¹⁷	?	Ⅲ-A	黄灰色泥岩	
783	1258	塚	ペクト	3.1	2.2	1.5	9	1.2	0.9	4	10 ^{7.5}	台	Ⅲ-C	泥 岩	
784	828	塚	Ⅲ	2.9	2.3	1.4	15	1.5	1.5	6	10 ¹⁰	晋	Ⅲ-A	黄灰色泥岩	③④⑤⑥⑦⑧
785	73	塚	Ⅲ	7.2	4.7	2.0	50	1.6	1.2	6	10 ^{7.5}	?	Ⅲ-B	黄灰色泥岩	①~④
786	263	塚	Ⅲ	6.4	3.1	1.0	22	1.2	1.2	4	10 ¹⁰	灰	Ⅲ-B	泥 岩	①②③⑦~⑧⑨⑩
787	238	塚	Ⅲ	5.2	2.1	1.5	22	2.1	1.2	5	10 ⁶	墨	Ⅲ-C	黄灰色泥岩	③④⑤⑥
788	119	塚	Ⅲ	4.4	1.7	1.5	11	1.9	1.3	6	10 ⁷	晋	Ⅲ-B	黄灰色泥岩	①~⑨~⑩
789	1239	塚	ペクト	3.1	2.2	0.3	3	1.2	1.6	6	10 ¹³	?	Ⅲ-C	黄灰色泥岩	
790	611	斜面		3.5	3.0	0.8	6	0.9	1.5	6	10 ¹⁷	?	Ⅲ-B	灰 色 泥 岩	
791	460	塚	Ⅲ	5.1	3.5	1.0	20	1.2	1.5	5	10 ^{12.5}	?	Ⅲ-C	泥 岩	

次に判読可能な文字791ヶ全部について、重複するのを煩を厭わずその文字が28品にどれだけ採られているかを集計したのが次の第3表である。

第3表 覚範寺出土経石集計表

品	第1	第2	第3	第4	第5	第6	第7	第8	第9	第10	第11	第12	第13
	218	212	234	201	172	162	210	190	147	173	185	188	161
品	第14	第15	第16	第17	第18	第19	第20	第21	第22	第23	第24	第25	第26
	199	192	181	192	157	183	159	160	114	198	171	167	142
品	第27	第28	計										
	176	170	5,014										

これを見ると、第3「臂論品」が1位で、順次第1「序品」、第2「方便品」、第7「化城論品」、第4「信解品」、第14「安樂行品」、第23「薬王菩薩本事品」、第15「從地涌出品」、第17「分別功德品」(第15と第17は同数)、第8「五百弟子受記品」、第12「提婆達多品」と10位まで以上の順位となる。これと第1表でみたものとを比較したとき、やはり第3「臂論品」が圧倒的に多く、この品を中心に書写されたものといえるのではないだろうか。但しこれは、判読不能の576ヶを除外した上での考察であることをお断りしておく。

2) 石 材

経塚内から出土した43,715点の小円礫は新第三紀中新世に形成された灰色泥岩、黒色泥岩、灰黑色泥岩等の泥岩製小円礫を使用したものが最も多く、全体の90%以上を占める。既に前述した様に比較的うすい円形もしくは梢円形状の4~5cm単位の円礫を意図的に採集し、経石に利用している。これらの円礫は米沢西部の鬼面川とその各支流(大樽・小樽・綱木・太田川)の中流域に数多く認められるが、逆の米沢東部の梓川(天王川)、松川(最上川)、羽黒川には少なく、むしろ安山岩、花崗岩、玄武岩、凝灰岩等の火山性岩石が主体をなす特徴がある。

よって、経塚に使用した円礫は覚範寺にほど近い鬼面川一帯より運搬したと推測するのが自然と考える。ところが実際に一字一石経として選出した円礫は単なる泥岩だけではなく、もう一つの大切な条件を必要としていた。

経塚内の43,715点の円礫のうち、文字の書かれてあった1,367点の円礫を分析すると約96%の円礫に暗赤褐色及び茶褐色等に変色した酸化鉄分が付着しているのである。変色礫(以下そう呼ぶ)は土中に含む多量の鉄分が水に溶け込んで酸化化合物した第二酸化鉄が石に付着したものであり鬼面川の支流には認められず、むしろその枝流となる落合川最上流、おその川、太田川上流域の一部と成島丘陵北側に分布する礫岩内に含まれている。変色礫の中には第二酸化鉄が付着する過程で部分的に変色している泥岩も比較的多く存在し、これは礫の一部が川床に突き刺さった

状態で上部のみが変色したものである。その様な素材を利用する際もわずかに変色した箇所内に文字を書き込むと言った配慮である。今回経塚内で検出された変色円礫の中で文字が認められなかったものは一点も存在しなく、明らかに変色した泥岩小円礫を一字一石経の石材として選定していたことが判る。

3) 筆 跡

今回検出された一字一石経をみると楷書を主体に行書、草書の順に認められる。この中には若干の異体文字と梵字、それに判読不明の文字31点も含まれる。文字は紙質でもかなりの程度に影響される様に筆の接する素材の吸収性によって微妙に文字全体の輪郭が変化する。筆者らも吸収性を知るために第二酸化鉄が付着した変色礫とそうでない二通りの泥岩サンプルを用いて潤筆と渴筆で「大」の文字を実験的に書いてみた。

1. 変色礫に潤筆で書いた場合→紙（和紙）よりも吸収性が弱く、文字全体が丸く太い輪郭となって、起筆は中鋒的な印象を与える。
2. 変色礫に渴筆で書いた場合→順応性に富みしなやかな文字が描くことができる。
3. 変色礫に潤筆と渴筆の中間で書いた場合→側鋒的でやや太いが美しい文字が描きやすい。
4. 無変色礫に潤筆で書いた場合→墨の吸収が早く、明瞭な文字を描くことが可能であった。
5. 無変色礫に渴筆で書いた場合→吸収性に富み全体的にかすれ、右はらい（磔）は特に顕著である。文字を描くのは不可能である。
6. 無変色礫に潤筆と渴筆の中間で書いた場合→全体的にはうすいが文字の輪郭は明確で、礫はややかれると言う特徴があった。

以上からすると鉄分が付着した変色泥岩は潤筆については若干の注意を要するが、潤筆・渴筆にも順応が可能で、逆の変色を有さない泥岩は吸収性が著しく、潤筆以外は美しい文字を描くのは極めて困難であるという結果を示す。また泥岩の大半は暗灰色や黒灰色と言った暗い色調であり、素材の石に墨汁が順応して書いた文字が見えにくいと言う難点もある。従って、変色を有さない泥岩（別の河原石を使用すれば問題はない）を経石として利用するのは無理である。

さて筆跡の分類に入るが、上記の実験の成果も吟味して述べてみることにする。今回検出された一字一石経は1,367点で実際に判別、もしくは図化可能であった経石は791点で二字以上の複数文字、表裏に文字を有する経石をも加えると最終的な図化は798点である。

便宜的に文字の上下と横幅を把握するために方形状のワクを設定し、文字全体の形状を知るために角線を付け加えた。

(a) 文字の分類

ここでは文字全体のバランスを中心に、書体の特徴、文字の美しさ、筆使いと筆癖、文字の大小から筆者なりに検討を加えたい。

I群文字

楷書を主体にしたグループで、検出された経石文字の中では最も美しく、一字一石経を構成する中心人物の筆跡と考えられる。若干問題はあるが、筆内の太さと文字のバランスから次の5類に分けた。

I群A類 [第41図1~53]

潤筆と渴筆のほぼ中間、筆の穂先の弾力を生したバランスのとれた一群である。細かな筆使いからA¹類~A⁶類に細別する。

A¹類 (1~15)

1と2の「香」に代表されるごとく、磔と掠の比が左右対象となって最も美しい筆跡である。

A²類 (16~26)

A¹類と類似はするが、22の「舍」や24の「合」と言った「へ」のバランスが悪く、19の「香」もA¹類と比較すれば起筆や磔の構成に違いがみえる。

A³類 (27~30)

弱々しい筆使いで、字高（文字の継位の高さ）が低く、27の「入」や29の「大」の様に大きく右はらいの磔に特徴がみられる。

A⁴類 (31~36)

一見A¹類・A²類に類似するが、やや肉厚で潤筆気味となり、32~34の磔が異状にのび文字全体が右さがりの状態となっている。

A⁵類 (37~40)

毛筆の穂先を使った弱々しい筆使いはA³類と同様であるが、字高が高いことで一応区別したが同一執筆者の可能性が高い。

A⁶類 (41~53)

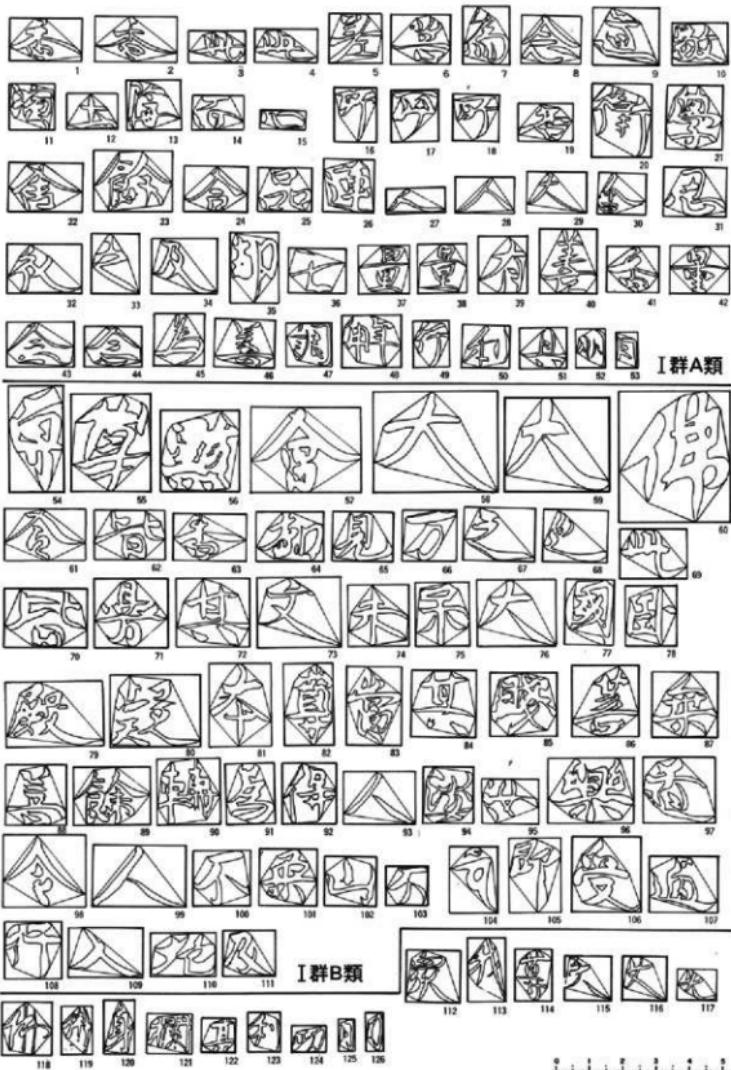
やや潤筆気味の毛筆を用いてすばやくしなやかに書いている。穂先の先端を利用した点状の筆使いと内弓化する磔・掠が特徴で、同じ「念」でもA¹類の8と本類43・44を比較すれば明らかである。

I群B類 [第41図54~111]

基本的にはA類と同様であるが、文字の太さによってあえて区分した。楷書を主体に一部行書と異体文字・梵字を含む。5類に細別した。

B¹類 (54~60)

潤筆で堂々とした大柄な筆力字体であり、58・59は右はらいの特徴を有し、57の「會」は先のA¹類の「香」と同じ様に字体の形状がソロバン玉状の平均した菱形を示すことからすると、A¹類と同筆と考えられる。また54・55の「尊」や60の「佛」も起筆や終筆の輪郭線の筆使いに相違が



第40図 興福寺庭出土一字一石經筆跡分類図(1)



第41図 覚範寺廃寺跡出土一字一石經筆跡分類図(2)

みられ他筆者の可能性がある。このことは後の分類の中でふれることにする。

B^a類 (61~81)

潤筆と渴筆の中間で最も美しい字画として表われているグループである。起筆や走筆、終筆等の特徴は中錐的であり、A^a類と基本的には同じと考える。

B^b類 (82~95)

行書を中心としたグループであるが、筆使いはB^a類と大差は認められない。A^a類の23と本類の81の「餘」は同事である。

B^c類 (96~103)

楷書と行書のグループで、字高の比が横位に対して短く、全体的には正方形状の字体を一括した。また100の「不」、102の「山」にみられる勾や96の「樂」、101の「桑」にみられる縱画の逆筆によって生じられた終筆の瘤も本類の特徴とされる。

B^d類 (104~111)

強い筆力で剛直な線の文字を一括した。基本的にはB^a、B^b類に近いものと考えるが、105の「即」や108の「行」にみられる縱画の終筆に近づく程ふくらみを呈する（鉄柱）のは本類のみである。

I群C類 [第41図112~126、第42図127~139]

細筆で弱々しく、先のA^a類に近い特徴をもつ。C^a~C^c類の3類に細別した。

C^a類 (112~117)

長身の字高で、右はらいの特徴をもち、磔の先端が細長い尖状を有する。

C^b類 (118~126)

渴筆で118・119の「佛」と121の「禰」にみられるごとく、縱画の終筆にかすれが生じ120の「身」、125・126の「月」、「月」の勾を有するのも本類の特徴と言える。

C^c類 (127~139)

行書に近い書体を示し、縱画の終筆が懸針を呈するのを基本としている。潤筆と渴筆の中間でC^a類と同じ用筆とみられる。

I群D類 [第42図140~167]

楷書を主体としたグループで、A^a~A^b類、B^a~B^c類の様な美しい文字と比べると下手であるが全体的にバランスのとれた能書と言える。4類に細別した。

D^a類 (140~149)

穂先の先端を使って静に筆を下げる用筆であることから、起筆が尖状を有する様になる。終筆も同じ様に静に力を抜く懸針を示すものが多い。また140・141の「佛」や142・143の「華」にみられるごとく、折れに丸味を呈する特徴もある。

D²類 (150~155)

中鋒的な右はらいの縁を特徴とするグループを一括した。150・151の「大」は全体的な形状が四辺三角を有し、B¹類の59やB²類の76と共に通する特徴を示す。

D³類 (156~160)

文字全体の上半部が太く、下半部が細い構成を有する158の「復」と157の「弟」、逆に下半部を太くした157の「是」を一括した。157の「是」にみられる右はらいの「正」を「の」状に簡略し、終筆で大きく勾をなすものは、本類が唯一である。同じく156の「王」の横画の終筆と157の「弟」の終筆の勾も同じ様な特徴を示しているものと考えられる。

D⁴類 (161~167)

あえてD¹~D³類にも属さないことから区分したが、基本的にはD²類と同様である。164・165は「成」、「次」であるが、全体的な構図は三角形状を呈しD²類に近いものと言える。

I群 E類 [第42図168~220]

行書を中心とする潤筆の一群を区分した。全体的な文字の構図からE¹類~E⁴類に細別する。

E¹類 (168~173)

最初の起筆に強い筆使いを用することで、偏（左側）全体が力強い用筆となる。旁（右側）は偏とのバランスから横位にスペースを配して調製している。168・169の「妙」はその代表となるが、171の「能」の「ム」や173の「導」の「首」にも表れている。

E²類 (174~182)

側鋒的な用筆法で起筆から終筆に至る走筆の間が短いために、起筆と終筆の両端が尖状を示しているのが特徴である。潤筆気味であることから174~176の同じ「賢」に示す様に、文字の輪郭の強弱が筆使いによって顯著に表れている。

E³類 (183~195)

長身の文字を主にしたグループで、195の「我」を代表する細筆的用筆と191の「婆」、185の「市」の様にE²類的な二通りがある。

E⁴類 (196~204)

字高の比が横位の文字幅と同じ正方形に近い形状を有するグループであり、これまでのE類の文字と比較すれば、若干太い筆使いの感がある。

E⁵類 (205~211)

筆の穂先を使って静に筆を側鋒的に遣出し、懸針的な終筆を行うことによって起筆と終筆の両端が尖状を有する筆使いを特徴としている。この特徴はD類の一部にもみられる筆法であるが、文字全体に及ぶのは本類のみである。

E⁶類 (212~216)

筆使いがE¹類と同様に両端が尖状を有するが、字体が字高いで細い線画を用いていることからあえて区別したが、基本的には同筆の可能性がある。

E¹類 (217~220)

筆使いは先のD¹類に近い特徴をもつが、右に大きい磔と文字全体が斜位に傾くことから一応分けた。

II群文字

丸味のある起筆の一一群を本群とした。潤筆で字体の輪郭が肉厚をもち、一見、マジックやサンペンで書いた筆跡に類似する。文字の大きさからA類とB類に分ける。

II群A類 [第42図221~261、第43図262~278]

文字が太く、肉厚なグループを一括した。起筆や終筆等の筆使いからすれば同一執筆者の可能性が高いと考えるが、文字の大きさからあえて7類に細別してみた。

A¹類 (221~232)

楷書体を基本とし、潤筆で堂々と書いている。マジック様筆跡の典型的な用筆をみせ、字体は正方形状に近く、全体的にまとまった印象を与える。

A²類 (233~239)

起筆は丸味を有するが、磔や掠の一部に尖状をなすものも含まれる。先のA¹類よりも線が細く字高で美しい文字と言える。

A³類 (240~249)

楷書と行書を有し、筆使いはA²類に近いが文字全体の字高は横長で、241の「安」に代表される様につぶれた様な幅広い文字が特徴である。

A⁴類 (250~261)

筆使いはA¹類に近いが、やや細く力強さに欠け、全体的には下手な印象をもつ。

A⁵類 (262~271)

中鋒的な起筆を示しており、文字全体が小さくまとまった感じである。縦と横の比が1:1の正方形状を特徴とする。

A⁶類 (272~274)

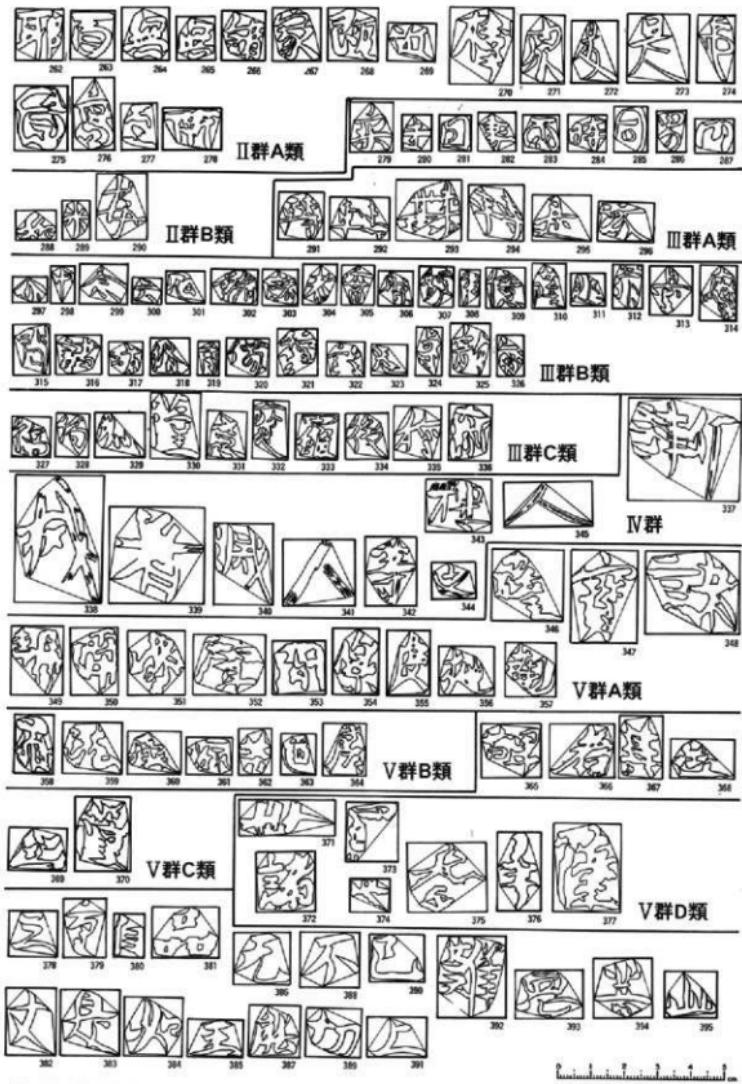
字高で細文字であることから区別した。力強さに欠け、弱々しい筆使いである。

A⁷類 (275~278)

草書のグループを一括した。276の「高」を除けば判読不明であり、筆使いからすればA⁶類の264・265に示した「無」の草書に近いものとみられる。

II群B類 [第43図279~290]

行書を主体にしたグループで、字形が方形状にまとまったサンペン様の筆跡を一括した。



第42図 覚範寺廃寺跡出土一字一石經筆跡分類図(3)

III群文字

筆の穂先のしなやかさを利用して、点状に連続して文字を構成する（点筆とでも呼ぶべきか？）特異な用筆である。起筆や終筆の特徴からすると同一人物の執筆の可能性を大とするが、一応字形の形状と筆痕の大きさから2類に分けた。

III群A類〔第43図291～296〕

本類の中では最も能筆的で、手慣れた感を強くする。

III群B類〔第43図297～326〕

行書、草書を主体にした点様筆使いのグループであり、小さくまとまっている。同一執筆者であることは疑問のないところであるが、行書的なもの（297～301）、草書に近いもの（302～315）、判読不可能に近い草書で惡筆的なもの（316～336）と細別することもできる。

IV群文字〔第43図337～345〕

文字のかすれた楷書体の一群である。渴筆のため筆の穂先が割れたことによって生じたものとみられる。文字は大柄で、同一筆跡と考えられる。

V群文字

行書および草書体を中心とする潤筆書体であるが、手の微かな振動によって文字全体にブレを生じた一群を一括した。4類に細別した。

V群A類〔第43図346～357〕

文字の上半部、もしくは中間位に最大幅をもつグループである。文字全体がツブレ、筆順が明確でない。草書的である。

V群B類〔第43図358～364〕

起筆を強くした用筆のグループで行書を主体としている。文字は小さく、明瞭である。

V群C類〔第43図365～370〕

穂先の先端部を残してばやく書く筆使いと考えられ、振動によるブレは横方向で比較的少ない。起筆の先端が針状に尖っているのを特徴とする。

V群D類〔第43図371～377〕

起筆や終筆の地点で、特にブレが顕著に表われるグループを一括したものであり、全体的に縦画の振動を感じられる。

VI群文字

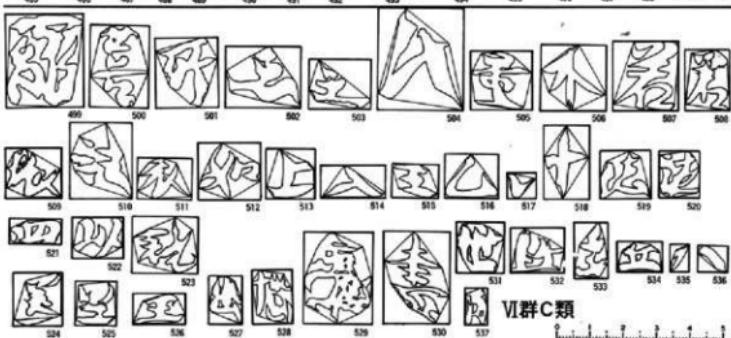
起筆の先端が尖状を有する筆使いの一群である。字体の大小と用筆の全体的な特徴から、中線3mm以内の筆跡を有するA類、2mm前後の細線を有するB類、3mm以上を有するC類、1cm前後の小さい文字を主体とするD類の4類に分類した。楷書を中心に行書、草書の一部が加わっている。



VI群A類



VI群B類



VI群C類

第43図 覚範寺廐跡出土一字一石經筆跡分類図(4)



第44図 覚範寺廃寺跡出土一字一石經筆跡分類図(5)

VI群A類 [第43図378～395, 第44図396～460]

楷書と行書を主体に文字の全体構成が正方形に近いものと、文字が右下りに大きく傾く二通りが含まれる。前者は393の「惡」、398の「不」に代表されるごとく比較的明瞭な字体を示し、逆に後者を代表する396の「敬」や397の「法」、447の「讀」、445の「觀」は右側の旁が異状に傾下する特徴を有しており、悪筆に近い字体と言える。従って、前者の執筆者と後者の執筆者は別人の可能性が高いものと考えられる。

VI群B類 [第44図461～498]

細線をもって書かれたグループで、本群の中では最もまとまった書体として把握される。穂先のしなやかさを利用して、流れる様な走筆法はA類とは明らかに異なる。

VI群C類 [第44図499～537]

潤筆で文字の線が幅広で、字高が短身の一群を本類とする。楷書と行書、草書の二者を基本としている。前者は500の「法」に示す様に右下りの楷書による筆法を有し、後者の519・520は草書による「法」をなし、書体が異なっており、基本的に楷書を中心とするグループと行書、草書を主体とするグループに大別されるのかも知れない。

VI群D類 [第45図538～554]

字体が方形に近い細筆のグループである。字高が1cm前後と小さい文字を中心とするものであり、起筆の筆使いからすればB類に属するのかも知れない。

VII群文字

先のII群文字の特徴である起筆と終筆が丸味を有する筆法と、I群文字のしなやかな筆使いを示す両者を合わせた中間的な筆使いの一組である。楷書を中心に、一部行書と草書が含まれている。文字の大きさ、全体のバランス、筆使いの相異から4類に細別した。

VII群A類 [第45図555～594]

太線を中心とする大柄の書体であり、潤筆で堂々と描いている。起筆は中鋒的で固い印象を与えるが、文字全体のバランスが悪く、581・560の「間」にみられる左の偏を簡略したグループと短身が異状に肉厚な563の「如」、562の「生」、行書で、悪筆的な556の「餘」、583の「皆」、579の「成」、楷書でやや中肉の570・573の「行」、575の「三」、568の「退」、それに楷書で丸筆、方形状を有する572の「侍」、571の「時」と言う風に大きく四種類の特徴が存在している。ここではあえて細別しないが、同一筆跡と考えるは困難で、少なくとも4人以上の執筆者によるものとみたい。

VII群B類 [第45図595～650, 第46図651～686]

楷書を主体とした一群で、潤筆と渴筆のほぼ中間を用いた美しい文字のグループである。基本的には先のI群B類の書体に近く、同一人物の可能性も十分考えられる。



第45図 党範寺廃寺跡出土一字一石經筆跡分類図(6)

V群C類 [第46図687~768]

楷書と行書、草書のグループであり、左側の偏と右側の旁とのバランスが均一ではなく、懸筆的で下手な印象を強くする。

V群D類 [第46図769~798]

最後の類として、細筆で比較的明瞭な一群をまとめた。I群A類に近い手なれた筆法を示しており、同一執筆の可能性をもつ。

(b) 考察

ここでは一字一石に書かれた文字の筆跡から同一執筆者と執筆者数を検討してみたい。既に述べている様に筆跡としての分類はⅢ群23類に区分し、必要に応じてさらに數類に細別した。しかし書の素材となる対象は円礎であり、微妙な筆使いによって別的な書体になる可能性も充分に予測される。従って、筆者の分類した23類がすなわち23人の執筆とはならないし、分類した基準も妥当とは考えていない。今回はその点も考慮し、判読したすべての文字を図化し、文字の種類別の実測図と個々の文字の全体的形態、縦位と横位の比率を明確にするために分類表と分類図を加えておいた。分類の不備や表現法の誤りは上記に免じて各段の御配慮をお願いし、最後のまとめとしたい。

今回の文字の分類は、当覚範寺の開山和尚である虎哉禪師の筆跡が存在するかにある。虎哉和尚は第46図に示した如く、大きく右にはらう縦と左の偏の終筆から右の旁への起筆に連筆する特徴が顕著であり、左はらいの掠や縱画(努)の終筆にも掠は通常の文字よりも少なめで、鉄柱的な終筆が多い。努も大半は鉄筆を用い、全体的には細文字でしなやかな印象を有する。参考のため第46図に仙台覚範寺藏の虎哉禪師真筆による「巧對類編」の一部を加えておいた。残念ながら執筆年代は不明であるが虎哉の特質を表わすものの一つと言える。

さて虎哉自身による真偽は別として、今回検出された一字一石経から類似文字を選出すれば、I群文字のNo70の「皆」、No73の「文」、No187の「之」、No195の「我」、No217の「是」、V群文字のNo771の「之」らがかなり近い筆跡である。しかもそれらは分類したI群文字内に存在することから考えると、I群文字として分類した中の執筆者の一人であることは確かであり、さらに付け加えれば細分したI群B類、I群E類・E'類の文字を書いた人物となる。前記した様に色々な問題も多くここでは断定するまでは至らない状況にあるとしか言えない。ただしD地点の調査結果では一字一石経塚がD地点と同一時に構築されたことは明らかで、開山和尚が主体となって経塚を造営したと推測するのは自然である。したがって一字一石経内に虎哉自身の執筆による文字が存在する可能性が高く、あえて付け加えればI群文字の一部に可能性有りとだけしておきたい。

最後に同一執筆者について検討してみる。文字の筆法と用筆の相異から推測すればI群C類、

遂之殊耳。蓋哩異於心散為四端焉。
 善氣實於人身以身九竅百骸皆民物
 所固也。察斯理之於于可珠吊是氣
 散于万物者比類為偶屬偶對支堂
 外乎天機自然之巧哉。諸君所歸治亦
 人心物理固然之天得不同極乎觀

余秋臺每長食自師恒思充補於世用迺
 以平日潤之父先師大考之經文此稿或出
 手已間亦有成于予深向者隨存隨筆之
 門以數集而成帙。但巧對類編篇幅過
 宇乎不在三才之首。有天以則有人物。人而
 時移四方人富體充為切要。凡服食居止器

覺範寺虎哉禪師真筆「巧對類編」(仙台市覺範寺藏)



第46図 覚範寺虎哉禪師真筆「巧對類編」、覺範寺出土経石による「法華經」抄出復元図

丸味を有するⅡ群A類、点筆様の文字を有するⅢ群B類、ブレ様の筆跡を有するV群A～C類等は明らかに同一執筆と区分される。さらにⅥ群A類、Ⅶ群B類、Ⅷ群C類、Ⅸ群A類もおむね同一執筆と考えて誤りはないだろう。ただし、Ⅰ群A類とB類内には同一執筆者が共存している可能性が高く、Ⅰ群D¹～D⁴類、Ⅰ群E¹～E⁴類、Ⅱ群A¹～A²類、Ⅱ群B類、Ⅲ群C¹・C²類、Ⅳ群、Ⅴ群B～D類らは明らかに同一執筆として把握したグループに属するものも含まれている可能性もある。その点も考慮してあえて、執筆者数を推定すれば20～30名位の人々によって書かれたものと考える。

IV 結語

第Ⅰ次、第Ⅱ次の発掘調査成果を総合すれば、字切図に示されている字覺盤寺一帯、ことに山麓から平地に面したF地点が井戸の存在や東方部に有する門前の地名からしても、覺範寺の本堂及び庫裡跡の公算が濃厚と言える。また牌所は本堂の後方に位置する字御伊勢林を主体とする南斜面の山陵中腹から山麓の平担面に存し、A地点は伊達輝宗（覚範寺殿）、B地点は遠藤基信（医国院）と考えられ、須田伯耆（揃月庵）、内馬場右衛門（保福庵）の両者はD地点とE地点のいずれかの平担面に存在したとみられる。地名では御伊勢林と記されているが、当時は伊達輝宗にちなんで御伊達林と呼ばれていた可能性が高く、覺範寺の「範」が後に「盤」と変化していることからも「達」が「勢」とのちに変わったと考えても不思議ではない。

遺物ではB地点とD地点の遺構内から美濃系の陶器、土師質のかわらげ、古銭、鉄製器、それに一字一石経が検出されている。陶器、かわらげ類は覺範寺の創建期とほぼ一致する16世紀後半前後の年代が与えられ、時代的な問題はないと言える。

中でもD地点の西南隅から検出された一字一石経塚は文字の分析から「法華經」の經典（28品）のうち觀音經「普門品」ら數品の一部（偈頌等）を写経して埋納したものであり、伊達輝宗らの供養の目的で基かれたものであろう。その年代はむろん不明であるが、我々は輝宗の一周年忌に当る天正14年10月8日の可能性を強く示唆する。おそらく記録には示されていないが、覺範寺の開山も同様とみたい。

以上、簡単に述べてみたが、A地点、D地点の様に後世の破壊を受けて明確な遺構等が残念ながら消滅した部分もあった。時間的な制約もあって、残るE地点や本堂や庫裡、墳墓と考えられる26基の塚も未調査の状況である。よって今回はかなり大掛な説を展開せざるを得なかったことも事実である。今後はこの点も充分検討し、覺範寺廃寺のもの全体像を種々の面から解明していく必要性を強調し、現段階での結語とする。

最後になったが、覺範寺の発掘調査及び本書の作成にあたっては、地元の方々、歓光窟の栗野善雄氏、東北歴史資料館の藤沼邦彦氏等の諸先生、山形考古学会の柏倉亮吉氏、川崎利夫氏には多大なる御指導、御協力を得た。本紙を借り、厚く御礼を申し上げる次第である。

参考文献

- 『勝樂寺遺跡発掘調査報告書』 川崎利夫, 藤島町埋蔵文化財調査報告書第1集 1980年
- 『左沢』 手塚 孝・菊地政信, 米沢市埋蔵文化財報告書第11集 米沢市教育委員会 1984年
- 『研究紀要 7』 愛知県陶磁資料館 1988年
- 『大工道具展』 町田郷土資料館 1974年
- 『日本歴史考古学を学ぶ』(中) 有斐閣選書
- 『法華物語』 境野黄洋 森江書店
- 『一字一石経の世界』 岡本桂典 『季刊考古学』26号 雄山閣 1989年
- 『法華經一字索引』 東洋哲学研究所
- 『異体字の基礎知識』 柏書房
- 『法華經』(上・中・下) 岩波文庫
- 『米沢市史』—古代・中世史料— 資料篇1

図 版



▲覚範寺廃寺跡遠景（東南より望む） 矢印が位置を示す



▲六面塔の笠と土台石（鉢光窟南西にある）



▲A地点全景（東方より撮影）



▲A地点を東方より望む



▲B地点墓塚完掘状況



▲B地点石祠出土状況



▲D地点を西北より望む



▲D地点火葬墳墓完掘状況



▲D地点を南方より望む



▲一字一石疊経塚の断面形態（D地点）

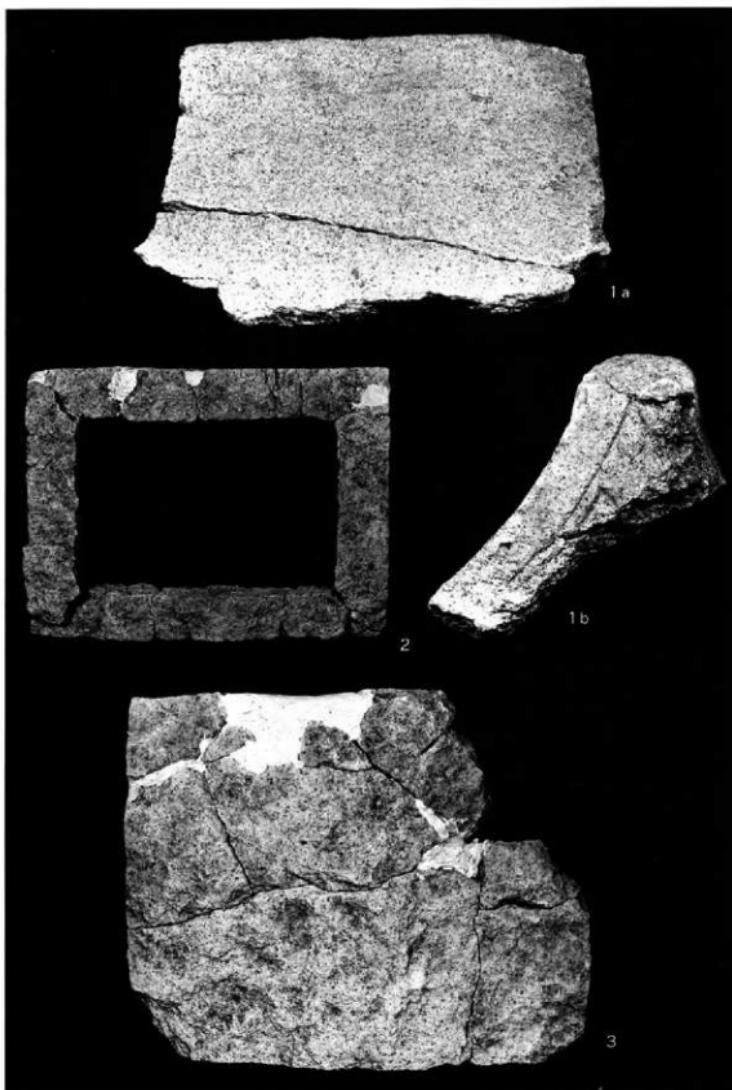
第六圖版 興福寺廁寺跡第一・二次調査の出土遺物（1）

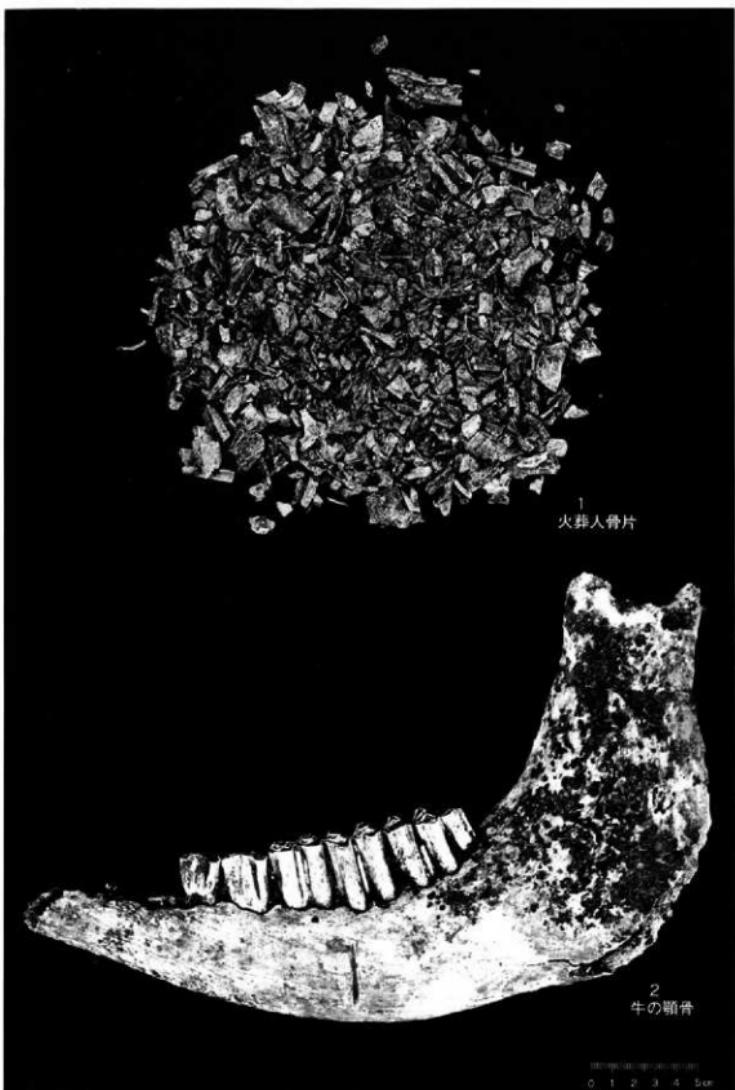


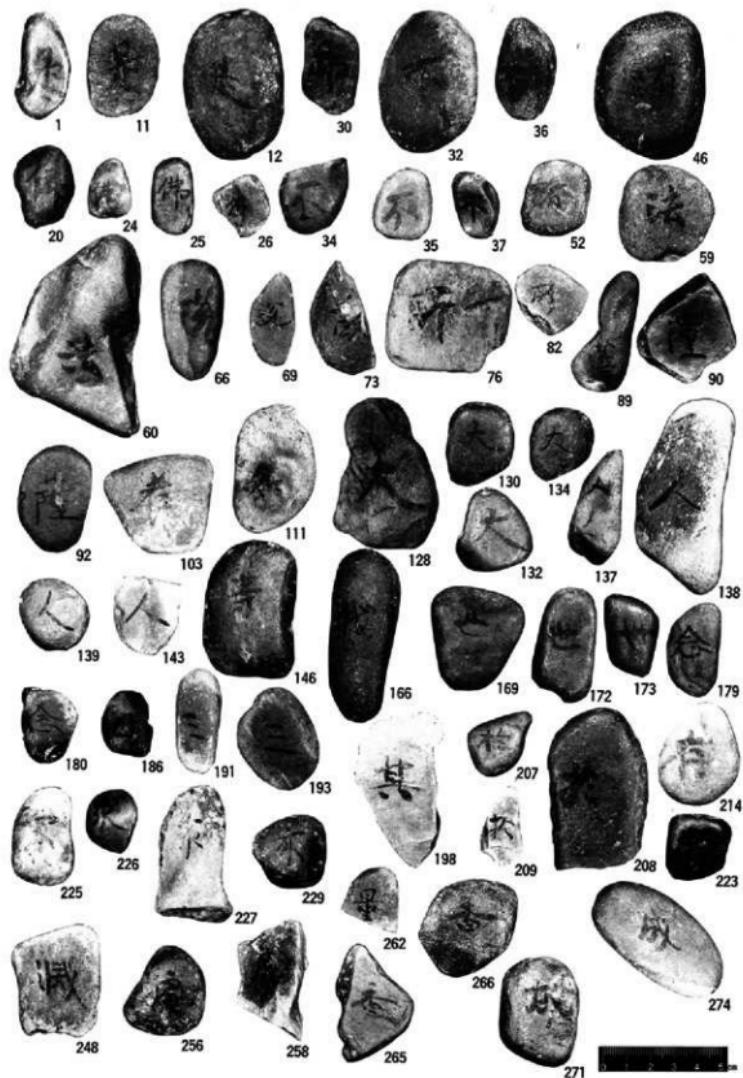
A地点出土2、3、5~10、B地点出土1.11、D地点出土4



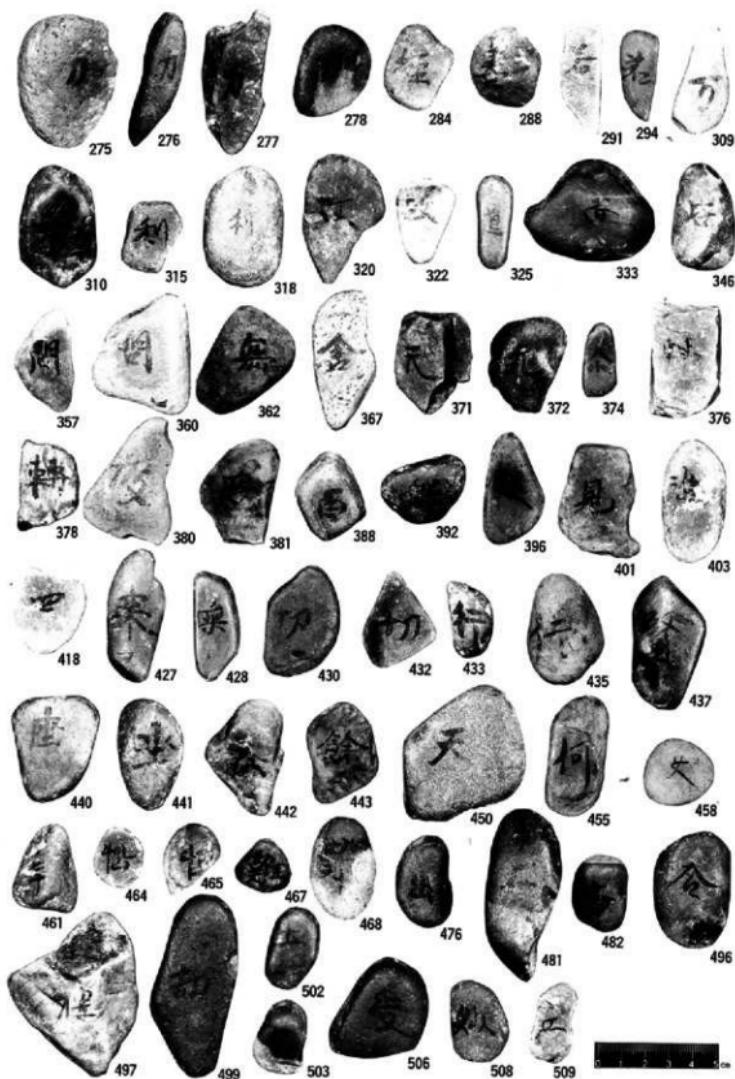
A地点出土2~5・7~13, 37~42 B地点出土1~20~34, 46~48 D地点出土16~19, 43~45







第十一図版 覚範寺麻寺跡第二次調査出土の一文字石經(2)





米沢市埋蔵文化財調査報告書第26集

覺範寺廃寺跡

**第Ⅰ次・第Ⅱ次
発掘調査報告書**

平成元年12月20日 印刷
平成元年12月28日 発行

発行 米沢市教育委員会
米沢市金池5-2-25

印刷 羽陽印刷
米沢市中央3-9-22